

召喚学園の生徒だけど守護獣が異形すぎて邪教徒だと疑われています

だぶすと

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

農村で生まれた少年ヘレシーは、幼少期に突発的な事故で召喚を行った。

目の前に現れたのは優しく温厚な召喚獣。

その召喚獣は、当時まだ幼かった彼の守護獣としてとても良く働いた。

共に暮らし、共に成長していく中で彼らは本当の家族のような関係になっていった。

ある時、庶民では非常に珍しい召喚師の素質を持つ者としてヘレシーは王都の召喚師学園に招かれ、周囲の後押しもあって学園に入学する事になる。

守護獣と共に王都へと訪れたヘレシーは、これから立派な召喚師になる事ができるのだろうか。

「君さ、もうちよつと上手く擬態できない？ そんな格好で王都なんて歩いてたら通報されちゃうよ……」

『響玖カウ纏ヨ謨ー纏ツ蜷医▲纏ヲ纏？ ㇿ纏呐h纏ユ??』

「うんそうだね、手足の本数は合ってるね。次は肉質とか形状も合わせて欲しいかな」

主要人物のビジュアルイメージを活動報告に載せてみました。

※自分の中のイメージを壊したくない人もいると思うので、閲覧は

自己責任でお願いします。

※最新話まで読んでからの確認をおすすめします。

[https://syosetu.org/?mode=kappa
view&kid=293318&uid=324404](https://syosetu.org/?mode=kappa&view&kid=293318&uid=324404)

※カクヨムさん、小説家になろうさんでも投稿しています。

目次

入学式	1
傾倒：レティイシア	7
来訪者	13
普通のビジュアル	17
心服：H・d r ā	25
借りパク聖女	31
コン子さんスイッチ【え】	38
故郷の味	45
女性の褒め方	51
お高いお店	56
必要最低限ショッピング	62
必要最低限ショッピング 後	68
熱：ジエイド	73
博打黙示録ヘレシー	82
男の信念	91
副音声ガイド	104
白昼の衝光	117
歴史見学会	126
邂逅：ジエイド	134
決意：ジエイド	139
悪魔	143
現実：	149
壁：ジエイド	159
人が望んだもの：	167

召喚学園の生徒だけど守護獣が異形すぎて邪教徒だと疑われています

会食 | 176

宇宙貴族 | 185

コン子さんスイッチ【し】 | 191

零距离ブーメランドツジボール | 200

入学式

やあ、僕の名前はヘレシー！

小さい頃に呼び出した守護獣のおかげで召喚師としての素質を認められた僕は、今日からあの有名なヴァリエール召喚師学園に入学する事になったんだ！

召喚師っていう職業はみんなの憧れ！ 国を築き、国を護るとっても凄い人達だよ！ そんな召喚師に自分もなれるんだと思うとワクワクして初日の朝から遅刻寸前まで寝ちやつてたよね！

「——で、あるからして、諸君らのこれからの頑張りに——」

入学式では学園長から有り難いお言葉を拝聴したよ！

内容は薄っぺらくてよく分からなかったけど、周りの生徒達はみんな真剣に聞いていたね！ これからの学園生活を想像して気合いが入ってるみたい！

僕も今日から始まる学園生活の事を考えると、故郷で守護獣が擬態せずに散歩しているのを発見した時のように不安な気持ちになるよ！ 勉強の事もそうだけど、貴族の人達と上手くやっていけるのかってね！

『その例え、ひどくないですか……？蟋ソ纏定ヲ※纏纏上→纏？ ㊦呐窠？！』

あ、ごめんごめん！

でもあの時君の姿を見て気絶したパン屋のお爺ちゃん、二日間も目を覚まさなかったでしょ？ それは紛れもない事実だから結果は受け入れようね！

『女の子を見て気絶する方が悪いと思いません……螂ウ纏ヨ蟄舌？ 蟋ソ纏定ヲ九※跪礼オカ纏呐k譁纏悟』

そんな感じで守護獣と頭の中で話していたら入学式は終わったよ！ そのまま僕達は先生に誘導されて教室に到着したんだ！

前の黒板に席順が書いてあるね！ やっぱり最初は同じ身分の人と仲良くなってから徐々に輪を広げていくのが堅実だと思うし、庶民の子が隣に来てくれると嬉しいなあ！ 召喚師学園には血統書付きのエリートが集まる傾向があるから確率は高くないだろうけどね！

「うわ……私の隣、庶民じゃない。面倒な事にならないかな」

けれど……」

あ！ お貴族サマだ！ どうやらお貴族サマの隣の席になったみたいだぞお！ 美人の隣だなんて嬉しいなあ！ アハハ！

訝しむような半目でこつちを見ているのは、いかにも手入れにお金のかかってそうな長い赤髪を揺らす女の子！ なんだか初手から突っ掛かってきてるけど、真面目に対応すると労力が勿体ないから適当に受け流すのがいいと思うね！

「よろしくー」

「……いや、挨拶する時くらいこつちを見なさいよ」

「よろしくー」

「反応が想像の十倍くらい軽いわ……」

お貴族サマに敬語を使わなくても問題無いのがこの学園の凄いと
ころだよ！

ここの学生は全員平等な身分として扱われて、学びと研鑽だけに集
中できる環境になっていっているらしいんだ！ 学園長のヤマ無しオチ無
しの話でも説明されていたね！

「おい庶民、何をしている！ 俺のレティーシアに近寄るな！」

「うわ。でたわね」

あ！ お貴族サマが増えた！ 入学初日から随分と賑やかだね！

これは楽しいクラスになりそうだなあ！

この少し制服を着崩して粹がったお貴族サマは、隣の席になった女
の子と知り合いみたいだね！ 『俺の』って言うてるくらいだし婚約
者って線もありそうだけど、貴族の嫁ぎ事情なんて昨日の星占いの結
果くらいいどうでもいい話だから深く考えないようにしよう！

「ジェイド……貴方との婚約は解消になった筈よ。そういう言い方は
止めて頂戴」

「レティーシア、俺はその事にまだ納得していない。俺達はきつと昔
みたいにやり直せる」

「親同士が決めた婚約を親同士が解消しただけよ。最初から最後まで
私達の意志なんて無かったわ」

「いや違う。俺が君を想う気持ちは本物だ。どうか考え直してくれな

いか。君からも両親に掛け合つて……」

「こうなるのが面倒なのよ……はあ」

うん……うん。二人で盛り上がりつつあるところ悪いけど、僕の席を挟んで話すのは止めてくれない？ 僕だって終礼前のこの時間を有意義に使って友達を作ったりしたいんだけど？

どうやらジエイド君っていうイキリお貴族サマは、元婚約者である隣の席のレティーシアっていうお貴族サマに今も恋心を抱いていて、彼女の横に僕がいる今の状況が面白くないみたいだね！

だったら貴族特有の発言力で先生に席替えするよう提案すればいいと思うよ！ できれば早急によろしくね！

「……あつ、そうだ。えーつと……ヘレシーはどう思うかしら。彼、早く席に戻った方が良いと思わない？」

「……え？」

「おい庶民、レティーシアから離れると言っただろう！ 彼女はお前のような身分の低い人間が会話していい女性じゃない！」

あ、巻き込まれ事故だ！

これイキリ貴族サマもヤバいけど、隣の彼女も相当ヤバいね！ こんな肯定しても否定しても打首になりそうな質問、良識のある人間なら振ってこないよ！

まあ学園内では生徒は平等っていう決まりがあるから今すぐ大事にはならないだろうけど、僕が急に登校してこなくなったら君のせいだからね！

「えつと、揉め事なら召喚師らしく勝負で白黒つけなければいいんじゃないかな？」

「召喚師らしい勝負……それは守護獣を使つての決闘という事かしら。貴方、意外と荒事に躊躇しない性格なのね」

「ほう。いいだろう、その勝負受けてやる。俺が勝ったらお前は二度とレティーシアに近付くな。それでいいな？」

「は？ ……え？ いやいや、僕が言ったのは君達二人が勝負すればいいんじゃないかっていう話で……」

「ふふ。グレード家の守護獣は当主が代々継承してきた召喚獣だから

悔れないわよ。それじゃあ、私は放課後に予定があるから彼の相手はよろしく頼むわね」

あつ、見て見て！ 隣のお貴族サマが僕に微笑んでくれているよ！
とつても可愛いね！ こんな美人の笑顔が見られるなんて入学
早々得しちやつたなあ！

……おクソアマあ！

なんで僕が初対面の貴族と決闘するって話になってるの？ 完全
に無視しなかつた僕の負け？ こんな理不尽な事ある？

僕はあまり他人のことを嫌いになるタイプじゃないけど、隣の彼女の事は嫌いになれそうな気がするよ！ 新しい自分を発見しちやつたね！ 人との出会いに感謝！ 召喚師学園最高ツツ!!

『縛も控しか縛かゆして？いつ？か秀私九のb事雖嫌後い』縛な才つ縛た工り縛しま『縛す溢か』縛……う』

いや全然？ 君はなんというか……外見以外は人間の基準でも素晴らしい女性だと思うよ。ホラーが苦手な人は見るとビツクリしちやうから、もう少し擬態は上手くなってほしいけどね！

「この決闘、グレード家次期当主のこの俺が受けて立つ。使用人に召喚場を用意させておくから、そこで放課後に決着をつけるぞ。二度と舐めた事ができないよう俺が直々に教育してやる……!」

「あら怖い。ヘレシー、陰ながら応援しているわ」

「……明日さ、学園内でのパートナーを召喚する最初の授業があるよね？ 家元から継承できる守護獣より、自分だけの力で呼び出したそっちの召喚獣で決闘した方が正々堂々とした実力勝負って感じで良いと思わない？」

なんだかもう決闘は回避できそうにないから、せめて守護獣の姿を見せなくてもいい展開になるよう頑張つて説得してみるよ！ 守護獣同士の決闘なんて実家の太さを競うだけで、召喚師の勝負としては意味が薄いもんね！ プライドの高いお貴族サマならちゃんと自分の実力で決着をつけたいよね！

「いいや駄目だ。明日まで待つ事はできない。たった一日でもレティーシアに庶民の影響を与える訳にはいかないからな」

「……じゃあ……この席、替わろうか？」

「は？ ちょっと貴方……」

「舐めるな。庶民の情けなど受けん。座席を交換するのはお前との決闘に勝つてからだ！ ……待っていてくれレティーシア。明日からは俺が隣で君を守ってみせる……！」

「こつちにも飛び火してきたのだけれど」

面倒事を押し付けておいて自分だけ高みの見物なんて許さないよ！ 死ぬ時は一人でも多く道連れにしろっというのが母さんの教えだからね！

そうして決闘を宣言するだけして、イキりお貴族サマは自席に戻って取り巻きのクラスメイト達と話し合いを始めたよ！ 戦いの作戦でも考えているのかな？ あんまり見ているとまた絡まれちやいそうだからこれ以上は気にしないでおこうつと！

隣の席から聞こえてくる小言を無視しつつ待っていると、担任の先生が教卓に上がって終礼が始まったよ！

内容は……薄味！ 想定通りの普通の挨拶！ 終礼終わりッ！

という訳で放課後になったんだけど、決闘を無視して寮に帰ろうと思ったら隣のお貴族サマにがちり腕を組まれて逆方向に連行されたよ！

そんなに元婚約者が隣の席になるのが嫌なら最初から僕に喧嘩を売らないでほしいな！ 次からは気を付けてね！

どうやら着痩せするタイプらしい彼女に連れて行かれたのは少し離れた校舎の召喚場！ 中にいたのはイキりお貴族サマ一人だけ！

護衛や取り巻きを連れていない理由は分からないけど、かなりの男っぷりだね！

「ジェイド……護衛はどうしたの？」

「君だけに見ていてほしいんだ。この学園に入学して、初めて俺が勝利する瞬間を」

「ええ……」

ジェイド君、恋に真っ直ぐなのは良い事だけど、何事にも限度があると思うよ！

想像とは違う展開になったけど、今からの決闘を見るのがこの二人

だけなら守護獣を出しても大丈夫かも知れないね！ 貴族の子供
だったら精神修行もしているだろうし、僕の守護獣を見ても大して驚
かないでしょ。

「庶民、初手は譲ってやる。守護獣を呼び出すがいい。……出てこい
！ シルバー！」

ジェイド君が正面に手をかざすと、床に出てきた魔法陣から光が立
ち昇ってトカゲみたいなシルエットが浮かび上がったよ！ 竜種か
な？ 竜種っぽいね！

現れたのは銀色の翼竜！ 翼爪までしっかり手入れされているし、
鱗も磨き上げられていてピッカピカ！ とっても格好良いね！

正直、こうやって愛情込めて仲良くしてる相手と戦うのは抵抗があ
るよ！

『こちらも負けていられません。見せつけてやりましょう……！
縛薙■纏峨b雋？ 縛代※縛？ i 纏後∪縛帙s 縲りヲ九〇縛、縛』

おっ、随分とやる気だね！ 守護獣としては頼もしい事だけど、相

手も強そうだから油断しちゃ駄目だよ！ 頑張ってるね！

『はい、頑張ります！ 頑張りますか？
縛縛？√?? 鬆大シオ纏翫∪縛呻√?? 鬘慕樟』

うん。じゃあ、いこうか！

「おいで、ハッピー」

傾倒：レテイーシア

「おいで、ハッピー」

クラスメイトの少年が、ペットの小動物を呼ぶような気安さで虚空に声を掛ける。

幼少期に名付けたであろう素直な名前の響き。小柄で可愛らしい召喚獣が呼び出されるのではないかと考えた私だったが、その予想は大きく外れる事となった。

——どろり。

気配を感じた瞬間、召喚場の空気が冷たく、そして重くなる。まるで水の中……いや、油の中にいるような不自由さ。息苦しき。

咄嗟に自分の守護獣に助けを求めようとして——寸前で踏み留まった。今呼べばもう会えなくなる。ひとつにされる。そんな強い予感がした。

——ぐちゃり。

虚空に現れたのは漆黒の裂け目。そこから出てきた大きく柔らかい何かが召喚場の中央へと落下し、強い衝撃と水音を立てて楕円形に潰れる。

銀竜と少年の間を遮るようにして落ちてきたのは赤とピンク色の……肉塊？ 馬車ほどの大きさを持つソレは表面に無数の凹凸と突起のようなものを持ち、その窪んだ部分から赤黒い粘液を滲ませ、溶けた体をスライムのように使って這いずりながら移動している。こんな召喚獣……いや、生き物は見た事がない。いてはならない。

視界に入れているだけで全身に鳥肌が立ち、寒気と嫌悪感で手が震える。この世の禁忌に触れたとしか思えない、とても生物として認める事のできない異質な姿。神への冒瀆。

「お、おま、それ、ヒト……なの、か」

私より近くでそれを見ているジェイドが声を震わせる。

その言葉の内容が気になって、本能が訴えかける忌避感を抑えつけて肉塊に目を凝らした。アレが一体何なのかを確かめるために。

そして私は、肉塊の表面に——無数の人間を見た。

「なん……なの、あれ……う”っ。おえ……」

鮮やかな赤は剥き身の人間の肉。無数の顔が、腕が、胸が、脚が痛々しく爛れた姿で寄せ集められ、癒着し、ひとつになっっている。

パクパクと開閉する女性達の口から発せられるのは自らを殺してくれと懇願する声。痛い、苦しいと叫んでいる溶けた顔はどれも悲痛に歪んでおり、いくつもの手や脚が滅茶苦茶に暴れて耐え難い苦痛から逃れようとしている。

ぐるぐると宙に視線を泳がせていた数十にもなる眼球達は、やがて強い敵意を込めた視線を目の前の銀竜に集中させた。

——辛い。悔しい。恨めしい。妬ましい。

肉の牢獄の中で際限なく膨れ上がった行き場のない憎しみは、やがて目の前の傍観者を地獄に引き摺り降ろす理不尽な刃となる。”ひとかたまり”になった者達は、目の前にある平穩を——^{ハッピー}幸せを許さない。

『縛ゆ？ 窶ヲ窶ヲ縹峨△縵工縹ウ縛輔s縹のサ頑律縛ツ縵医m縛励？ 縛企。控∠縛励∪縛吮？ ヲ窶ヲ』

空間を斬り裂くような甲高い声が無数に寄せ集まった人間の口から発せられる。それは聞く者の恐怖心を煽り、自らの怪物性を高める不浄の鳴き声。

「あ……あ……、うぷ……っ」

気付いた時には腰が抜けていた。今すぐにこの場から離れなくてはという本能がようやく機能したところで立ち上がれなくなり、五感全てから絶え間なく流れ込んでくる狂気から逃げる事もできず延々と精神が犯されていく。

今までの人生で少しずつ培ってきた常識が、性格が、自我が、何か恐ろしいものに塗り替えられていく感覚。込み上げる胃酸を震える手で押さえたのは最後に残った自尊心か、それとも新たに植え付けられた人格か。

「先手は譲ってもらえるみたいだから、まずは胸を借りるつもりで軽く当たってみようか」

『縛ッ縛？』

少年の指示を受け、その巨体からは想像もできない軽快さで怪物が前進する。無数の腕と脚を叩きつけながら床を滑るようにして銀竜との距離を詰めた肉の塊は、縮めた体の反動を使って高く跳ね上がるとそのまま召喚場の天井に張り付いた。

『縛ゆ？ 窶ヲ窶ヲ縛控c縛ゆ？…判警？@縛セ縛呐？窶ヲ窶ヲ？』

見上げる程に高い召喚場の天井から害意が込められた叫び声が降り注ぐ。聞く者の正気を大きく削る音の波が地上に届いたのと同じに異形の怪物は体を膨れ上がらせ、血肉を撒き散らしながら破裂して――空間ごと呑み込んで召喚場とひとつになった。

「な、に……ひいつ……！」

瞬間、目の前に無数の溶けた顔が現れる。

耳元で発せられる怨嗟の声。今私が座り込んでいる柔らかな床は、女性の胸と肩が同化した部位。ここは怪物の体内だ。

悪質な夢から目覚めようと強く目を閉じ、恐怖で歯を鳴らしながら理解した。今私は巨大な肉塊の中に取り込まれ、心を、自我を、魂を消化されようとしている。

母親と父親の事を思う。このまま私は人格を失い、別の何かになるのだろうか。あの肉塊とひとつになるのだろうか。

「レティーシア」

「レティーシア」

そう思うと、いつの間にか両親が目の前に立っていた。優しく微笑んでいた母親と父親の体がブクブクと泡立ち、融解していく。

「ああ、レティーシア。苦しい。痛い。イタイ」

「辛い。息苦しい。助けておくれ、レティーシア」

苦しんでいる。両親が、私の目の前で。

「レティーシア。痛い。痛い。こっちに来て」

「レティーシア。苦しい。苦しい。こっちに来なさい」

「ママ、パパ……！」

いかなくは。

腕を使い、肉塊の上を這いずるようにして前に進む。二人を助けた。離れ離れになりたくない。

こちらに向けて伸ばされた両親の手を握り返そうとしたところで

「え……何やってんの。そっちは危ないから行っちゃ駄目だよ」

——伸ばした手を取られ、後ろに振り向かされた。

召喚場の白い壁。平然とした少年の表情。

「……あ……れ……？ ……ひッ！」

がきん、と。すぐ後ろで巨大な何か口を閉じる音が響く。あと少しでも這い進んでいけば間違いなく巻き込まれていたであろう薄皮一枚の距離。少年に手を引かれ、私は恐怖と絶望の中で失う筈だった命を救われた。

続くゴリゴリという咀嚼音から逃げるように這って進み、迷わず少年の脚に抱き着いた。薄い服越しでも分かる温かい人間の体。魂から底冷えしていた私の身体に、人の熱が伝わってくる。

「ヘレシー、ごめんなさい。助けて。ママとパパが、このままじゃ」

「へ、君のご両親？ ……いないけど、そんな人達。ここには君と僕と彼しかいないよ。幻覚じゃないかな」

「で、でも、沢山の顔が、床に！ 天井に！」

「それは本当の事だけど……あれだよ、少し個性的だよ、彼女」

少年の腰に縋りつきながら振り返ると、そこに助けを呼ぶ両親の姿は無かった。

「あ、もしかして君って怖いのか苦手だったりする？ 故郷でもさ、そういう人が彼女に会うと幻覚が見えたりしたんだよ。擬態すると多少はマシになるんだけど、あれは擬態していない姿だよ。ここには当事者しかいないし、君も彼もいい性格してるから平気だと思っただけど……もう少し気をつけるべきだったかな」

彼の間の抜けた声を聞いていると、体の感覚が戻ってくる。安心する。

耐え難い恐怖と狂気から、私を救ってくれた声。

「わざと相手を怖がらせる技とかもあるんだけど、あれを使うと母さんがビククリして怒るからあんまり使わないようにしてるんだよ。昔ハッピーと一緒にゲンコツもらって叱られたっけ。懐かしいなあ」

耳を撫でる音。抱き締めた脚から伝わってくる温もり。心が優しく柔らかなもので包まれ、失いかけた人間性が戻ってくる。

もう二度と手放したくない。あの恐怖を感じたくない。このまま彼に救われていたい。

ぎゅっと腕に力を込めると、今最も聞きたい彼の声が更に頭上から降ってきた。

「えっと……ごめん、動けないから離してほしいんだけど……」

ああ、嬉しい。嬉しい。この声を聞く度に私は救われる。悪夢から遠ざかる。

この少年は……ヘレシーは私を守ってくれる。

「えっ、なんか目、怖っ。ごめんごめん。驚かせちゃったのは謝るけどさ、決闘するよう仕向けてきたのは君だし、守護獣同士の戦いに拘ったのはあっちの彼じゃない？ 僕は何も悪くないと思うんだよね。それにハッピーだって年頃の女の子なんだから、そういう反応をするのは失礼だよ、うん」

彼がたくさん喋っている。彼が喋れば喋るほど、私は彼の声を聞く事ができる。狂気を感じずにいられる。

うっとりとして彼の話を聞きながらジェイドの悲鳴やシルバーの雄叫びを意識の外に追いやっている、さほど時間の経たない内に召喚場は静かになった。

もう怖い事は終わったのだろうか。私は助かったのだろうか。

ああ、よかった――。

「あ、ハッピーおつかれ！ いっぱい増えて疲れたでしょ。ご飯食べに行こっか」

「……？」

無数の濡れた肉が這いずる音が全方位から迫る。この場所を――少年を中心にして近付いてくる。

この瞬間まで意図的に認識しないようにしていた水音。それは私にとつての恐怖そのもの。

嘘。嘘。どうして。

やがて粘性のある水音が止み、あの巨大な肉塊に取り囲まれた事を

悟る。触れずとも、空気越しに熱が伝わってくる距離。

私にできるのは震え、祈りながら彼に抱き着く事だけだった。

『縛ゆ？ 窶ヲ窶ヲ訝。 繹√◎縛謎コ、莉」縛励※縋ゆ i 縛縛ヲ縛？』
縛ヲ縛呐。 窶ヲ窶ヲ??』

「ひ……ッ!?!」

いくつもの手が肩に置かれる。耳元で呪詛のようなものが囁かれる。

——居場所を明け渡せ。そこからいなくなれ。

私を排除しようという明確な意思が込められた声。

少年から得られる安心感と怪物の手から流れ込んでくる狂気の間で板挟みになった私は、その場で崩れ落ちながら意識を失った。



【王都内某所：地下祭壇】

「……この狂気……っ！ ……ッ、ああ……ああ！ ついに私達の目的が果たされるのですね……！ この狂気の濃さと強さ、場所は……きつと、王都内のどこか……！ ……今しばらくお待ち下さい。すぐにお迎え致します……!」

来訪者

やあ、僕の名前はヘレシー！

小さい頃に呼び出した守護獣のおかげで召喚師としての素質を認められた僕は、今日からあの有名なヴァリエール召喚師学園に入学する事になったんだ！

初日からお貴族サマに絡まれて疲れちゃったけど、今は寮の自室でお茶を飲んで寛いでいるよ！ 王都は茶葉が安く手に入るから本当に助かるね！ これが今のところ入学して一番良かった点かも！

あ、立派な召喚師になるのが一番大切な事だったっけ？ アハハ！

——コンコン。

入学式の一週間前から入寮していたから寮生活にも少しは慣れたよ！ 最初は枕が違って寝辛かったりもしたけど、今ではこの通り、ベッドで横になればすぐに眠れるようになったんだ！ なんだか急に寝た方がいい気がしてきたからもう布団に入っちゃうね！

——コンコン。

今日はどうしてもめんど……刺戟的だったね！ 明日はもっとマシ

……楽しくなるよね、ハッピー！

『残つてるお茶、もう飲まないのなら買つてもいいですか……？
◆裕九▲縛九♀？罽縵√b縛？？イ縛セ縛縛？？縛縵縛芽縵縛？縛』

——ガチャ。

「ヘレシー、入るわよ」

「は？」

ノックの音を頑張つて無視していたら、内側から鍵をかけていた筈のドアが勝手に開けられて枕を抱えたレティーシアが上がり込んで来たよ！

……いや、なんで？ やっぱり貴族の人って庶民の人権とか無視できちやう感じ？

もう僕の中ではジェイド君を通り越して彼女が一番の要注意貴族になつちやったよ。見た目はどこかの国のお姫様みたいに綺麗なのにどうして……？

「……色々と言いたい事はあるけど……何か用？」

「怖くて眠れないわ。というか、寝たらもう二度と目覚めなさそうだわ。貴方も分かっているでしょうけど、明日はとても大切な日なのよ。寝不足になる訳にはいかないの。なんとかかして頂戴」

「ええ……」

レティーシアが小さな女の子みたいな事を言っているよ！ クールな印象の美人が精神的に弱っている様子は見えて意外性があるね！

……君、もう法的には成人してるよね？ ホラーが苦手なのは分かるけどさ、もう少し大人になった方が良いんじゃないかな？

「ハッピーの姿を見て驚いちゃったんだよね？ ちよつとした幻覚を見たかも知れないけど、彼女は邪悪な存在とはもう分かれてるみたいだし、呪いみたいな効果も一切無いから寝ても大丈夫だよ」

「体の震えが止まらないの。目を閉じたらすぐに悪い何かの底からやってきて、私を取り込もうとするのよ。家の治癒師や呪術師に見させたけど原因は分からなかったわ」

「まあ、本当に何もないからね」

ハッピーは潔白だよ！ あの痛々しく見える肉質は生まれ持ったものだし、そこに埋め込まれている人達だって別に彼女が食べた人間って訳じゃないんだ！ 全員合わせて一つの存在らしいよ！

肉腫に埋まってる女性達にそれぞれ話を聞いた事もあるんだけど、悪戯好きでお茶目な人が多かった印象だね！

「でもほら……見て、もう手の震えが止まってる。ヘレシーの姿を見て、声を聞いて、匂いに包まれて……私の全身が安心しているの。あの時、貴方が手を引いてくれたから。私を救ってくれたから……」

「え、なんか怖。……あのさ、君が眠れなくなってる原因ってハッピーなんでしょ？ 彼女を召喚した張本人の僕と一緒に居て落ち着くのっておかしくない？ 救ったって言われても、それじゃ僕の自作自演だよ」

「私だって頭ではそう思っているわよ。こんなの刷り込みや洗脳に近い状態だって。でも体が貴方を求めているんだから仕方がないじゃない。いいから早くこの疼きを慰めて頂戴」

「言いたい事は分かるけど言葉選びが最悪だよね」

「どうやらレティーシアは怖がり過ぎて色々とおかしくなっちゃったみたいだね！」

故郷では滅多にこんな事なかったんだけど、王都の人はホラーが苦手っていうのは割と有力な説かも知れないね！　これから守護獣を出す時には気をつけよう！

「そうは言っても、男と同室で寝るのは貴族として不味いんじゃないの？　あまり詳しくはないけどさ、実際には何もしてなくても誰かと一緒に夜を過ごしたっていう事実だけで結婚する時に不利になつたりするんじゃない？」

「影武者も用意できないような小さな家と同じにしないで頂戴。家が用意した者の他にも、私と腹心だけが知ってる影武者もいるわ。ここまでは専属の魔導師に頼んで認識阻害の魔法を使って来たし、心配は無用よ」

「前準備が本気過ぎて怖いなあ」

「どうやら色々と気を付けながらここに来たみたいだけど、それだけの危険性を認識した上で行動に移してるのが余計にヤバイよ！　将来何か大きな事をやらかしそうな危うさがあるね！　この学園生活の中で少しは性格が丸くなるように祈っておくよ！」

「うーん……あ、ほら、僕も男だしさ、女の子が一人じゃ色々と危ないよ。怖いのは分かったけど、もう少し冷静になるべきじゃないかな」
「貴方はそんな事しないし、何かされたとしてもそれは恐怖から私を守ってくれる代償として受け入れるべきだよ。というか私、このまま廊下に放り出されたら怖くて大泣きするわよ。いいから黙ってベッドで横になっていなさい。貴方は動かなくていいから」
「ごめん、ほんと言葉選び何とかしてもらっていい？」

専属の魔導師とやらに盗聴でもされていたら僕の人生が終わるような台詞ばかりを吐いたレティーシアは、どうやら本当に安心して気が抜けたようで、押し問答しつつベッドに潜り込むと僕の枕を抱き込んで間もなく船を漕ぎはじめたよ！

ええ……？

「ああ……心が解けて……怖かったことも全部……忘れて……」

「……せめて自分で持つてきた枕使いなよ。はいこれ」

「……………すう……………すう……………」

「……………」

……寝付きが良くて羨ましいね！ お茶の時間を邪魔された文句の一つくらい言っておきたいところだけど、召喚場での彼女の様子を思い返すと確かに尋常じゃなかったし、目元に泣き跡を作りながら部屋に来た女の子を追い出すのは流石に可哀想だからそつとしておく事にするよ！ 僕だつて困っているクラスメイトに手を差し伸べるくらいの良識はあるからね！

まあ彼女がこうなった原因はハッピーらしいから仕方ない落とし所なのかな？ 根本的に悪いのは喧嘩を売つてきた向こう側だけどね！

僕はレティーシアをベッドの端まで押し転がして、彼女が持つてきた枕を使つて隣で横になつたよ！

明日は学園でのパートナーを召喚する日だから気合いを入れないとね！ 守護獣以外の召喚なんて初めてだから、実は結構ワクワクしてるんだ！

かわいい鳥とか、カツコイイ獣とか、外で一緒に歩ける生き物が出てくるといいなあ！

『私も擬態すれば二足で歩けますすけど……………？邁√邁諷九纏後諷_九後諷_九纏芽_九纏代_九纏_九唎_九？纏？』

君は人型になつても色々溶けてたり顔が多かつたりするから目立つんだよね。

まあ見ててよ！ 今までは畑仕事から料理まで色々ハッピーに頼りきりになつていたけど、明日からは仲間が増えるからさ！ 召喚師免許が無くても授業で二体目が召喚できるなんて太っ腹だよね！

かわいい小動物が出てきた時のために、明日は小さな木の実でも買ってから教室に行こうかな！ 肩に乗せた召喚獣にご飯をあげるのとか憧れるよね！

普通のビジュアル

「それでは召喚の儀を行う。一人ずつ中央にある魔法陣の前に立ち、己の力のみで召喚を行うのだ。呼び出した召喚獣は各々が使役する召喚獣として正式に登録され、以後の授業では守護獣ではなくそちらを主に使用していく事になる。つまり、今から行う召喚が卒業時の成績を大きく左右すると言っても過言ではない。全員、現時点の全力を以て取り組むように。また、守護獣との不仲や揉め事は減点の対象となるので調伏や調教は十分行うようにする事。この内容については今後の授業でも取り扱っていく」

やあ、僕の名前はヘレシー！

小さい頃に呼び出した守護獣のおかげで召喚師としての素質を認められた僕は、昨日からあの有名なヴァリエール召喚師学園に入学する事になったんだ！

今日は学園でのパートナーを召喚する日！ 召喚から契約、訓練や信頼関係の構築まで召喚師として必要な能力の全てを試されながら長期的に成績を付けられていく訳だね！

周りのクラスメイト達はかなり緊張している様子だけど、正直僕は心配していないよ！ 自分の能力に自信があるっていう訳じゃなくて、学園での成績にあまり興味がないからだね！

貴族の間では学園卒業時の最終成績が社交界でのステータスになったりするみたいだけど、僕は卒業したら故郷に帰る訳だし正規の免許さえ貰えれば他に望むものはないよ！

学生らしい恋とか青春とかライバルとの熱い戦いとか、そういうのはどこか僕の見えないところでやってほしいな！

「他の者の見本になるよう、入学試験の成績が上位の者達から召喚を行う事とする。グレード家のせがれは体調不良で休みだったな。では順番通りレティーシア様、お願いできますか」

「ええ、分かったわ」

何故か先生に敬語で呼ばれたレティーシアが召喚場の中央へと歩いていくよ！

話変わるんだけどさ、今朝起きたら布団と枕が無かったんだけど絶対に君が犯人だよな？ 召喚前で緊張しているだろうから何も言わなかったけど、寝る時までには返してね！

「……」

レティーシアが離れると途端に一人になっちゃったよ！ 手が空いてそうな人に話しかけようと思っただけで近付いても何故か目を逸らしながら距離を取られるんだよな！

どうやら昨日決闘するっていう話になってたジエイド君が今日は休んでいるから、貴族に手を上げたヤバイ奴だと思われてるみたい！ もらい事故で僕だけ悪者になっちゃったよ！ アハハ！

『世界を創りし万物よ。星を司る森羅万象よ。系統樹を紡ぎし者達よ。我が声を聞き、威光を知れ。そして応えよ』——召喚」

精神集中もそこそこに、早速レティーシアが召喚をはじめたよ！ フワツとした内容の堅苦しい口上がカッコイイね！ こうして人が召喚している様子を見ると、これからどんな召喚獣と出会ってどんな物語を作っていくんだろうってワクワクしてくるよ！

中央の魔法陣から光が溢れて、そこに現れたのは四つん這いのシルエット！ 大きさは小型の犬くらいかな？ 細長くてシユツとしてる感じだね！

「おお……！ これは……！」

「なんと美しい……そして凄い魔力量だ……」

「流石はレティーシア様！」

光が収まると、そこには可愛い狐さんが四つん這いで立っていたよ！ 山とかに住んでるあの狐さんだね！ 毛並みが艶やかで、フサフサの尻尾がチャーミングで、なんだか神聖な力も感じるよ！

いいなあ！ 僕もああいう召喚獣を呼んでみたいなあ！ ハツピーとはまた違った小動物的な愛らしさがあるよね！ 彼女はどちらかという可愛い系だし！

「コンコン」

「あれは……ウルフなのか……？」

「いや、詳しくは分からないが……あれは狐種だ。古い文献で見た事

がある。まさか実際に見られるとは……」

「コンコン」

あの召喚獣、どう見ても狐なんだけど知らない人が多いみたいだね！ 王都の近くには住んでいないのかな？

故郷の村では度々見かけたよ！ 村の近くに生えてる真つ黒な根菜と一緒に煮ると結構いけるんだよね！

でもレティーシアが呼び出したあの狐さん、確かに見た目は狐なんだけど……鳴き声が違わない？ 狐ってコンコンとか言わなくない？

「コンコン」

「本当に綺麗……ずっと見ていたくなる……」

「素晴らしい！ レティーシア様に相応しい召喚獣だわ！」

「お、俺も召喚頑張るぞ……！」

「コンコン」

クラスみんなは特に違和感を覚えていないみたいだね！ あの狐さんが持っているやたらと神聖な雰囲気は圧倒されちゃってるのかな？ それとも中央の狐はあんな鳴き声だったりする？ 田舎者の僕には分からないや！

「召喚に応じてくれてありがとう。私はレティーシア・クレセリゼ。どうか私と契約を交わしてもらえないかしら」

「コンコン」

「ええ、私も貴方を召喚した者として恥じない行動を約束するわ」

「コンコン」

「思考や言動に制限はかけないから、何かあれば気軽に言っ頂戴」

「コンコン」

「ありがとう。これからよろしくね」

「どうやらレティーシアは召喚獣と円滑に契約できたみたいだね！

おめでとう！

先生も興奮した様子でノートにメモをとっているよ！ 確かに凄い力を持っていてそんな狐さんだね！ これはレティーシアの成績も良くなりそう！

そのまましばらく狐さんと話していたレティーシアだったけど、どうやら話が一段落したみたいでこっちに歩いて戻ってきたよ！ 注目を集めてるタイミングで近寄って来られると僕まで目立つっちゃうからやめてほしいな！

「へレシー、紹介するわ。私と契約してくれた魔狐のコン子よ」

「コンコン」

「ああ……なるほど。そんな名前だからコンコン言ってるんだね」

「……コンコン」

「僕はへレシー。レティーシアの……なんだろう……隣の席の生徒だよ。よろしくね」

どうやら言葉での意思疎通ができて名前も持ってる召喚獣みたいだね！ いかにも格が高そうだけど、そんな相手に認められたレティーシアも人間として格が高いんだろうね！ まあ貴族って元々はそういう基準で選ばれたらしいから当然なんだけど！

クールな雰囲気のリティーシアと、毛並みと立ち振る舞いが美しいコン子さんはお似合いの二人組になりそうだね！ 二人の門出を応援するよ！ 布団と枕は返してね！

「では次、アレミナ家のレイチェル」

「わかりましたわ」

レティーシアが素晴らしい召喚をした事に良い影響を受けたのか、以降の生徒達もどんどん召喚を成功させていったよ！

グレーターホーク、スノーウルフ、アシンラビット……何かしら箔のついた召喚獣ばかりが召喚されていくのを見ると、やっぱりお貴族サマって凄いなあと思うよね！

最後の方は貴族としては位の低い人や庶民の人の番になったけど、それでもみんな良い結果を出していたよ！ 召喚場が優秀そうな召喚獣の見本市みたいになっちゃったね！

別のクラスか知らないけど、護衛付きで頭にティアラまで載せた偉そうな女の子が見学しに来たりして召喚場はちよつとしたお祭り騒ぎ！ 先生が得意気な顔でティアラの女の子に解説してるのが笑えるね！

「全員素晴らしい結果だった。では召喚の儀を終了……いや、まだいたか。シアワセ村のヘレシー」

「はい」

最後は僕の番だよ！ 順番が最後になった理由は簡単！ 寒村の出で、そのくせ筆記試験の順位まで最下位だったからだね！

どうやら先生には存在自体を忘れられてたみたいだけど、まあここまでの展開が劇的だったから気持ちには分からなくもないかな！ 期待されていないのは逆に緊張しなくて良い結果が出るかもね！

ちなみに村の名前で呼ばれたのは僕だけだったよ！ 家名を持つていないのがクラスで僕一人だけなんて特別感があるよね！ アハハ！

「あー……なんだ、他の者達の結果に物怖じせず気楽にやってくれば良い」

「分かりました」

先生が気を遣ってくれてるよ！ 天才集団に紛れ込んだ異物を見るような目で僕を見ているけど、全くその通りだからその観察眼は確かだと言えるね！

僕は召喚する時に魔法陣は使わないんだけど、一応クラスメイト達と距離を取るために中央に移動しておく事にするよ！ 大型の召喚獣が出てきたら潰しちゃうからね！

新規の召喚なんてハッピーの時以来だから楽しみだなあ！

「すみませーん、誰か聞こえますかー」

遠くの誰かに声を伝えるような感覚で呼び掛けるよ！

王都では魔法陣と文言で召喚獣の性質を絞って呼び出す方法が主流らしいけど、僕は適当に声を掛けるこの方法しかできないから仕方ないね！

「学園に行くなら流行りの召喚方法とか勉強したら？」って故郷の知り合いに言われた事もあるけど、いくら勉強したって無理なもの無理だし、これで実際にハッピーとも出会えたんだから悪くないやり方だと思ってるよ！ こっちから一方的に呼び出すんじゃないやりに引かれ合うみたいところが運命的に感じない？

そんな事を考えながら待っていると、なんか床に大きくてボコボコと泡立ったドス黒い沼が現れたよ！ 嫌な予感がするね！

「豎昂？…？…？汝、我が同胞と契を交す者か縛悟酔閻槭螂代？」
「異の世で深淵を歩む覚悟は遂ー縛壹悶ニ豺豺縲呈ユウ縲？隕ア壽あ縛縛ゆk縛九縛？ゆ→縲不滅として共に永遠を歩まん哦？縛昂？霄縲√◎縛ヨ隔ゆ？」

「あつ……」

これはあれだね、ハッピーの知り合いか親族か分からない人達だね！ 久しぶり！ タイミング悪いから帰ってほしいな！

呼び出しに応えてくれたのはすごく嬉しいんだけど、君達が学園で顕現したらハッピー以上の問題になりそうなんだよね！ 人間側の都合でごめんね！

卒業して召喚師の資格を取ったら改めてお願いしたいな！ 畑仕事の手人はいくらあっても足りないからね！

『再会を待つ蜀塚壹蠕？』

僕が意思を伝えると、ハッピーの知り合いか親族か分からない人達はスツと引っ込んで帰っていったよ！ こつちが急に声を掛けた側なのに、文句も言わず都合を合わせてくれる大人な対応に性格の良さが滲み出てるよね！ 今度手土産を持ってご挨拶に行こうかな！

ああいう人達が側にいたからハッピーも優しい子に育ったんだろうね！ 彼女にはいつも助けられているよ！

「えっと、じゃあ言い方を変えて……すみませーん、誰か僕を知らないひと、聞こえますかー？」

今みたいに知り合いが来ちゃうと授業の趣旨とズレちゃう気がするから、面識の無い誰かに向けた言葉にしてみたよ！ 一応こつちの目的くらいは先に伝えておいた方がいいよね！

「……………お」

誰か来てくれたみたい！ 中央の魔法陣を覆うようにして黒い水溜まりが現れたよ！

さつきと似た状況にも見えるけど、水面が泡立ってないし狂気も感じないから大丈夫そうだね！ こんにちは！

水面から出てきたのはなんかヌルヌルした黒紫の触手の塊！ 僕

の胴体以上の太さがある触手が何本も密集して、大きな球体になって蠢いてるよ！ ハッピーより一回り大きいくらいのサイズだね！

触手が集まった生き物なのかな？ それともこの玉の中に本体がいるのかな？ 後者だとしたら随分と先進的な格好だよね！ ヌルヌルでスベスベな触手を前面に押し出した、素材の味を活かす良いフアツションだと思うよ！

「な……なんなんだよ、あれ……！」

「生き物、なのか……？ 気持ち悪い……！」

「衛兵に報告した方がいいんじゃない？」

どうやらクラスメイト達も興味津々みたいだ！ 遠くの方でみんな賑やかに観覧しているね！

全員の注目を集めた触手の塊はしばらく沈黙を守っていたけど、ざわめきが収まった頃に上部からゆっくりと花咲くように触手を解き始めたよ！ まるで演劇の一幕みたいに幻想的な光景だあ！

「あつ………えつと………」

控えめな声と共に触手の中から現れたのは、紫の長髪が綺麗な人間の女性……じゃないね。ガッツリ触手が生えてるね。腰から下が触手になってるね。

あの触手は全部自由に動かせるのかな？ 家事とか畑仕事の時に便利そう！

そして何より……ビジュアルが普通！ 上半身なんてほぼ人間！ クラスメイト達が気絶したり発狂したりしてない！ これは大きいッ！

もし彼女が契約してくれたなら、僕も他の召喚師みたいに召喚獣と一緒に町を歩いたりできるかも？

「やったー！」

「!？」

あまりの嬉しさに小躍りしながら近付くと、触手の彼女はびくりと肩を跳ねさせて身を引いちゃったよ！ ごめんごめん！ 驚かせるつもりはなかったんだけどつい感情が溢れちゃった！

彼女の足(?)に触って良いのか分からず触手の周りをウロウロし

ていると、恐る恐るといった感じで彼女の本体が下りてきてくれたよ
!

「僕はヘレシー！ 召喚したのは僕だよ！ 急に声を掛けちゃってご
めんね！」

「あ……はい……」

しかも手を差し出したら握手までしてくれたよ！ 便利そうな触
手に加えて社交性まで持ち合わせているなんて、外見だけでなく内面
まで美人さんだね！

さあ、ここから頑張って交渉して、契約を成功させよう！

心服：H・d r ā

『あ、悪魔……っ!? 悪魔が出たぞおお!』

『ひいつ……!? なに、これ……気持ち悪い……ッ、こつちに来ないで……!』

「違う……」

『召喚獣を出せ! 魔導師は攻撃準備! 数で制圧するんだ!』

『触手の化け物が逃げたぞ! 探せ! 邪神の眷属を討伐しろ!』

「違う……私、は……」

深海。暗闇。

ふとした瞬間に襲ってくる過去の記憶から逃げるように耳を塞ぎ、長い足で全身を覆って縮こまる。

それは数年前から始まった。近海にいる生物達とは全く異なる姿に変化し続けていたこの体はついに成長を止め、私は一つの生き物として完成した。その時から、時折声が聞こえてくるようになった。

『誰か、私の声に応えて——召喚』

『我こそはと名乗りを上げる強き者よ、俺の元に来い——召喚』

『可愛い子が来てくれたら嬉しいな——召喚』

そうした声が聞こえた時、決まって目の前には光る円陣が現れる。どこか遠くと繋がっているような予感がする、淡く光る魔法で出来た陣が。

声の内容は私個人を呼んだものではないものの、どこかで誰かが困っている事だけは分かる。そんな不思議な感覚。

「これに触れば……私にも、仲間ができるのかな……」

近海を探し回っても、自分と同じ見た目の生き物はいなかった。魚

達が私に怯えて逃げていく中、私はひとりぼっちだった。

この呼び声に応じれば、少なくとも意思疎通ができる相手がいる場所に行けば、私にも仲間ができるのではないか。そう思った。

そしてある時、私はついに魔法陣に触れた。勇気を出して一歩踏み出した。瞬間的に転移した先は——地上だった。

そこで行われていたのは生き物を召喚する儀式。私に召喚されるよう呼びかけていたのは人間という生物で、その人は悲鳴を上げて逃げていった。すぐに大勢の人間がやってきて、魔法陣で沢山の生き物を召喚して私に攻撃するよう命令した。水を喚び出して元の場所に戻ろうにも、不思議な力で阻害された。

そこから先は記憶に無い。命からがら海に辿り着き、傷だらけになった自分の体を庇いながら泣いていた事だけは覚えている。

悲しかった、拒絶された事が。陸の生物にとって、自分の姿が異質でおぞましいものであったという事実が。

それから暫くは召喚の声も魔法陣も無視して海の中で過ごした。でも、何もない暗闇の中で孤独には勝てなかった。若しくは、この大きく強く変化した体は召喚される事を本能的に求めていたのかも知れない。

海へと逃げる途中で何度も聞こえてきた『召喚獣』という言葉。今の自分がそのような存在なのだとすると、どうして私はこんなにも醜い姿になってしまったのだろうか。それとも、こんな姿でも受け入れてくれる誰かがいるのだろうか。私を一個人として見て、分け隔てなく接してくれるような誰かが。

そんな居るかも分からない相手を求めて、私は何度も魔法陣に触れ、呼びかけに答え、その先々で悲鳴を上げられ、罵倒され、刃を向けられた。

小さな子供にも、優しそうな女性にも、穏和な老人にも拒絶され、少しずつ自分が醜いだけでなく恐ろしい化け物になってしまったのだと理解していった。

『すみませーん、誰か聞こえますかー』

もう誰かを怖がらせることはやめよう。次で終わりにしよう。

自ら死に至る方法を考えながら海中を揺蕩っていた私に、再び声が降ってきた。優しい声。心が惹かれる声。

とても温かな、これまでにない何かを感じた。この人に拒絶されたのなら、一切の悔い無く全てを諦められると思った。最後にして最大の希望を得られた事に、私は心から感謝した。

「え、えっと、魔法陣……魔法陣に触れないと………あつ」

今まで通りなら召喚の魔法陣が近くに現れているはず。淡く光る輪を探して周囲に目を向けてみたものの、思ったものを発見する事はできなかった。

そうしているうちに、声の主と繋がっているという感覚が薄れていく。きつと別の誰かがその呼びかけに応じ、召喚が成されたのだろう。

「そんな……」

生涯一度きりとも言える機会を逃してしまった。自分の代わりに誰かがそれを掴んでしまった。

頭の中が真っ白になる。どうしたらいいのかが分からない。

温もりの残滓を探して周囲に足を伸ばしても、海の冷たさばかりが体に伝う。

あれは夢だったのか。都合の良い幻想だったのか。

たとえ妄想の中の出来事だったとしても、あの心を溶かす温もりは甘い毒となって近く自分を殺すだろう。一度得てしまった甘美な経験は、今までの全てを色褪せさせるには十分な劇物だった。

「……寒い」

冷たくないはずの水が冷たい。もう孤独には生きられない。しかし、今の声をもう一度聞く事も叶わない。

「声だけでも、もう一度聞きたかったな……」

全てを諦め、小さく丸まって足を抱える。

ぽつりと呟いた想いは、深い海の底で誰にも聞き入れられる事なく

泡となって消えていった。

『すみませーん、誰か僕を知らないひと、聞こえますかー?』

「……………? え、えっ!？」

聞こえた。もう一度声が聞こえた。何故。どうして。

ついさつき召喚は成されたはず。まさか契約に失敗したのだろうか。この声の主が? とてもではないが信じられない。

私なら、どんな条件を出されたとしても絶対に首を横に振ったりしない。先に呼び出された召喚獣には、その覚悟が足りていなかったに違いない。

「ま、魔法陣っ! 魔法陣はどこにっ……………あれは……………」

見つけたのは円盤のように浮かぶ黒い渦。光の届かない暗闇の中で、更にもう一段階暗くなっている闇の門。視覚に頼らず、温もりを追っていたからこそ気付けた小さな繋がり。

全力で近付いてそれに触れると、遠くのどこかに転送されていく感覚が身を包む。このまま待っていれば、すぐに私は声の主に会うことができるだろう。

「や、やった……………」

期待と喜び、そして緊張。

身だしなみは大丈夫だろうか。人間と比べて多過ぎる足が目立たないよう綺麗に揃え、唯一の衣服である窮屈な胸当てを手で伸ばし、水を弾く魔法と乾燥の魔法を使って地上への転移に備える。

最後に自分の長髪を撫でた所で、致命的な事に気が付いた。

「っ、前髪が……………」

無理矢理魔法で乾かした事が災いしたか、前髪の一部がぐるりと外側に跳ねてしまっていた。

体が光に包まれる。何度か経験のある召喚の予兆。

「あつ……い！ だめ、待って！」

終わる。寝癖を付けていると思われる。絶対に悪印象を与えたくない相手に、だらしない女だと思われてしまう。

「そうだ、足で隠せば……い！」

咄嗟に足を使い、自身を包み込んで姿を隠した。

粘液を分泌させた足で何度か頭を撫で付けると、跳ねた前髪はすっかり大人しくなった。

これで大丈夫。身だしなみは完璧だ。

先程と同じ立ち姿に戻ろうと球状にしていた足を解くと、既にそこは陸の上だった。転移が終わっていた。

足元でこちらを見上げている人間を一目見ただけで瞬時に理解する。この少年が声の主だと。

「あつ……い！」

自分の立ち姿を見て気付いた。足を隠すどころか、最大限に目立たせる形態を見せてしまった事に。

また怖がらせてしまう。気味悪がられてしまう。また——拒絶されてしまう。

「えつと……い！」

緊張で声が震える。何を言えば良いのか分からない。

足元の少年が纏う柔らかな雰囲気と心を奪われつつも、どうにか話し掛けようと言葉を探していると、彼は丸くしていた目を輝かせて満面の笑みを見せてくれた。

「やった——い！」

「!?」

初めて見る人間の反応。嫌悪や悪意を感じない、明るく穏和な表情。自分に対し、こんな目を向けてくれた相手は今までの一人もいなかった。初めての経験に体が驚いているその内で、心が喜びで満ち溢れていく。

近付いてきた少年が私の足に阻まれて動きを止めてしまった。いけない、目線を合わせないと失礼だ。

「僕はヘレシーー！ 召喚したのは僕だよ！ 急に声を掛けちゃってごめんね！」

「あ……はい……」

手を差し出され、それを咄嗟に握る——温かい。

体が温まり、心が燃えるように熱く焦がれていく。彼の体温が私に移っていくと同時に、色褪せた過去の記憶が鮮やかな希望へと上書きされていく。とても言葉では言い表せない心地の良い感覚。

この繋がりが二度と切れてしまわないよう、私はその手を両手でしっかりと包み込んだ。

借りパク聖女

やあ、僕の名前はヘレシー！

小さい頃に呼び出した守護獣のおかげで召喚師としての素質を認められた僕は、昨日からあの有名なヴァリエール召喚師学園に入学する事になったんだ！

今はついさっき契約した召喚獣とお話する時間だよ！ 召喚獣と仲良くできるかは召喚師としてはもちろん、今後の学園生活でも最重要になってくる事項だから召喚直後のコミュニケーションは特に大切なんだ！

僕以外の人達は召喚場の反対側に集まっているよ！ ティアラの女の子はレティーシアと何か話していて、護衛の人達は武器に手を掛けながらこつちを見ているね！ なんだか警戒されているみたいだけど、召喚前に一瞬だけ繋がっちゃったハッピーの知り合い達の雰囲気驚いちゃったのかな？ 彼女達は全然怖い存在じゃないし、そもそも今回契約した子とは無関係だから心配する必要は無いよ！

「それで、ハイドラさんは海の深い所から来たんだよね？」

「は、はい。……あの、すみません、『ハイドラ』って呼び捨てにして貰ってもいいですか？」

「え？ うん。じゃあハイドラで」

「っ……ありがとうございます」

僕の召喚に応じてくれたのはハイドラさん……じゃなくてハイドラ！ ちよつと種族が分からないんだけど、取り敢えず海の生き物らしいよ！

ヌルヌルしてるのに不思議と床を濡らさない触手とか、人間の基準では露出多めに見える服装とか、まさに涼しげで海が似合うよね！

「君って地上にいても大丈夫なの？ 息苦しかったり乾燥しちやったりしない？ もちろんずつと召喚したままにする訳じゃないんだけど、授業でしばらく出たままになってもらう事があるかも知れないからさ。あ、もし駄目でも水槽とか用意するから気にしないでね」

「ありがとうございます。でも心配はいりません。呼吸はできます

し、水だって喚び出せるので好きな時に好きなように使っていただけると嬉しいです！」

「へー……なるほど？」

呼び出されて嬉しいってどういう感覚なんだろうね？ 召喚獣には召喚獣の価値観があるって事なんだろうけど、ちよつと人間には難しいかな！

『螿峨@縛？ 罽唎h窶ヲ窶ヲ？ 溘？ 蛻？ 纒翫d縛唎？ 險？ 縛嬌しいですよ……次元が創造されていくような感覚でしようか……』

あ、うん……よく分かったよ！ ありがとう！

「あと、僕の守護獣……護衛役として契約してもらってる召喚獣がもうひとりいて、ハイドラがある程度この環境に慣れてから紹介しようと思ってるんだけど……君って血とか内臓とか見るの大丈夫なひと？ 彼女、結構個性的な見た目してるんだよね」

「あ、先輩がいらつしやるんですね……。よく分かりませんが、そのくらいなら普段の食事で見える事も多いので平気だと思いますよ。それに、私自身こんな体ですし……」

「それならよかった。彼女はハッピーっていいってね、小さい頃から一緒にいる家族みたいな間柄なんだ。とても良い子だからきつとすぐに仲良くなれると思うよ」

「へレシーさんのご家族……？ わ、私、認めてもらえるように頑張りますね……！」

「いや、そんなに気負わなくても大丈夫だから……」

胸の前でグツと拳を握って何かを決意している姿はとっても可愛らしいんだけど、僕に名前を呼び捨てさせておきながら自分は敬称付きで呼んでくるのはどうなんだろうね？ 別に召喚師と召喚獣って主従関係じゃないんだけど……。

「色々と訊いてばかりで申し訳ないんだけど、もう少し質問してもいいかな？ 久しぶりの召喚だから勝手が分からなくてさ」

「はい、もちろんです！ 全て嘘偽りなくお答えします！」

「そつちも気になる事があれば何でも質問してくれて良いからね」

「はい……え、何でも……？」

僕とハイドラはまず陸棲と水棲っていうところから違うから、互いの常識や価値観を理解し合うためにも認識のすり合わせは入念にしておきたいよね！

あんまり個人的な事情に踏み込むのも良くないと思うんだけど、その辺りの塩梅は召喚師として腕前が問われるところだよ！

「ちよつと答え難い質問かも知れないんだけど……その足って僕が触れても大丈夫なやつ？ 意識して距離を保たないとうっかり触っちゃいそうだし」

「大丈夫なやつです。いっぱい触って下さい。どうぞ」

「じゃあちよつとだけ……おー」

にゅつと伸びてきた足に触れてみたけど、これはなんとというか……面白いね！

クニクニと柔らかくて滑らかだけど、ずつしりとした質量も感じられる不思議な触り心地だよ！ 一本だけで人間を圧倒できる力強さでありながら、全身を投げ出して預けたくなる大木のような安心感！ ゆっくり撫でると僅かに手が沈み込んでいく感覚が気持ちいいね！

「あ、ありがとうございます……！」

「ありが——え、なんでそっちが感謝してるの……？」

なんか拜まれてるんだけど何これ……？ 宗教的な話？

流星に初対面でする話じゃない気がするから、早く次の質問に移ろう！

「えーつと、この足って何本あるの？」

「えへへ……あ、すみません……こほん。基本的にはこの九本ですが、もっと増やせますよ。何本が良いですか？」

「……いや、今のところ特に希望は無いかな……」

増えるんだ……海の生き物ってそうなの？ 彼女が特殊なだけ？

体の部位が増えたりするのってハッピー達だけの特性かと思っただけ、海中も含めた世界規模で見ると意外と一般的な能力なのかも知れないね！

生活圏が大きく違う相手と話していると新しい発見が沢山あつて

すごく勉強になるなあ。ハッピーの居た空間もこことは全然違う場所だったから、彼女の話聞いて子供ながらにワクワクしていたのを思い出したよ！

ハッピーは僕と契約する直前くらいからの記憶しか無いらしいけど、それでも当時の常識を打ち破るのに十分な情報量だったね！

『あの時は私達を認知できない筈の相手から話しかけられたので縛ゆ？ 縛ゆ？ 縛_√r隠咲衍縛縛縛_→縛？ ユ医？ 透響九↓譚乗？ 晉鮪本当に驚きまじ』

懐かしいね！ しばらくハッピーの知り合いに同族だと疑われていたのは良い思い出だよ！

「あの、私からも質問していいでしょうか……？」

「もちろん。注意した方がいい貴族とか、無視しないと面倒な貴族とか色々教えられるよ！」

「ヘレシーさんから見て、私の姿……どう思いますか……？」
「姿……？」

ハイドラの外見は……人間からしたらちよつと服装が大胆なようにも見えるけど、それ以外は文句の付けようがないくらい完成したスタイルだと思うな！ 服の事だって文化の違いだろうし、人間の目線から言うことは何もないよ！

とはいえ何も言わなくても不安になるだろうから、ここは思った事をそのまま伝えておこう！

「とつても美人さんだよ。最初に見た時はビックリしちゃったよ」

「へっ……？ あ、あの……好きです……じゃなかった、ありがとうございます。でも、質問の意図はそうじゃなくって……」

なんか違うみたい！

というか彼女、さつきからたまに変なこと口走ってない？ 足を九

本も動かすなんて相当頭が良くないと出来ないと思うから、頭が良すぎて逆に思考がこんがらがったりするのかも？ 筆記テスト最下位の僕には無縁の話だね！

「……その、私の足をどう思いますか？ 冷静になって、落ち着いて考えて、気味が悪くありませんか？」

「？ 第一印象を取り払って、ってこと？」

「醜く、ありませんか？ 嫌じゃ、ありませんか……？」

「……」

……。

「?????????????」
「やんと床に接地してるし、皮も剥がれてないし、肉も溶けてないし、体液も滲み出てないし、決まった場所に付いてるし、ハッピーと違つて九本しかないのにな？」

「というか全体像からしても擬態したハッピーよりも更に人間に近いんだから、ハイドラの外見を気味悪がる人がいるとしたら人類を滅亡させるくらいしないと落ち着いて生活できないと思うよ！ 僕はそんな怪しい教団みたいな目標は掲げてないからね！」

「確認のためにもう一度ハイドラの足に触つてみるけど……うん、剥き身の筋肉が手に吸い付いてこない分、ハッピーより撫でやすいかな！」

「つるりとしていて見た目にも綺麗だし、感触も柔らかくて気持ちいいと思うよ。君がいてくれたら枕と布団が返つてこなくても大丈夫かもね」

「っ……ほ、本当に……？」

「うん。何をするにしても器用に人一倍出来そうだし、側にいてくれるだけで安心感があるよ。その上こんなに可愛いんだから契約者の僕も鼻が高いってもんだね」

「か、可愛い……!？」

「お肌も白くてスベスベだね！ 人間も深海に転送させたら肌が若返ったりするのかな？ そういう商売をしたらお小遣いが稼げるかも知れないね！」

「お店を開いたら美容に特に関心のあるお貴族サマに人気が出るかも！ 王都中の貴族を深海に転送したら感謝される事間違いないだね！」

「あまり外見ばかり褒めるのも良くないかも知れないけど、顔立ちはすごく整つてて美人系だし、表情がよく変わって可愛らしいよね。内

面も全く心配してないし、召喚に応じてくれたのが君で本当に良かったと思うよ」

「う、あう……その、分かりました。すみません、もうそのくらいで勘弁して頂けると……」

「後は……その少し前髪が反つてるところも可愛らしいよね。寝癖かな？ でも全然気にしなくていいよ！ 急に呼び出したのはこつちだし、女の子のそういうところも魅力的で良いと思うから！」

「え、嘘……!? し、失礼します……っ！」

「あれ？」

ハイドラが黒い水溜まりに入って戻ってこなくなっちゃったよ！

初対面の相手に寝癖を指摘するのは配慮に欠けてたかな！ ごめんね！

まあ召喚獣として契約してる以上は何度でも呼び出せるんだけど一旦そつとしておこうかな！ 今は少し時間を置いた方がお互いにとって良い気がするよ！ 信仰先んじて畑凍る（急いては事を仕損じる）っていう言葉もあるしね！

「化……何……なつて……？」

「……の眷属……邪教……」

「今すぐ……するべき……ご決断を……！」

話し相手がいなくなつて召喚場の反対側を見てみると、ティアラの女の子と護衛の人達が歓談している様子が確認できるね！ そこから少し離れた位置にクラスメイトも集まつてるよ！

どうやら授業の途中で召喚獣に逃げられたのは僕だけみたい！ 先生にもバツチり見られちゃつてるし、これは成績に響くかも知れないね！

この学園って退学とかあったりするのかな？ 成績が悪くなるのは全く構わないんだけど、召喚師の資格は欲しいから退学になるのは避けたいところだよ！ 無資格で召喚獣をいっぱい出すと村長さんの首が飛んじやうからね！

「違……彼……い夢……守……温かな……私達……」

レティーシアがこつちを見ながらティアラの女の子に何かを語つてるんだけど、なんだか内容が不穏な気がするから止めに行こうかな！
コン子さんの神聖な雰囲気も相まって迷える子羊に教えを説くお伽話の聖女様みたいになっちゃってるよ！

布団と枕を借りパクした本人とは思えない敵かで堂々とした立ち振る舞いには感動すら覚えるね！

『縛ゆ？ 蟄舌？ ∞ 励？ セ 遶 区 セ 縛 縛 呐？ 縛 ウ 隠 崎 ユ 倅 蟆 代 @？』

絶対だめ!!

コン子さんスイッチ 【え】

やあ、僕の名前はヘレシー！

小さい頃に呼び出した守護獣のおかげで召喚師としての素質を認められた僕は、昨日からあの有名なヴァリエール召喚師学園に入学する事になったんだ！

今は寮の自室で休んでいるよ！

ハイドラが黒い水溜まりに入って出てこなくなった後、仕方がないからレティーシア達が集まってる方に歩いていったら今日の授業はそこで終わりになったんだ！ 終礼もせずにその場で解散になるなんて、とても柔軟性に富んだ教育姿勢だと言えるよね！

僕はそうでもないんだけど、フリーの召喚獣を呼び出して契約するっていう一連の流れは慣れた人でも相当疲れるみたいだからそういう生徒への配慮なのかも知れないね！ しっかり休んで翌日の授業に備えるのは大事だと思うよ！

寝癖を指摘して機嫌を損ねちゃったハイドラの事は一旦置いておくとして、彼女のおかげで解決しそうだった布団と枕の問題はやっぱり自力でなんとかしないとイケないね！

まだ日も落ちていないし、今のお茶を飲み切ったらレティーシアを探しに出かけてみようかな！ 彼女、多分だけど貴族として位が高そうだし、ちよつと歩けば関係者の一人や二人見つかりそうだよね！

——ガチャ。

「へレシー、入るわよ」

「あのさあ……」

僕が寝具について考えていると、昨日と同じようにレティーシアが部屋に勝手に入ってきたよ！ そういえば盗られた布団と枕に気を取られて、彼女がこの部屋の鍵を何故か解錠できるっていう最大の謎を忘れていたね！

レティーシアが犯罪に手を染めて合鍵を手に入れたのか、貴族には庶民の私生活を侵害する正当な権利があるのか。どちらにせよ受け入れ難くはあるんだけど、被害者としては真実が知りたいところだよ

！

「……今日はどうしたの？」

「昼間、貴方が召喚してから騒ぎになってあまり話せなかったでしょう？ コン子もヘレシーと話したいと言っていたし、丁度良い思っています」

「そうなんだ……騒ぎ？」

みんな召喚を成功させて盛り上がっていたと思うんだけど……僕がハイドラと話している間に何かあったのかな？

レティーシアが変な事を言っただけでティアラの女の子達を怒らせたっていうなら分かるんだけど、それ以外に問題が起こるような要素なんて無かったように思うけど……？

「いいえ、貴方は何も気にしなくていいの。それよりコン子の事よ」

「なんか言い方が引つ掛かるんだけど……まあいいや。君の召喚獣がどうしたの？ 自己紹介なら済ませたと思っただけど」

「その時の事で少し気になったらしいわ。詳しい内容は本人から聞いて頂戴」

「え、なんだろう」

もしかして制服のシャツが出ちゃってたかな？ それとも気付かないうちに失礼な事をしちゃってた？

思い返すとコン子さんって今日呼び出された召喚獣の中でも別格に高位の存在だったから、ちゃんと目線を合わせた方が良かったかも知れないね！

「出てきて、コン子」

「コン」

レティーシアが手をかざすと、床に現れた魔法陣からピヨコンと狐さんが飛び出してきたよ！ この美しい毛並みと全然隠し切れてない神聖な雰囲気はコン子さんで間違いないね！ しゃがんだ状態で更に頭を下げておこう！ こんばんは！

何か座布団とか用意した方が良かったりする？ 王都に来てからまだゆつくりと買い物できてなくて自分用のクッションすら買っていないんだけど……代わりになりそうな物あったかな？

「ごめん、コン子さんの座布団になりそうな物、レティィシアの持ってきた枕しかないんだけど……」

「コンコン」

「お構いなく、だそうよ。とはいえ今後は入り用になるでしょうし、足りない調度品はクレセリゼ家が用意するわ。あと、その枕はヘレシーだけに使って欲しいから絶対に他人に貸したりしないで頂戴。万が一他の男に使わせようものなら罰を与えるわ。例えば……そうね、代わりに貴方の――」

「僕の枕」

「――、」

「僕の枕、どこにあるか知らない？」

「……」

「布団も無いんだけど」

「……」

いや、なにその反応？ 叱られてる小動物みたいに必死に目を逸らしてるのは可愛いけどさ、それももう明白してるのと同じだから。

コン子さんも「マジかこいつ……」みたいな目で見てるし、どうやら召喚獣目線でも寝具の無断借用は奇行みたいだよ！ コン子さんの話っていうのが君についての愚痴だったらフォローし切れる自信がないから自分でなんとかしてね！

「……………ああ、そうだね。貴方の寝具の事だけど、どうやら手違いで屋敷に持って帰ってしまったようなの。今まですっかり忘れていたけれど思い出したわ。今朝は少し肌寒かったから、それでかしらね。今朝といえば屋敷の中庭にアエニラの花が咲いているのを見つけたの。小さくても力強く、自分らしくあろうとするその姿に私は心を打たれたわ。こうした発見を日々一つ一つ積み重ねる事で人の精神は成熟していくのだと若輩者ながら今までの人生を振り返って物思いに更けていたら、小鳥が一羽いるのに気が付いて……」

わあ！ 追い詰められた犯人は口数が増えるっていうけど本当だったんだ！ 勉強になるなあ！

円滑に口を動かしながらも絶対に目を合わせようとしなないレ

ティーシアの背中を押して部屋の外まで誘導すると、彼女はそのまま大人しく廊下を歩き始めたよ！ 振り返った彼女が最後に見せた、全てを諦めたような笑顔が印象的だね！

このまま待つていればレティーシアが布団と枕を持って来てくれるだろうから、それまで部屋で時間を潰しておこう！

「——いやあ、すまないね。私の契約者が迷惑をかけてしまった」

「まあ、ちゃんと返してくれるならこれ以上何も言うつもりはないよ。多少は僕が原因みたいなどころもあるしね。多少は、だけど」

「それでも意外だよ。私を召喚できるような子にあんな一面があるとはね」

「人は見かけによらないって事なのかな。家で親御さんに怒られたりしていないか心配だよ」

「そうだねえ……あの、これ私から切り出すべきなのかな？ もう少し驚いてほしかったんだけど」

「いや、なんだか随分と気分の良さそうな顔をしていたから、指摘するのも失礼なのかなって思ってる」

「可愛い見た目によらず皮肉屋だな……」

レティーシアを追い出し……見送ってから部屋に戻ると、美術彫刻みたいに整った顔立ちを人懐っこくニヤつかせた長身の女性が立っていたよ！ 茶褐色の毛色はコン子さんと同じだし、頭上の三角耳は狐のものに酷似してるし、そもそも神聖な雰囲気隠し切れてないし、誰がどう見てもさっきまで狐の姿をしていたコン子さん本人だね！

今だけ人型に擬態しているのか、こつちが本来の姿なのかは分からないけど、ドツキリを仕掛けるなら仕掛け人側にも努力が必要だと思うよ！ 次からは上手くやってね！

「改めてこんにちは。私の名は……まあコン子のままでいいかな。よろしく願いますよ。初めに挨拶した時に少し気になってね、確認のついでに話をしておきたかったんだ」

「僕はヘレシー。よろしくね。さっきレティーシアからも聞いたけど、コン子さんは僕の何が気になったの？」

「いやあ、大した事じゃないんだけどね。——どうもキミ、私の霊格が見えているようじゃないか」

うわ、顔がいい。急に体温が伝わる距離にまで身を寄せられるとビックリするよ！

霊格っていうのは彼女が持つ神聖な雰囲気のことかな？ 見えてるっていうのは少し違うんだけど、「ちよつと自分とは違う力だなあ」ってのを肌で感じるよね！ 真逆とは言い切れないにしても、絶対に同じ方向性の力ではないよ！

「困るんだよねえ、そういう事ができちゃう人間が現地にいると。色々やり難くてさ」

「そう言われてもなあ。まあ安心してよ、別に僕からコン子さんに付き纏うつもりはないから。ほら、棲み分けって大事だと思うんだよね」

棲み分けは本当に大事だよ！ 例えば学園のクラス分けとかね！

貴族と庶民が同じクラスなんて余計な問題の種にしかならないと思うんだけど……やっぱ庶民の人数が少なくて個別にクラスを作るのは難しいのかな？

「おや、こんな美人を捕まえておきながら及び腰だね。私が言いたいのはそうじゃないんだ。特別に教えてあげるけど、こういう時は握った弱味をチラつかせながら有利な条件を引き出すのが上手な交渉術というものだよ。例えば今のキミなら……違う、そもそもこれがおかしいんだ。危ないなあ、もう」

「え……何が？」

「会ったばかりのキミに気を許してる。自然に、なんの抵抗もなく自分を晒してしまっている。向こうに楔を打ってる私がここまで絆されるなんて……キミ、もしかしてそういう能力を持った神か何かかい？ もしくは同業者とか？」

「見たままの人間だよ。人を勝手に変なものにしないでほしいんだけど」

「自覚が無い……いや、まさか本当に人間……？ ……みたいだね。ふうん？ へー？ そんなにこっち寄りの人間なんて初めて見たよ。」

お互いに色々と都合が良さそうだし、是非とも手を付けておきたいなあ。性格はちよつとアレだけど」

神だとか性格がアレだとか……もしかして喧嘩売られてる？ 何故か度々勘違いされるんだけど、僕は正真正銘の人間だからね！ 両親も人間！

あと顔が近過ぎて髪がくすぐったいよ！ レティーシアもそうだけど、コン子さんも女性としてもう少し適切な距離感というものを考えた方が良いと思うね！ 仕方がないから僕の方から距離を取って……うん、無理だね。後ろに足を回されてて動けないね。

あ、僕の背中に手を添えて体を押さえながら手で口を塞ぐのやめてもらっていい？ 視界が埋まって圧迫感が凄いよ！

「おやおや、どうしたんだい？ そんなに驚いて。ふふ……これは口封じさ。キミみたいな怖あい人間に弱味を握られてしまったからにはもう実力行使をするしかないからね。こうして強引に言質を取ってしまうおうというわけさ。ほら、『僕は貴女の霊格について他言しません』って言つてごらん？ そうしたら解放してあげようじゃないか。……んー？ モゴモゴ言つていてよく分からないなあ？ さあ、もう一度——」

あつ、これなんか変なスイッチ入っちゃってない？ 変なスイッチ入ってるよね？

この急に手がつけられなくなる感じ、ちよつとレティーシアに似ているような気がするね。あの召喚師にしてこの召喚獣ありつて感じだけど、レティーシアもコン子さんも生物としてかなり格が高い筈なのにどうして……？

もしかして召喚の儀つて本質的に似た相手と繋がりやすくなつていたりするのかな？ でも僕とハッピーはあんまり似てないしなあ。「ほら、黙っているどんどん埋もれていつてしまうよ？ さあ、頑張つて息を吸つて、肺を満たして、今度こそちゃんと言葉にしてみようじゃないか。……んー？ ああ、口が塞がっていて声が出せないのかあ。それじゃあ召喚獣に助けを求める事もできないねえ。ここには私達しかいないのに。他には誰もいないのに。これは大変な事だ

よ……………」
『縛ゆ？ 縲√# 縲√s 縛縛？』

「え、なん……………」

お、ナイスハッピー！ ナイスハッピーが出たね！ 特に害意は感じなかったけど、あのままだと青少年の教育に良くない流れになってた気がするから助かったよ！

崩れ落ちてきたコン子さんはベッドに運んで寝かせておくよ！ 人型とはいえ狐さんを台の上に乗せると一気に食材っぽく見えてくるから不思議だよ！ 故郷で食べた狐鍋が懐かしいなあ！

もし休日を持って余すような事があつたら、少し遠出して狩りをしてみるのも楽しいかも知れないね！

「お待たせ。戻ったわ」

そうこうしているうちにレティーシアが戻ってきたよ！ お貴族サマが自分の手で布団を抱えながらドアを開けてる姿は少し面白いけど……………それ僕の布団じゃなくない？

とても肌触りが良さそうだし、見ただけで製作に膨大な時間がかかってるのが分かる繊細な刺繍が施された素晴らしい布団だと思うんだけど……………それ僕のじゃなくない？

「申し訳ないのだけれど、貴方の布団は見つからなかったの。代わりに私が普段使っている物を持ってきたわ。屋敷の中はよく探しておくから、今日のところはこれを使ってもらえるかしら」

「……………枕も？」

「見つからなかったわ」

「……………今朝の事なの？」

「見つからなかったから仕方がないわ」

「ごめん、ちゃんと目を合わせて言ってもらっていい？」

代わりの布団を貸してくれるのは助かるんだけどさ、寮の備品を無くすのは本当に不味いから早急に探してね！ 下手したら村長さんの首が飛ぶからね！

故郷の味

「おはよう。昨日行った契約の疲れは取れているだろうか？ 体調が優れない者はいつでも申告するように。まずは出欠を確認するが……ジェイドは今日も来ていないのか……」

やあ、僕の名前はヘレシー！

小さい頃に呼び出した守護獣のおかげで召喚師としての素質を認められた僕は、一昨日からあの有名なヴァリエール召喚師学園に入学する事になったんだ！

今は朝の準備時間が終わって先生が教室に入ってきたところだよ！

直前までクラスみんなは昨日の召喚についての話で盛り上がっていたね！ 僕も話に混ざりたかったんだけど、警戒させないように遠くから笑顔でゆっくり近付いていくと何故か距離を取られちゃうんだよね！

まずは席に座ったまま声をかけられる範囲の人と仲良くなつていった方がいいのかも知れないね！ 前の席にいる男の子とか！

ちなみに初日から僕に喧嘩を売ってくれたジェイド君は二日連続で欠席しているみたいだよ！ 決闘では掠り傷一つ負わせてないから本人は元気な筈なんだけど、家の用事で忙しいのかな？ 貴族も色々大変だよね！

「……」

先生の話聞いたレテイシアがこつちを見てるんだけど……決闘直後に寝ていた君を起こしてその辺りの事情は説明したよね？ 自分が原因でジェイド君が大変な事になったんじゃないかって心配してたじゃないか、君。

他の人から誤解されちゃいそうだから意味ありげな視線を送るのはやめて欲しいな！ 僕が危ない奴だって周りの人に思われたらどうするのさ！

でも僕とジェイド君が決闘したっていう話はもうクラス中に広まっちゃってるから、あんまり長期間彼に休まれると本当に勘違いす

る人が出てくるかもね！ 風評被害も甚だしいよ！

ジェイド君の家が何も言っていないのがちよつと不気味なんだけど、そつちはあまり深く考えないようにしよう！

「他は全員出席、と……流石だな。今日は契約してもらった召喚獣の確認と測定を行う予定だったが、急遽それを変更する。これを見ろ」

あ、授業の予定変更とかあるんだね！ 緊急の通達とかかな？

今日はクラスメイトが召喚した子たちを近くで見られると思って楽しみにしてたんだけど……学園の柔軟な教育思想には本当に驚かされるね！

先生が取り出したのは紙の束！ 短い題名だけが書かれた表紙からはお堅い雰囲気かブンブン漂っているね！

でもさ、「これを見れば言いたい事は分かるだろう？」みたいな顔で紙を掲げられてもこつちには何も伝わってこないよ！ 内輪ノリは止めようね！

他人が自分と同じ価値観を共有してるとは限らないし、特にこつちは入学したばかりの生徒なんだから……。

「あの印は、まさか……」

「おお……なんと……！」

え？

「そう、これは昨日魔導院から提出された報告書の原文なのだ」

「原文!? す、凄い。そんなものが真つ先に回ってくるなんて……」

「ヴァリエール召喚師学園……流石は我が国の最高峰だ……！」

ええ……これおかしいの僕なんだ……？

故郷では常識人の立場に収まっていた僕だけど、王都では一旦その常識を捨て去ってお貴族サマの考え方に思考を近付けていく必要があるかもね！

「国王陛下万歳！ 召喚大国メイユールに栄光あれ！」

「ニフィレリカ様万歳！」

「召喚術最強！ 召喚術最強！」

……やっぱりやめておこうかな！

自分の個性を貫き通す事も大切だよね！ うん！

「静かに。書かれているのは召喚時の消費魔力についての研究結果だ。召喚師の継戦能力は戦時中に課題とされていた部分だが、今でもその重要性に変わりはない。今回の研究はその解決の足がかりと成り得る素晴らしいものだ」

へー、魔力消費についての話だつて！

授業の年間計画表を見ても召喚師と全く関係なさそうな内容がチラホラあって不安だったから、こういう話題が出てきてくれると召喚師学園に入学したつていう実感が得られて安心できるよね！

多分誕生祭の時期に合わせての事だろうけど、社交界についての授業で予定が半分埋まってる時期とかあったからね！　そこだけ欠席してもいいかな？

戦争で召喚師の魔力量が問題になっていったつていうのはなんとなく分かるよ！　召喚獣の格が高かったり、単純に全長が大きかったりすると魔力消費が多くなる傾向があるらしいからね！　それに加えて昨日授業でやったような契約前の初回召喚は更に負担が大きくなるみたいだよ！

今だつて出席してはいるけど明らかに顔色が悪い人がいるし、こういう人達が少しでも楽になるなら素晴らしい研究だよね！

「そもそもだが、まず魔力というのは……」

あ、これ本題に入るまで時間がかかるやつだ！

魔力つて簡単にいうとあれだよね、なんかフワつと中にあるやつだよね、わかるわかる！

ハッピーやハイドラを召喚できてるつて事は僕も少なからず魔力を持っていてるんだろうけど上手く感覚が掴めないんだよね！　当然ながら魔法なんて使えないよ！

昔色々あつてハッピーを初めて召喚した日の夜、彼女を見た母さんに「召喚できたんだつたら魔法で火も熾こせたりしない？」つて言われて自分にも魔力があるんだと嬉しく思ったのを覚えてるよ！

でも普通さ、息子が知らない女の子を家に連れ帰ってきたらもつと先に言うべき事があるよね？

「——という二つの技術を掛け合わせて、ついに我が国は魔力量を高

精度で数値化する事に成功した。これにより従来の曖昧な指標は全て不要とされ、代わりに広く提唱されるようになっていったのが今で言うところの第一法則だ。まあ、君達も知っている通り、これも近い内に否定される事になるのだが……」

これは今でいう魔導が成り立っていく過程のお話だね！　こういう話の前フリみたいな部分も僕にとっては知らない事ばかりで面白いよ！

村の書庫には古くて独創的な本しか置いてなかったから知識が偏ってるんだよね！　おかげで筆記試験は散々だったよ！

『一底、召喚に關する文書もあつたよ……？
『一茸？ 蠢懊？ ∞ 小蝟壹 ← 髭縫 唸 k 譁？ 寫縷 ゆ ≠ 縫』

ああ、あの生皮に書かれたやつ？　確かに手順に従っていくと最終的に何か召喚されそうな内容だったけど、あれって持つてるだけで罪になるような物なんじゃないかって最近思い始めてるんだよね！

村長さんの首が飛ぶ前に処分した方がいい気がするよ！

「補足しておく、当時の世論は今よりもっと人体実験に前向きだった。我が国にとって召喚術がどれほど重要なものであるかという理解が民衆にも広く浸透し始めていた時期で、あの頃は捕虜や奴隷も数多く保有していたからな」

あ、前フリの補足が始まっちゃった！　これ本当に授業時間中に話が終わるのかな？

僕は別に構わないんだけど貴族の人達は学園から帰ったら家の仕事を手伝ったりするだろうし、予定が後ろにズレ込んだら困ると思うな！

「先生、それはやはり魔石鉱が発見された影響もあるのでしょうか？」

あ、真面目そうな女の子が前振りの補足に質問してる！

「ああ、魔導の成り立ちを語る上ではそれも切り離せないな。では各自が持っている歴史書の目次を開いてみてくれ。そこに——」

あ、先生が前フリの補足への質問に答えてる！



「鳥さんだ」

「可愛いですね」

あれから説明に熱が入り過ぎた先生が前フリの前フリの前フリみたいな話を始めたり、何故かそれにも逐一質問が飛んできたりして本題に少し触れたところでお昼休みになっちゃったよ！

どれも興味のある話だったから全然構わないんだけど、ちよつと全体の熱量に圧倒されちゃったよね！

今は学園の中庭にある謎空間で昼食をとっているよ！

並んだ植木がいい感じに個室っぽさを演出しているし、しっかりと日の光は入ってくるし、空気も澄んでいて素晴らしい場所なんだけど、全く^{ひとけ}人氣がないのが少し気になるんだよね！　こんなに条件のいい場所なんだから取り合いになってもおかしくないのにね！

「それにしてもよかったよ、ハイドラが陸の物も食べられて」

「はい。元々は自分より小さなお魚しか食べられなかつたんですけど、体がこうなつてからは大体何でも食べられるようになりました」

昨日逃げられたハイドラの機嫌が直つていたから、お昼休みの時間を使って互いの食性を確認する事にしたよ！　念のため魚介類を多めに用意していたんだけど、ハイドラは特に好き嫌いもなく全部食べる事ができたんだ！

やっぱり食卓を囲んで同じ物を食べられるのは嬉しいよね！　味わうだけじゃなくて料理の感想を言い合つたりするのも食事の醍醐味だと思うよ！

「あの……さっきの木の实、もう一つ頂いてもいいですか……？」

「もちろん。健康にもいいから遠慮せず食べてね」

「ありがとうございます！　……あむ……甘くて瑞々しくて……後味すっきり……」

特に、故郷の村の周辺で採れる木の实を気に入ってくれたのは嬉しいな！

見た目は最悪だけど味は美味しいし、栄養価も高いから村のみんな

はいつも元気なんだ！ 周辺の山に住んでる生き物達も、この木の実を食べてるから健康で肉質も柔らかいって話だよ！

この木の実がもつと沢山採れるなら畑仕事もしなくていいんだけど、世の中そう簡単にはいかないよね！

「午後からの授業、話進むかなあ……」

「むぐ……何かお困り事ですか？」

「ん？ いや……」

おっと、独り言のつもりだったんだけどハイドラに気を遣わせちゃったね！

別に困ってる訳ではないんだけど、王都の学園ってガチガチに授業が厳しいイメージがあったから良い意味で驚いてはいるよ！

でもこんな風に柔軟というか、人間的な雰囲気がある方が僕は好きかな！ まだ入学したばかりだけど、これからの学園生活が更に楽しみになってきたよ！

「……学園はいいところだなあって思ってた。はい、もう一つどうぞ」

「むぐむぐ……じわりと肉厚で……口当たり滑らかで……」

女性の褒め方

「おい、庶民！ ジェイド様をどこへやったんだ！ 隠しても無駄だぞ！」

「気を付けろ。非道な手で決闘に勝ったような奴だ、人を殺す事に躊躇なんてしない」

やあ、僕の名前はヘレシー！

小さい頃に呼び出した守護獣のおかげで召喚師としての素質を認められた僕は、一昨日からあの有名なヴァリエール召喚師学園に入学して召喚師になるべく頑張っているんだ！

今はジェイド君の取り巻きの男の子達三人から校舎裏に呼び出されて囲まれているところだよ！ いかにも青春って感じの状況だね！

呼び出された時点で既に面倒事の予感はしていたんだけど、誤解は早めに解いておいた方が良いと思っただから来てみたんだ！ 僕は無実だよ！ ハッピーも潔白！

自分が正義側だと分かり切っていると何も迷う事がないから気が楽だよ！ 自分を信じて真っ直ぐに進むだけで全てが解決できるんだから！ 行動の指針っていうのは本当に大切だよ！

今日は長い長い授業でいっぱい頭を使ったから、まずは欠伸をして頭をスツキリさせようかな！ 穏やかな笑顔も忘れずに！ ほら見て、僕は敵じゃないよ！

「クソツ、なんだその態度は!? 俺達はそんな脅しには屈しない！」
「庶民の分際で舐めやがって……！」

いや、脅しって何？ 笑顔だよ笑顔。友好の印だから。

そうだ、折角の機会だしこのまま三人とも僕の友達になってくれな
いかな？ クラスではまだ庶民の子だけじゃなくて貴族の人とも距離を感じるし、こうやって向こうから話し掛けてくれてる機会を逃すのは勿体ないよ！

ジェイド君っていう共通の知り合いがいるから話題には事欠かないだろうしね！

「おい、声が大きくなってるぞ。証拠を揃えて摘発するまでは刺激するなど言われているんだ、誰かに気付かれて騒ぎになると俺達の立場が悪くなる」

「その通達だつてどうせ他派閥の陰謀だろう！ こうしている間にもジエイド様が苦しんでいるかも知れないんだぞ!? 悠長な事はしていられん！」

派閥、派閥ねえ。……よく分からないや！ 悪いけど興味もないかな！

王都つて貴族の溜まり場みたいなものだから、やつぱりそういうのもあるんだね！ 地位とか、利益とか、駆け引きとか、色々考えながら社交していくのは大変そう！ めんど……文化的だね！

そういえばあんまり考えた事がなかったんだけど、ジエイド君つてどのくらいの貴族なんだろう？ 中堅くらい？

「こいつが契約したあの気味の悪い召喚獣は確かに油断できん。油断できんが、新たな召喚獣を使役したのはこちらも同じだ。守護獣も合わせてこれだけの数がいけば負けるなんて有り得ない。徹底的に痛めつけて洗いざらい吐かせてやる！」

「いや、召喚獣を使うのは流石に不味い。誰かに見られでもしたら言い逃れできなくなるぞ」

「だつたらこいつの召喚獣が襲ってきたという事にすればいいだろう！ こんな庶民の言う事なんて誰も聞きはしない！」

「……なるほど、それもそうか」

なんだか物騒な話になってるみたいだけど、これつて僕の弁明とか聞いてもらえる雰囲気かな？ 無理そう？

ここは一旦相手のやりたい事に合わせてあげて、冷静になつてもらつてから改めて話を進めた方が良いかも知れないね！

「男は拳を交えて喧嘩すれば和解できる」つて故郷にある武器屋のお爺ちゃんも言つてたし、ここで上手く対応できれば一気に仲良くなる気がするよ！

「やめなよ」

ん？

「なんだこの女？ ……う、美しい……」

「誰だ！ この……女性、は……？」

「さあ、誰だろうねえ」

「コン子さんだ！ コン子さんが現れたよ！ こんにちは！ こんな所で何をしているのかな？」

美術品かと思紛う程に整った彼女の顔立ちにジエイド君の取り巻き達も驚いているみたいだね！ 変なスイッチさえ入らなければ本当に綺麗なひとだから気持ちは分かるよ！

「その耳、その尻尾……なんだ、召喚獣か。 ……いや、それにしても美しいな……契約者は誰だ……？」

「召喚獣だったか……しかし、なんて完璧な容姿なんだ……何故か目が離せない……」

「無理矢理男の本能が刺激される……色香が……俺を狂わせる……」

「ふふん」

なんか滅茶苦茶な言われようしてて笑えるね！

「コン子さんはそんな彼らの反応を受けて、当然だと言わんばかりに腕を組んで胸を聳^{そび}やかしながら得意気にこつちを見てるけど……なに？ 僕もそんな感じの事を言えればいいの？」

「おー、なんと美しい……それと胡散臭い笑みが可愛い……」

「違うんだよなあ」

「どうやら違つたみたい！ 女性を褒めるのって加減が難しいよね。ハッピーなら付き合っても長いし、喜んでもらえそうな言葉はなんとなく分かるんだけどなあ。」

『本当にそうでしようか……？潜^{ほんとうに}蠖^{そう}繻^で縛^し昂^{しょう}≧縛^{しょう}縛^{しょう}励^り≧縛^{しょう}≧縛^{しょう}』

「甘い、香り……思考が乱れて……くそ、他に何も考えられない……」

「欲しい……この召喚獣がどうしても欲しい……どうにか契約できないだろうか……」

「契約者が庶民ならまだ可能性があるな……金か、身分か……」

「……これ三人ともコン子さんに何かされてない？ なんだか精神攻撃を受けてる人の言動に近いんだけど……まあもし何かあっても

僕には関係無いからいつか！

「というか、召喚獣との契約って他の召喚師に移せたりするんだね。確かに後になってから契約内容を変更したい事もあるかも知れないし、試用期間があった方がお互いに安心できるのかも？ 僕は何も気にせずに契約しちゃったけど、そう考えるとハイドラには失礼な事をしちやっただかな？」

「おい召喚獣。貴女……ではなくお前、名はなんという？ 契約者は誰だ？ 俺ならお前に一生不自由しない生活を送らせてやれる。契約をやり直すつもりはないか」

「いや、待ってくれ！ 俺の方がより多くの金を用意できる！ 俺と契約してくれないか！」

「一番社交界で顔が広いのは俺の家だ！ 是非俺と契約を！」

「一番おいしい木の実を持っているのは僕だ！」

急にアピールタイムが始まっちゃったよ！ 随分と情熱的だけど、貴族の求愛ってこれが普通だったりするのかな？ 側で眺めてる分には脚本の無い演劇を見ているみたいで面白いね！

社交界の授業なんて庶民の僕には全然関係無いし面倒だと思っただけ、こんな風に演劇やコントだと思っただけでみれば楽しめそうな気がしてきたよ！ やっぱり考え方って大事なんだね！ 誕生祭の時期の授業が楽しみだなあ！

社交界ではレティーシアも誰かに言い寄られたりするんだろうね！ 彼女はすごく美人だし、貴族として位も高そうだし、きっと大人気……あつ、ジェイド君か……。

「え……じゃあ木の実が魅力的なキミを貰おうかな。話の流れを分かった上で乗ってきたんだよね？ 私と契約してくれるんだよね？ 言質はとったからね？」

「いや、そんな訳ないでしょ。冗談だよ冗談。僕にはハッピーとハイドラがいる。それに、君だってレティーシアのこと結構気に入ってるじゃないか。契約者を代えるつもりなんてないでしょ？」

「……」
コン子さんは何とも言えない表情で口を結んでいたけど、そのまま

無言で僕の腕をガツチリ組んで足早に歩き始めちゃったよ！ 相変
わらず密着されると圧迫感がすごいね！

そんなコン子さんの気迫にジェイド君の取り巻き達も驚いて唾然
としちやってるよ！ さようなら！ これは多分戻ってこられない
雰囲気だよ！

こうして引っ張られていると入学した日のレティーシアを思い出
すなあ。

やっぱり召喚師と召喚獣って似ているところがあるのかな？

お高いお店

やあ、僕の名前はヘレシー！

小さい頃に呼び出した守護獣のおかげで召喚師としての素質を認められた僕は、一昨日からあの有名なヴァリエール召喚師学園に入学して召喚師になるべく頑張っているんだ！

今はコン子さんに連れられて王都を移動中だよ！

制服姿だと目立っちゃうから一度寮に戻って着替えたかったんだけど、そんな事を言い出せる雰囲気じゃなかったからそのまま！でも実際に制服で歩いてみたらあまり注目されてなくて拍子抜けしたよ！ 気にし過ぎだったのかも知れないね！

王都には他にも専門の学園がいくつかあるから、制服姿の学生なんてみんな見慣れているのかな？

「え……今の……幻……？」

「違う……見間違いじゃない。とんでもない美人が歩いている」

「どの家のご令嬢だ……？」

「綺麗な人……どんな化粧品を使っているのかしら……」

まあ隣を歩いているコン子さんが注目を集めてるからってというのが主な理由だろうけどね！ 今は耳や尻尾も隠して人間の姿になっているのにこんな目立っちゃうなんて、彼女の今後の生活が心配だよ！

「魅了を完全に抑えていても多少の視線は集めてしまうようだ。私が純粹に美しくて申し訳ないね？」

「事実だとしてもよくそんな事言えるよね」

自分を客観的に評価できる事は素晴らしいと思うよ！ でも時には謙遜する事も大切なんじゃないかな！

コン子さんの口振りからして、様子のおかしかったジエイド君の取り巻き三人は彼女に何らかの影響を受けていたみたいだね！ 今のところ周りにいる町の人達はあそこまで積極的な様子ではないけど、使い方によっては悪さできそうな力だなあ。

「抑えられるんだったら校舎裏でもそうしてほしかったんだけど。あ

の三人、ずっとあの調子だったら困るよ」

「大丈夫大丈夫。かなり加減したから今頃は元に戻っているだろうさ。それに、さっきのあれは本人達の理性が弱まった結果に過ぎない。私を手に入れたという欲求自体は彼らが自主的に芽生えさせたものだよ。蠱惑的な肉体で申し訳ないね?」

「そうだね」

「ちやんと気持ちを含めて言ってもらえる?」

ちよつと絡み方がめんど……授業で疲れちやつたから生返事になるのも許してね!

僕はあるまり詳しくないんだけど、精神に影響するような能力って罪に問われる事もあるらしいから使い方には気を付けてほしいな!

一度関連する法律を調べた方がいいと思うよ!

「一応言っておくけど、それ、レティーシアに使ったりしないですよ?

彼女、なんとなくだけでもそういうのに弱そうな気がするからさ」

「成る程……それも面白そうだね……」

「僕達会話できてる?」

いや駄目だって。釘を刺したつもりが自分の首を絞める事なんてあるんだね! もう黙ってた方がいいかな?

そんな風に中身の無い話をしながら歩いていると、繁華街を区切る小さな橋が見えてきたよ! ここから先つてお堅い住居区とか貴族用の高いお店しかなくて僕が行った事がないんだよね!

何故か我が物顔で橋を渡ろうとしているコン子さんだけど、召喚されて一日しか経ってない彼女がどうしてそんなに余裕でいられるのか僕には分からないや! というか、そもそも普通の召喚獣は単独で行動したりしないよ!

「あのさ、コン子さんつて随分と自由に活動してるみたいだけど……レティーシアは放っておいていいの? あんまり契約者から離れると消耗とか……まあ、コン子さんにとっては大した影響じゃないのかも知れないけど」

「ああ、心配はいらないよ。こつちでいう守護獣っていうの? 彼女のそれが中々に面白い性質をしているようだからね。それに、本人も

裏で色々やる事があるみたいだ。これは役割分担というものだよ」
「へー」

召喚獣の擬態が上手だところやって別々に行動できるのかあ……
効率良く買い出しできて便利そうだね！

昔、ハッピーがひとり隣町に遊びに行った時なんかは軽く村長さんの責任問題になったからなあ。

『縛^う?? 纏^ん?? 私^も 服^を 着^れ ば、 潜^ば、 潜^ん と か……?』
『縛^う?? 纏^ん?? 寝^ろ ヲ 遣^を √ b 潜^ば、 潜^ん と か……?』
『縛^う?? 纏^ん?? 寝^ろ ヲ 遣^を √ b 潜^ば、 潜^ん と か……?』

服、服かあ。君ってかなり体が大きいから……いや、待てよう？

擬態して人間サイズになってから、その状態で顔まで全部隠せるフード付きのローブみたいな服を着れば……ちよつと怪しいけど人の多い場所では目立たない……? 見た目の問題は解決できる……!?

……これは革新的な事に気付いてしまったね！ 頭まで服で覆うなんて普通は逆に目立つちゃうけど、人が多い王都なら注目されない！ これは人が少なかった故郷では絶対に出てこなかった発想だよ！

ただ体を隠すだけじゃ狂気的なアレは垂れ流しになっちゃうかも知れないけど、その先に得られる恩恵があまりにも大きいから試してみる価値は十分にありそうだね！

「……キミ、なんだか破滅的な悪巧みをしていないかい？ 絶対に駄目だからね？」 回り回って私の契約者に迷惑がかかりそうだ」

「いやいや、悪巧みだなんて……ねえ?」

『縛^う?? 纏^ん?? 私^も 服^を 着^れ ば、 潜^ば、 潜^ん と か……?』
『縛^う?? 纏^ん?? 私^も 服^を 着^れ ば、 潜^ば、 潜^ん と か……?』

「段々分かってきたよ。その笑顔が怖いんだって」

コン子さんは何かを心配しているみたいだけど……全然違うよ?

これは悪巧みなんかじゃなくて、とつても善良で前向きな考え方！
人生を豊かにするための一工夫さ！

今度の休みは大きなフード付きのローブを探しにいかなくちゃね！
また一つ楽しみが増えちゃったなあ！



「キミ達……本当にそれで通すつもりなのかい」

「……やっぱり駄目かな？」

コン子さんに連れられてやってきたのは、貴族区の近くにあるいかにも高そうな雰囲気のお店！　なんと奢ってくれるんだってさ！　よく分からないけどありがとう！

どうやら本来は予約が必要な店らしくて、店員さんは最初僕達を追い返そうとしていたんだけど、コン子さんが証書みたいな物を見せると大慌てで中に案内してくれたよ！　一体何を見せたんだろうね！

多分クレセリゼ家の証しか何かなんだろうけど、お貴族サマの威光って本当に凄いよね！　僕も欲し……やっぱりいらなかな！

庶民最高！

「確かにさ、一番狭い密談用の個室にしてもらったのは私だよ？　でもそれは何というか……無理がある。扉も閉まってないじゃないか」「ありがとうございます……！　ありがとうございます……！」

案内されたのは、お高い店の雰囲気から考えるとあり得ないくらい狭い個室！　テーブルも長椅子も片方が壁に固定されてるタイプ！

留置所の取り調べ室かなにか？

奥側にコン子さん、入口側に僕が座ったんだけど、すぐく料理が美味しそうなお店だったからハッピーやハイドラにも食べさせてあげたいと思って、コン子さんに許可を取って呼び出す事にしたんだ！

ハッピーは昨日コン子さんを気絶させた事もあって気まずいだろうからハイドラを呼んだんだけど……かなり狭いね！　比較的小さな足を優先して出してもらったり工夫してみたんだけど、それでも全然収まってないよ！

ハイドラ本人も天井に頭ぶつけちゃってるし、僕の体は彼女の足に完全に埋まってるし……テーブルの上には足が乗らないように頑張ったんだけど、これじゃそもそも店員さんが入ってこられないからどうしようもないよ！

流石に諦めるしかないんだけど、ハイドラの足に埋まってる静かだし温かいしムニムニして柔らかいし、なんだか眠くなってきたやう

んだよね。もう全部放り出して寝ちゃおうかな……。

「せっかく連れてきてくれたのにごめんね。僕はもう駄目だから、朝には起こして欲しいな……」

「手で撫でてもらえただけでなく、全身を触らせてもらえるなんて……私、前世でどれだけの徳を積んだのでしょうか……?」

「ちよつと私だけじゃ手に負えないなあ」

あ、コン子さんが匙を投げちゃった。

冗談だよ冗談! ……ほんとに!

仕方がないからハイドラには戻ってもらって、コン子さんの直感で選んだ料理を注文したよ!

味は……おいしい! ……いやほんとに!

いやさ、僕みたいな庶民は王都でご飯を食べる事さえ未だに慣れてないのに、急にこんな高級っぽい複雑な料理を食べたって上手な感想なんて出せないよ! ごめんね!

「足りなければ好きに注文するといい。私の分も食べていいからね」

食べている僕の様子を見てコン子さんが何故か満足そうに微笑んでるんだけど……なに? どういう感情?

いつもの胡散臭い笑みじゃなくて、そういう慈愛に満ちた表情をしてみると本当に神々しいね! なんとというか、ちよつと眩しくて影に隠れたくなるような感じがするよ!

好きに注文していいって事はお土産なんかも頼んでいいのかな?

やっぱりハッピーとハイドラにも食べさせてあげたいし、寮に持ち帰れたら嬉しいよね!

「もう十分だよ。ありがとう。よければみんなに何か持ち帰ってあげたいんだけど、そういうのって頼めたりするかな?」

「ふむ、聞いてみようか」

店員さんと呼んで尋ねてみると、どうやら肉料理以外は持ち帰っていいみたいだよ! 普段はそんな対応してないけど今回は特別だつてさ! お貴族サマに逆らって騒がれたら面倒だもんね、わかるわかる!

肉料理だけ駄目なのは衛生的な理由かとも思ったんだけど、どうも

在庫の問題らしいよ！ 一昨日あたりから色々あって仕入れに難儀してるんだって！

詳しく事情を聞いていたら何か勘違いされたみたいで、「店にあるのは今日の予約分なので勘弁して下さい」って泣きつかれちゃったよ！ 予約無しで来ちゃってごめんね！ 偉い貴族の名前使っちゃってごめんね！

「ふーん？ ……一部の生肉が買い占められて、近くの牧場も何者かに襲われた、か。そんなに大量の肉、誰が食べるんだろうね？ 戦争でも仕掛けるのかな」

「軍は牧場を襲ったりしないと思うけど……」

「さあどうだろうね。どこの世界でも人間は人間だから」

なににせよ、しばらくはお肉が高くなるだろうっていう店員さんの見解だよ！ 庶民には辛い情報だね！

今日はコン子さんが奢ってくれたけど明日からはどうしようかな？ ある程度の補助金みたいなものは貰えているんだけど、通常より何倍も高いご飯を食べる余裕なんてないよ！

次の休日は買い出しのついでに安くて美味しいお店を探して食べ歩きでもしてみようかな！

「肉なんて、故郷なら少し山に行けば手に入ったのになあ。狐……いや違う、鳥とか……」

「へえ、キミって狩りなんかもするんだね。……ん？」

「狩りから帰るついでに根菜も集めたりなんかして……」

「すまない。さっきのところ、もう一度言ってもらえないかな？ 大切な事を聞き逃してしまったようなんだ。きつと勘違いだろうけど、これからの互いの関係性を考えると認識に齟齬があると良くないから念のため確認が必要だと思……その食材を見るような目、怖いからやめてくれないかな！」

必要最低限シヨツピング

やあ、僕の名前はヘレシー！

小さい頃に呼び出した守護獣のおかげで召喚師としての素質を認められた僕は、少し前からあの有名なヴァリエール召喚師学園に入學して召喚師になるべく頑張っているんだ！

今日は学園が休みだから、前々から考えていた買い物をするために町に出かけているよ！ 残念ながら一人でだけどね！

今のところ買ったのは茶葉とローブと幾つかの日用品！

布団と枕も買おうか迷ったんだけど、正直レティーシアの私物がフワフワでとても温かいから店売りの物に魅力を感じなくなっちゃってるよ！ 過ぎた贅沢は人を駄目にするっていう話は本当だったんだね！

あまり女の子の私物を堂々と使うのも良くない気がするんだけど、新しく買ったとしても元の布団が返ってきたら荷物になっちゃやし、財布にそこまで余裕もないし……。

「おい、破片が散らばってるから子供は近寄るなよ！」

「ひどいな。入口ごと壊して盗むとは……」

「こんな人通りのある場所で派手にやりやがって。犯人はまだ捕まってるねえのか？」

小腹が空いたから安くて美味しいスープが飲めそうな店を探して歩いていると、繁華街の一角で何やら事件が起きているのを見つけたよ！ どうやら魔導具を扱ってるお店に強盗が入ったみたいだね！

王都って衛兵が多いしチラホラ貴族だって見かけるのによくやるよね！ 素人目には成功率と見返りが釣り合っていないように思えるんだけど、そんなに急いで欲しい道具でもあったのかな？

まあ目の前で起こったのならまだしも、犯人が立ち去った後の事件を気にしても仕方がないよね！ 今の僕にはスープのお店を探す時間の方がよっぽど大切だよ！

「お、なんかよきそう」

見つけたのは大通りから少し入った所にあるお店！ 修繕の跡が

残る扉に小汚い看板……いかにも金欠の人向けですよっていう飾らない店構えが潔くて素敵だね！ 早速入ってみるよ！

細長い店内は薄暗くて、奥で項垂れている店主さんからは疲れた雰囲気漂ってくるね！ 一切の覇気を感じないよ！

頼んだのは壁のメニュー表に書いてあった『スープ』！ 何味とか、何が入ってるのかは書いてないメニューとして半分機能していないそれ！

「甘くて酸っぱい」

舌打ちと共に提供されたスープは生温かくて、具材はよく知らない細切れの野草と片手で数えられる量の豆粒！ 以上！

必要なものも含めて色々削ぎ落とした奥ゆかしくも挑戦的な一皿は、僕みたいに新たな一步を踏み出した新入学生にピツタリだと言えるよね！

肝心の味は……なんだろう、甘みは豆由来だと思っただけど、酸味は野草から出ているのかな？ 細かく刻まれているし、多分故郷には生えてない草だろうから詳しくは分からないな！

食べると小腹が満たされる！ それだけでスープとしては十分だよ！

「ごちそうさま！」

「チツ……」

値段だけは良心的だし、店の場所が悪いのか店主さんの態度が悪いのかは分からないけど他のお客さんも全くいないから静かで快適だったね！ また来た時はよろしく！

スープのお店から出て、ハッピーとハイドラへのお土産に果物を買おうと思って歩いていると、青果店に向かう途中に大きな武器屋を見つけたよ！ 変に宝石をあしらった剣とかを店先に飾っていない、実用的な品揃えが期待できそうなお店！

さつきも近くで強盗があったみたいだし、僕も護身用として何か持っておいた方が良かったりするのかな？

使い慣れている道具っていうと鍬とか木槌とか草刈り鎌なんかの農具なんだけど、意外とあれでも小型の害獣くらいなら駆除できたりす

るんだよね！ あの羽と腕が三本ずつ生えてる犬とか！

農具として使える物なら村に帰った後でも無駄にならないし、護身用として買って帰るのも悪くないかも！ 王都で作られた道具っていうだけで品質が高そうな気がするし、きっと村のみんなも羨ましが
るよ！

お金は……値段にもよるけど、さっきの店のスープをしばらく飲んでいけば工面できるかな？

「ありあとやっしたー」

買う理由ばかりを積極的に探しながら武器屋さんを眺めていると、中から大荷物を持った人達が出てきたよ！ あれはなんだろう……白紙書かな？ 重そうだね！

あまり他人の荷物をジロジロと見るのもどうかと思うけど、あんなに沢山持つてるとつい目が行っちゃうよ！

白紙書ってというのは召喚師の武器みたいなもの！ とはいえかなり古い手法になるから、僕も詳しい扱い方は知らないんだけどね！ クラス全員の召喚風景は一度見たけど、当然ながら誰一人として使っていないかったよ！

そう考えると、こうして大量に白紙書が運ばれていく様子って二度と見られないくらい貴重な光景なのかも？ よく売れたね！

「いらっしやーせー」

そんな置き場所を圧迫するだけの邪魔者が捌けたからなのか、武器屋の店員さんは上機嫌に僕を迎えてくれたよ！ 下がった眉がなんだか眠そうに見える、僕と同じ年くらいの女の子だね！

入口付近は訓練用の剣が多くて、少し奥に入るとちゃんと刃の付いた多種多様な武器が飾ってあるよ！ 訓練用の剣が一番手に取りやすい場所に置いてあるのは防犯のためかな？ それとも王都じゃ訓練の方が真剣より需要あったりする？

「一番安い兜でもこの値段かぁ」

防具も色々あるけど高いなあ。いや、多分相場なんだろうけど、それでも田舎農民が気軽に買えるようなものじゃないよ！

召喚師の防具についての重要性は分かっているんだけど、僕は軍人

さんみたいに敵と戦ったりしないから優先度としてはどうしても低くなっちゃうかな！

防具を着けるなら僕よりハイドラが先かもね！ 彼女は全然気にしてないけど、もう少し肩とかお腹を隠さないと小さな子供達がビツクリしちゃうよ！

「冷やかしなら帰ってよー？」

値札ばかりを見ながら店内を歩いてると、買うつもりがないと思われたのか店員さんに声を掛けられちゃったよ！

近くで強盗があつたのは知っているだろうし、不審者には注意を向けておくつてのは大切な事だよ！ 僕は普通の客だけどね！

「ちよつと品揃えに圧倒されちゃってね。鋏とか鎌ってどこに置いてあるのかな？」

「クワ……？ 鎌なら何本かあるよ。あんま売れないから少ないけど。こつちこつちー」

カウンターに顎を乗せたまま手招きする彼女の方に近付いてみると、確かに通路横の目立たない場所に鎌が立て掛けてあつたよ！ すごく立派な作りだけど……これ、ちよつと刃が大き過ぎない？

少し持ち上げてみたけど、やっぱり外見通りの重さがあるよ！

草っていうか細い木くらいなら力任せに切れそうなくらい重いんだけど、取り回しが悪くて使い難いと思うな！

「ちよつと大げさだなあ。……ん、こつちのは……」

大鎌の側にあつた木箱の中を見てみると、明らかに作りが雑な長剣達と一緒に入れられている、金属部分が途中で折れちゃってる鎌を見つけたよ！ どう見ても訳アリ品なんだけど、ちゃんと刃は付いてるし重量はむしろ丁度いい感じだね！ あと安そう！

「あ、それは馬鹿が折っちゃつたのをあたしが刃だけ付けたやつ。取り敢えずバレないように数打ちに混ぜてたんだけど、やっぱり全然売れないからそろそろ打ち直そうと思つてたんだよねー」

カウンターにだらしなく突っ伏しながらため息を吐く彼女の様子からは苦勞が見て取れるね！

この店の事情はよく知らないしあまり興味もないけど、どうにか強

く生きて欲しいな！

「でもそれを打ち直してるところなんて店長に見られたらさー、また馬鹿の事思い出して機嫌悪くなっちゃうじゃん？ とぼっちりで当たり散らされてもダルいから、もし気になったんなら買ってくれたりしない？ 安いよ、それ」

「ふーん？ 値札が無いんだけど、いくらなの？」

「それはねー、……………九千ユーロ」

あ、本当に安い。

店員さんが僕を頭から足先までジロジロと観察してから提示した値段は九千ユーロ！

少しでも高く売りたいっていう気持ちと、絶対に売れ残ってほしくないという強い意志が混ざり合った絶妙な価格設定だね！

家で使っていた農具より二倍くらい高いんだけど、その分長持ちするだろうし、「王都で作られた道具だよ」って知り合いに自慢できる事を考えるとすごく魅力的に思えるよ！

さつきまで安いスープで腹を満たしてた癖に何言ってるんだって感じだけど、近いうちに打ち直すから今しか手に入らないって言われると欲しくなるのが人の性だよね！

それに……もう少し安くなるかも知れないし？

「欲しいけど、そんなに持ち合わせあつたかな……あー、八千ユーロだけかあ。ちよつとだけ足りないや」

「……………やつぱり一万ユーロで」

「足りたよ。数え間違えてたみたいだ」

どうやら値切るのは無理みたいだね！ ここは素直に言い値で買っておこうかな！ 店員さんを困らせるのは本意ではないからね！

現金を手渡すと、彼女は先の折れた鎌を店の奥に持って行ってピカピカにしてくれたよ！

「はい、ちゃんと口金から先は包んでおいたから。いやー懐かしいわー。これ打った時はずっと連勤でホント大変でさー、形整える時に『あたしを休みにもできない神なんていらねー！』ってイライラをぶ

つけて叩きまくったわけ。仕上げも手は抜いてないし、見た目はこんなだけ魔獣もザクザク殺せると思うよ。丸くなったら研いだげるし」

「あ、うん。その時は頼もうかな」

申し出は有り難いんだけど、別にこれで魔獣を狩るつもりはないし、本格的に使うのも故郷に帰ってからだから多分この店に持ち寄る事はないかな！

それより不特定多数の神さまに文句を言ってるのがヤバイよ！

下手な貴族に聞かれたら打ち首になる事もあるらしいから気を付けてね！ それで食べてる人達もいるから！

「いやーありがとー。あの変な本も売れたし、今日は在庫がハケるいい日だわー。にひひ」

店員さんの可愛いホクホク顔に見送られて、僕もホクホク顔で退店したよ！

恐らく数年は使わないであろう道具を買ったせいで財布が薄くなっちゃったけど、今日のご飯が食べられなくなる訳でもないし直ちには問題ないよね！

よし、このまま予定通りハッピーとハイドラの果物を買に行っちゃおう！ 今の所持金でどれだけの量を買えるのかは分からないけど！

……もしかして、何かお金を稼ぐ手段を考えた方がいい？

故郷で集めて持ってきたあの木の実を売れば多少はお金になりそうだけど、一応数に限りがあるから仲間内だけで食べてしまいたいんだよね！

王都の労働事情については全く知識が無いから、今度レティーシアにお勧めの仕事とか教えてもらおうかな？

必要最低限シヨツピング 後

「ここならいいかな。おいで、ハッピー」

『縛ッシ?』

あれから思ったより多くの果物が買えて荷物が増えたから、中心部から離れた路地裏に入ってハッピーを呼ぶ事にしたんだ!

積み上げられた木箱の影に隠れて声を掛けると、見慣れた肉塊が空間の裂け目から落ちてきたよ! 王都の町中でハッピーを顕現させたのは初めてだけど、やっぱり隣に居てくれると落ち着くね!

「悪いけど、これ持っておいてもらっていい? 当分は使わないだろうから」

『縛薙縛ッ寡ヲ寡ヲ略後? √ ㊦縛唎? 溘? ? 蛻? 纏翫 U 縛励 ◆ 縲ゆ? % 縛 縛? 縛董晉。 縛励※縛翫 縛セセ縛唎?』

「……そうかな?」

そりや君にとつてはそうだろうけど、僕はそのくらいの重さじゃないと持ったまま走り回れないよ! 一応護身用っていう免罪符があるんだから携帯性も大切だよね!

『縲ゆ? 縲ッイ? 縛? 山縛? S 縛 縛唎? 縛縛ウウ寡 縛ヲ寡ヲ螟? 家の畑に置いてあった 鎌の方 が使 い 易い じや ない か と …… 壺?? 縲ッ拷蛻医 j 縛工 縲牙ヨカカ 縛ヨカ 彦代 ← 鄂縛? ※ 縛ゆ 縛縛』

「……」

『縛昂縛オオ寡ヲ寡ヲ縛薙縲… 搗縛驕灘? 縛イ 縛ッ 縛輔 ≧ 驥大槭 ㊦ 菴 縲 i 縲後※縛セセ縛遣?? 帙 S 縛銀? ヲヲ寡遣?』

あーあー! 聞こえない聞こえない!

それは王都で作られた道具! それだけで高い価値がある! うちの村みたいな田舎では手に入らない貴重品! きつと切れ味も良くて長持ちするから大丈夫!

ほら見て! この折れて短くなった四角い個性的な刃を! 実に美しいね! 工芸品としても価値があるよ! 持ち帰って隣町で売れば儲かるだろうね!

『縲ゆ ▲ 縲ゆ ◎ 縛? ㊦?』

あの……何かを察して言葉を飲み込むのやめて? 一人で盛り上

嬉しいんですけど、私の体は遠くからでも目立ちますし、怖がられたり、攻撃されたり……ご迷惑になると思います。私のせいでヘレシーさんに何かあったら生きていけないので……」

「大袈裟だなあ」

「学園で誰も何も言っていないのが不思議なくらいなんですけど……」

そう、長年の憧れだった召喚獣との町歩きがついに実現すると思つて今日の買い物を楽しみにしていたんだけど、なんと今朝部屋から出る時にハイドラに断られちゃったんだよね！ 試しに足の一本に抱き付いて引つ張つてみたけど微動だにしなかったから諦めたよ！

もし彼女が心配しているような事になつても僕とハッピーがいるし大丈夫だと思っただけだね！ ああやつて頭まで下げられたんじゃ本人の意志を尊重する他なかったよ！

どうも彼女は少し心配性みたいだね！ 思考が後ろに向いちゃう前に、果物を食べさせて話題を変えちゃおう！

「はい、果物食べようね。口開けてー」

「むぐ……？ むぐむぐ……仄かな酸味が美味しい……好きです」

「ふむふむ。これは？」

「あむ……シヤリシヤリの食感が楽しい……好きです」

「なるほどね。こつちは？」

「んぐ……丸呑みした時の喉越しが心地いい……好きです」

「そうなんだ」

毎回こつちの顔を見て感想をくれるのは礼儀正しくて感心するんだけど……丸呑みしても大丈夫なんだ？

まあ海中での食事を考えれば当たり前前の事なのかな？ 消化器官とか身体能力とか、人間より色々なところが強靱そうで羨ましいね！

幸せそうに果物を飲み込んでいくハイドラを見ながら彼女の生体について考えていると、表通りを通り過ぎていく足音が聞こえてきたよ！

「商品の奴隷が脱走したア？ どのマヌケ商会だよ」

「パーチャイらしい。外から檻が壊されてたつて話だ」

「盗まれたんじゃねえのか、それ」

「どうやら町のどこかで奴隷の人がいなくなったみたいだね！」

「脱走なのか盗難なのか分からないみたいだけど、どちらにせよ良くない事が起こっているのは確かだよ！」

「さつきも強盗があったようだし、王都って想像してたより随分と物騒な場所だったんだね！ 勝手に布団を持って帰る貴族もいるし！」

「……あの、奴隷って盗まれるような貴重なものなんですか？ 私も前に一度そうされそうになった事があって……」

「え、そうなの？ もう契約したから大丈夫だろうけど、もし今度そういう人に会ったら教えてね。僕がちゃんと話をするから」

「は、はい……一生付いていきます……」

「奴隷っていうと犯罪奴隷か戦争奴隷が多いと思うんだけど、ハイドラは悪事を働いたりする子じゃないし、海の生き物と戦争した国なんて聞いた事がないし、ちよつと奴隷にされそうになった経緯が分からないなあ。」

「奴隷っていうのは誰かの持ち物になっちゃった人の事だよ。戦争で捕まったり、奴隷の子供だったり、悪い事をした人とかね。最近は大規模な戦いが起こってないから減ってるんだ。そういう意味では貴重かもね」

「戦争……」

「とはいえ国境付近では今も度々小競り合いをしているから多少の供給はありそうだけどね！」

「故郷の村にも若い奴隷の人がいたなあ……もういないけど。」

「戦争っていつても、母さんの上の世代くらいから一気に戦況が落ち着いたらしいけどね。最近は軍隊も武家も暇してるんじゃないかなあ」

「そうなんですか。確かにそういう状況だと、戦うのがお仕事の人は退屈かも知れませぬね」

「退屈ってのとはまた違う気がするけど……」

「別に軍人だって平和が嫌な訳じゃないと思うけどね！ でも武家の貴族なんかは武勲が無いと派閥で軽視されたりして大変なのかも」

？

積極的に争いを起こそうとしているのって案外そういう人達だったりするのかな。辺境の住人からすると普通に迷惑だからやめようね！

「ちなみに戦う仕事っていうと召喚師もそうなんだよ。特にメイユールでは魔導より召喚術が重要視されているし、昔は戦況をひっくり返す花形として大活躍してたみたい」

「あ、召喚師ってそういうお仕事だったんですね」

「苦しい戦場で召喚の光を見たら『勝利の光だ！』って大盛り上がりだったらしいよ。自称門番のお婆さんに何度も聞かされたから戦争関係の話は覚えちゃったなあ……」

まあそんな格好いい逸話も遠い昔の事で、争いが少なくなった今じゃ召喚師は開墾や建築に駆り出されたりしてるんだけどね！ 基本的に召喚師は王都の周辺や主要な都市にしか居ないから、田舎じゃ複雑な建造物は建てられないよ！

村には偏った知識ばかり持つてる話の長いお年寄りが多くて困っていたんだけど、こうして召喚獣からの疑問に答えてる瞬間だけは長話を聞かされてて良かったと思えるね！

「じゃあヘレシーさんも卒業後は戦場に出るんですね！ かつこいいです！ 私、その時は頑張って人間を殺しますね！」

「いい笑顔で凄い事を言うなあ」

気合い十分なのは頼もしいけど、卒業後に僕達が行くのは戦場じゃなくて辺境の寒村だよ……。

熱：ジエイド

(俺は、一体……何をしていた……?)

立ち尽くす。一人、王都の町中で。

目に映る全てが疑わしく、自分を陥れる罠に見えた。一時は錯乱状態にまで追い込まれたその要因は、単純な恐怖。

いつだって自信に溢れ、肩で風を切って歩いた道に今や確かなものなど何も無く、精巧で美しい舗装路に一步踏み出す事にさえ躊躇する。

段差に足を取られるのではないか。

足が滑り、転倒するのではないか。

床が突如崩落するのではないか。

足元に現れた肉塊に飲み込まれ、化け物の体内で磔にされ、四肢を千切られ、それでも命を繋かれ、永い時を生かされたまま苦痛を与えられ続けるのではないか――

(やめろ！ 違う！)

ありもしない妄想。凄惨なイメージ。まるで第三者の視点で見たような、悲痛に歪む自らの表情。植え付けられた偽りの記憶。

いつからか頭に浮かぶようになった鮮明な光景から逃げるように頭を振る。

次に顔を上げると、そこには見慣れた街並みがあった。自分が現実にいることに安堵する一方で、そう考える自分に嫌気が差す。

(ただの一度の敗北で幻覚を見るまでに弱るか、ジエイド・グレード……!)

湧き立つのは怒り。

それは極小さな火種だったが、今の自分にとっては何よりも必要なものだった。

(クソッ！ クソッ！ クソッ！)

普段であれば、現状を前にして真っ先に表面化するであろう怒りの感情。久しく忘れていたその姿を追い、意図的に熱を持たせていく。

拳を握り、歯を噛みしめ、石畳の床を蹴る。心だけでなく、体を使

い感情を昂らせていく。

(あの庶民さえいなければっ！ あいつさえ！ あいつさえ！……)

やがて火種は大きく育って光を放ち、熱く、熱く、熱くなつて——
(………俺さえ、もつと強ければ)

——それでも、燃え上がるには至らなかった。

氣力を失い、停滞し、ゆっくりと浸水していく心情はまるで川岸に掛かる流木のように。

とてもではないが自分を知る者に見せられる姿ではなく、実際、あれから学園には顔を出していない。

『グレード家の人間はいつの時代も壁を越え続けてきた。それは敵対する派閥であつたり、時代そのものであつたり、立ち塞がる個人であつたりする。そして今、お前も同じ状況に直面している』

決闘をした日の夜。厳格でいつも叱るような口調だった父の言葉にどこか温もりを感じたのを覚えている。

『俺も挑み、破れた。それも当主になつてからで、相手はかつての仲間達だった。グレード家の男として、お前もいつか壁に直面するだろうと思つていたが……まさかその若さでとはな。少なくとも学園を卒業してからだと思つていたが……』

こちらを氣遣うように一つ一つ選ばれた父の言葉を受け、惨めな氣持ちばかりが募つた。

酷く似合わない、子を想う父親のような言葉を選ばせてしまった自分が嫌になつた。いつものように、失敗を責めて欲しかった。

『全てを使え。何よりも打倒を優先しろ。今日立ち塞がった相手は、お前の将来に絶対に必要なものだ。何度敗れても構わん。期限も設けない。その相手に勝つたために必要だと思つた事だけをしろ。そしていつか勝利し、ここで報告してみせるのだ』

そしてついに、父は哀れな息子を責めずに話を終えてしまった。

あれから俺は屋敷を出た。本当に近い者しか知らない場所に身を移した。それこそただの我が儘で、どんな顔で毎日親に会えば良いのか分からなかつたというだけの幼稚な理由に過ぎなかつたが、護衛

や使用人は何も言わずに付いてきてくれた。

グレード家の人間が庶民に敗れた。その事実は派閥を巻き込んだ大問題になるかと思っていたが、不気味なほど身の回りは静かだった。

今は頭を冷やせと、そう言われているような気がした。

(俺は……どうすればいいんだ……)

崩壊した自己同一性アイデンティティ、今までの自分を作り上げていた偽りの実力と、それに裏付けられていた空虚な自信。それらが剥がれ落ち、ただの特別でない一個人になった自分。

今まで積み上げてきた、若しくは自動的に積み上げられていたもの
の大半が崩れ去り、塵のように残った何かを拾い集めて形成した本当
の自分。ジェイド・グレード。

そんな男は、かつての自分が見れば鼻で笑う程に弱く——そして現実が見えていた。

(勝ち、負け……あれは、そういう相手じゃない)

あの日、召喚場での出来事を想起する。思い出そうとする度に割れるように痛む頭を押さえ、ブチリと何かが千切れるような感覚の奥から目的のものを引き上げる。

本能の拒絶を振り切って思い起こしたのは、恐怖と絶望の記憶だ。
シルバーと化け物が対等に向かい合っていたのは最初の一呼吸だけ。飛翔し、破裂した肉塊が召喚場を飲み込んで、それから始まったのはとても戦いとは呼べない惨事だった。

相手が行ったのは、決闘での勝利ではなく敵に苦痛を与える事のみを目的とした所業。

自分が見たのは、無数の肉塊に集たかられ、数え切れない暴力を受けてシルバーが惨たらしく形を変えていく様子。

『よろしくな、シルバー！』

目の前の光景を受け入れられず呆然としていた時、視点が切り替わるようにして遠い日の自分が現れた。

『だけど、おれだって強いんだ！ ケガしそうになったら、シルバーだって、他の誰だって、おれが守ってやる！ 約束だ！』

あの日交わした約束。無邪気に、無責任に、そして本当にそうできると信じていた約束。

『うそつき』

そんな過去の自分を共に見ていたシルバーが、強い恨みと非難を込めた言葉を口にする。守ると約束しておきながら、何も出来ず苦しむ守護獣を見ているだけの自分。

浅く呼吸を繰り返している間にもシルバーは分割され、肉塊に取り込まれていく。

助けないと。約束を守らないと。そう思った。

震える足を叱咤し、肉の床を駆けた。

ただ速く走る事だけを考えていた俺は、上から降ってくる別の肉塊に気付かなかった。

強い衝撃を受けると共に取り込まれ、向いている方向さえ分からない空間に閉じ込められた。体の自由を奪われ、剥がされ、折られ、刺され、千切られ、繋がれ、狂う事も許されず生かされ続けて――

(っ……違う！ あれは幻覚だ、惑わされるな……！)

分かっている。ありえない。今の記憶は自分の恐怖が生み出した幻覚で、事実ではない。

後から聞けば、シルバーも同じような幻覚を見たらしい。たとえ悪質な精神攻撃を受けていたとしても、俺を助けられなかった事に酷く落ち込んでいる様子だった。

シルバーが見た悪夢の中で俺がどうなっていたのかは、最後まで教えてくれなかった。

挑む事が間違いだったとは思わない。結果としてあの怪物の危険性をレティーシアに伝える事ができたし、体の欠損も無い。あの庶民が自分にとつての越えるべき壁なのだと思えば、むしろ出会えた事は幸運だとさえ言える。

呪いのようなものも受けておらず、すぐにでも行動を起こす事が可能だ。しかし……。

(何も無い。俺は……全てを失ってしまった)

再び立ち向かわなければならぬという使命感はある。しかし自

分の意思として、あの庶民を下してやろうという気は起きなかった。それは単純な相手への恐怖だけではなく、歩みを止め、熱を持たなくなってしまう自分自身への失望によるもの。

最も致命的なのは、それを理解していてなお心が揺れ動かない事。焦りも悔しさも何も無い、胸に穴が空いたような虚無感。

——ジェイド・グレードは折れてしまったのだろうか？

家の者達が今最も危惧しているのはそれだろう。それを知った上で、その問いに答えを出す事ができずにいる。

空っぽなのだ、本当に。今の自分は。幼き日からの恋心でさえ、その空洞を埋められない程に。

「盗みだ！ 黒い服の男ッ！ 誰か！」

助けを求める叫び声。閃光と爆発に続いて砂煙が足元に吹き込み、思考が中断される。

聞こえてきた言葉が本当であれば、断じて許してはならない悪事が行われている。それもすぐ手の届く距離で。

(近い……！ ……だが、俺が行ったところで……)

脳内を支配する負のイメージ。

油断し、貴族としての本質を忘れ、召喚師として敗北を喫した自分。これ以上恥を上塗りするような事があれば、次こそ本当にグレード家の人間ではいられなくなるだろう。

幸い、今は目立たない格好をしている。誰にも気付かれる事は無い。表立って行動するのは調子を取り戻してからでいい。そんな逃げる理由ばかりが脳裏に浮かんで——

『シルバーだって、他の誰だって、おれが守ってやる！ 約束だ！』

(……そうだ、俺は……約束したんだ……)

家族を守るという約束。民を守るという約束。

一度破ってしまったそれを次こそは果たす。そうしたいと思った。自分の意思で。

空虚な世界に放り出され、進むべき道が定まらなかった自分が辛うじて見つけた小さな目印。

冷え切った体の中心が、僅かに熱を持っていくのが分かる。

(行こう。俺だって誰かの盾になるくらいはできる筈だ)

自分が失った何かを求めて——否。

ただ民を守るために、ジエイド・グレードは走り出した。



「動くな。次はその目を焼く」

「ハア……ハア……！ クソツ、なんで魔導師のガキがこんなに動けるんだ……！」

爆発地点に向かう途中、複数の追手を振り切りながら人混みを縫って走る黒装束の男を発見して後を追った。

通行人に危害が及ばないよう注意しながら追跡し、ようやく人通りのない路地に入ったところで魔法を放った。魔導具によって何度か防がれたものの、魔力量で押し切った。

召喚術を使いしなかったが、相手も一端の実力者のようだった。「かなりの数を盗んだようだな。しかも、どれも魔力を溜め込むものばかり……何が目的だ？」

「止める！ 小汚い手で邪神様の供物に触るなッ！」

「邪神……？ お前、邪教の信者か？ まだ活動していたとは……」
戦に区切りが付き、人々の生活が安定してくると話題に上がるようになった邪神を信仰する団体。

しかし年月が経ち、神官を自称する幹部たちが捕らえられた事で急速に衰退し、ここ最近は噂を聞く事も稀になっていた。

既に解散したか、自然に消滅したものだと思っていたが……。
「馬鹿が。『まだ』じゃない。俺たちは始まったばかりなんだ。そして、もうじき終わる」

「気の触れた人間の戯言に付き合うつもりはない。檻の中で壁に向かって喋っている」

「本当に何も分かってないんだな。数日前に邪神様は一度この世界に顔を出されている。もう終わるんだよ、この世界は」

「数日前……」

狂信者の妄言。本来であれば聞く価値のない、耳を傾けてはならない言葉。

しかし、そう一蹴してしまうには違和感の残る、どこか引つ掛かる内容であるような気がした。或いは、心当たり。

強盗犯の男は言葉を続ける。

「あの日、邪神様は狂気と恐怖を振り撒いて俺達に教えて下さった。常日頃から祈りを捧げていた俺達だからこそ気配を察知する事ができた。耐え忍びながらも続けてきた教団の活動は正しかったのだと、今こそ顕現するための供物を捧げよと、そう仰つたのだ！」

「それで、盗みか。お前達の言う邪神とやらは随分と小さい事を指示するんだな」

「黙れ。消滅する世界の法になど微塵の価値も無いと分からんのか。俺達はもう隠れない。耐え忍ばない。儀式の準備は既に整いつつある」

事実なのか、それとも妄想を信じきっているのか。自分達の情報を一切隠そうとしない男の様子からは、既に目標を達成し、未来が確定しているという自信が感じられた。

ありもしない救いに縋り付き、古い書物のでたらめな記述に騙され、呪いの行使や不吉な存在を呼び出してしまう事件は近年でも僅かながら存在する。

世界が滅亡するなどという与太話は信ずるに値しないが、そういった事例に当てはまるのであれば強い警戒が必要だ。

（邪教の実態を暴く必要があるな。家に話を持ち帰って、組織的に対応を……）

家を出ておいて数日で戻ると言う行為には抵抗があるが、そんな事を言っていられる状況ではない。民を守る剣として、貴族としての役割を全うしなければならぬ。

そう考えていた時だった。

『——縋ッ縋ッ？……、……縋薙縋ッ寝ヲ……寝ヲ略後？√……——』

「ッ……!?!? この感覚は……!?!?」

頭を殴られたような衝撃。身の回りの空気が重くなった感覚。心臓を握られるような重圧に本能が警鐘を鳴らす。

この世界にとつての異物が、絶対に地上に顕現させてはならない致命的な存在が町中に舞い降りたという確信めいた予感。

「……は。……ははっ、……邪神様だ……っ! 邪神様が再び顕現して下さった! みる、邪神様は俺の行動が正しかったのだと肯定されている!」

「この気配……これが邪神……なのか……?」

「……お前もこの狂気を感じるのか? 信心を持たない愚者共は、実際に神のお姿を拝見するまで狂気を感じ取る事ができないだろうと文献には書いてあったのだが……」

「信心? 違う、これは……」

これは恐らく——経験。

知っている。この狂気の主と対峙した事がある。だからこそ自分は気配を感じ取れる。

それを裏付けるのは曖昧な記憶の欠片。精神の崩壊を防ぐために本能が封印した、あるいは切除した記憶の一部分。

邪教の男が言った、多くの人間はこの気配を感じないという言葉は恐らく事実なのだろう。誰しもがこれを感じ取っているのなら、既に王都は絶望と混乱の最中にある筈だ。

だが、そうはなっていない。強盗があつた事による喧騒が遠くから聞こえているだけで、町は今も静かなままだ。

「まあ、いい。ならばお前にも分かる筈だ! 邪神様がすぐ近くに御出でになつていているという事を! この袋小路の世界を破壊して下さるといふ事を! ああ邪神様、私はここにおりますっ!」

男は大きく口元を歪ませ、歓喜の表情で叫ぶ。

このまま邪教の情報を得るために喋らせておくか、近隣住民に不安を与えないように黙らせるかを悩んでいたところで変化はすぐによつてきた。

「もうこれ以上お待ちさせる訳にはいかん! 早く儀式を行い、邪神

様をこの世界に正式にお迎えしなければ！ ……!? ……ひつ…
！ あが……っ」

「？ おい、どうした！」

「なん、だ。これは……？ 違う、こんなもの……違う！ 来るな…
！ 来るなああああああ!!」

突如男は何かに怯え、背後の壁に頭を衝突させながら首を、胸を、地面を掻き毟り、血だらけになった両手を己の口に押し込んだ。続けて全身を痙攣させながら口内の異物を掻き出すような動作を繰り返すと、ついには白目を剥いて脱力する。

急いで状態を確認したが呼吸はしており、どうやら失神しただけのようだった。

「邪神の影響を受け過ぎた、のか……？」

長年に亘^{わた}って祈りを捧げ、邪悪と狂気に対する感度を研ぎ澄まさせていたであろう教団の信者達。

この男はそんな気配を強く知覚した事に精神が耐えきれず、こうして狂ってしまったのだろうか。

気付けば邪神の気配は消え去っており、重く停滞していた空気も元に戻っていた。止まっていた時がゆっくりと動き出すような感覚。

「邪教……か」

状況とは不釣り合いな、美しく澄んだ空を見上げて思う。

男の話はどこまでが本当なのか。

他の信者が続けて事件を起こすのではないか。

(それを確かめるためにも、やはり奴らを野放しにはできない。まずは家に報告して、多少強引にでもこの男に尋問を……)

やるべき事とその手順を脳内で組み上げていく。立ち尽くしている時間など一瞬たりとも有りはしない。

目を閉じて息を吐き、もう一度前を見る。

昨日まで心中を支配していた虚無感や無力感は完全に消え去り、胸の内には確かな火が灯っていた。

博打黙示録へレシー

「あつ、ここで駒を動かした後にあえて装備を外せばいいんじゃないかな？　これは……ゲームの必勝法を見つけてしまったね……！」

やあ、僕の名前はへレシー！

小さい頃に呼び出した守護獣のおかげで召喚師としての素質を認められた僕は、少し前からあの有名なヴァリエール召喚師学園に入学して召喚師になるべく頑張っているんだ！

買い物を終えて寮に戻ってきて、今はベッドに腰掛けながら買ってきたボードゲームで遊んでいるところだよ！

最初に各自でデッキを構築して、それを使いながら盤上に並べた駒を動かして遊ぶ二人用のゲームなんだけど、帰り際に見つけた露天商のおじさんの熱意に負けてつい買っちゃったんだ！　王都で驚くほど流行ってて、他に類を見ない程に面白くて、ルールを知っているだけで友達が百人単位でできる最高のゲームらしいよ！　買うしかないね！

こういう頭を使うゲームは故郷にもあつて、地面に印を書いていくゲームをよくハッピーと遊んでいたんだけど、戦績は芳しくなくて負け越しているよ！

村のお爺さんやお婆さんと勝負する時は心穏やかに接待したりされたりできるんだけど、やっぱりハッピーみたいな親しい相手との勝負だと熱くなっちゃうよね！　幼馴染として、家族として、男として負けっぱなしじゃられないよ！

だからこうして彼女と対戦する前にゲームのコツを掴もうと研究してるってわけ！　ルールの穴を利用した革新的な戦術を思いついちやったから、試しに今からハイドラと遊んで練習しようかな！

ハッピーはまだ見ちゃ駄目だよ！　君に勝つための特訓だからね

！

『それズルくないですか……？
√縋？　▲縋ココ縋縋上→縋？』

「へレシーー！　へレシーーはいるかしらー！　いるわよねー！」

早速ハイドラを召喚して……と思ったけど、来客の対応をしないと

いけないみたい！

最近、というか出会って以来かなりの頻度でレティーシアと遭遇してる気がするんだけど……君もしかして暇だったりする？

珍しく大きな声を出して焦っているみたいだけど、隣の部屋の迷惑になっちゃうからもう少し落ち着いた方がいいと思うな！

「どうしたの、そんなに急いで」

「怖いわ！ はやくこの身体を慰めて頂戴っ！ 腕を借りるわ！」

「うわ、動き速っ」

部屋に入ってきたレティーシアは一瞬で距離を詰めて僕の腕に抱き着いてきたよ！ 動体視力には自信があるから見えないって事はないんだけど、ゲームの駒がバラバラになったら困るから体当たりはやめて欲しいな！

彼女の身のこなしが軽やかなのは、きつと召喚術だけじゃなくて武術なんかも嗜んでいるからだろうね！ 貴族の子は多芸で羨ましいや！ その分苦勞もしてそうだけどね！

「はあっ……恐怖が溶け出して……身体が悦んで……ん……」

「え、怖……」

なにこれ？ 焦った様子で不安そうにしていたのは確かだけど……相変わらず言葉選びは最悪だし、僕の腕に全身を絡めるようにして身じろぎする姿は女性として褒められたものではないよ！ 誰かに見られると僕の方が危ないから外では絶対にしないでね！

何を言っても無駄だろうからしばらく自由にさせていると、レティーシアの震えが収まって表情も柔らかくなってきたよ！ 良かったね！

「落ち着いた？ 一体何があったのさ」

「……今日の昼頃に、町中でとても怖い気配を感じたの」

「気配？」

「この世界ごと飲み込んでしまうような不吉で恐ろしい何かのものよ。怖くて、苦しくて、逃げ出たくて……すぐに貴方を探したのだけれど、寮に居ないようだったから部屋の前に見張りを置いて屋敷に戻ったわ」

「見張り……ああ……」

帰ってきた時に部屋の前にいた女の子、あれってレティーシアの家の人だったんだ？ ガチガチに武装してたし学園の生徒じゃなさそうだとは思ったけど、やけに疲れた顔をしてたから声も掛け難かったんだよね！

目的のために手段を選ばない選択肢の幅広さには感心するけど、そんな仕事を頼まれる人の気持ちも考えてあげてほしいな！

「あの気配……異常で異質で、この世界のものじゃない何かを感じたわ。自分と同じ立場にいないような……でもそれ以上は心が理解を拒んで……思い出せなくて……」

うーん。昼頃なら僕も町にいたけど、そんな常識外の存在が近くにいたら流石に分かる気がするけどなあ。

レティーシアの物言いが抽象的なのも気になるね！ 世界が違う……同じ立場にない……あつ！

「もしかして……」

「流石貴方だわ。何か分かったのね」

「それ、僕の守護獣かも。決闘の時に見たでしょ？ あの背の高い女の子」

「……え？」

レティーシアは呆気に取られたように目を見開いているけど、多分そうなんじゃないかと思うね！ ハッピーは短時間だけど昼間に顕現してもらったし、彼女って他人から変な勘違いをされがちだから！

「あれが貴方の守護獣の気配……？ ……なにか違うような……」

「え、覚えてないの？ 決闘の時に怖がっていたし、認識はしてたよね？」

「ええ、見た……見たわ。決闘の時に、間違いなく。あの日の夜、貴方と寝て……起きて……次の日もちゃんと覚えていたわ。確か……小さくて可愛い女の子だったわよね」

「……ん？」

「寝る前は恐怖と不安で押し潰されそうだった気持ちだが、朝起きたら温もりと多幸福感に変わっていたの。あの時に確信したわ。貴方は私

てきたわ……」

レティーシアは僕の提案をきっぱりと否定して、今度は正面から胸に抱き着いてきたよ！ 子供かな？

もう成人してるんだから異性との距離感はなんとかした方がいいと思うけど、頭が痛いらしいし今は何も言わないでおくよ！ 次からは気を付けてね！

「大丈夫？ 体調が悪いならハッピーに薬を持ってきてくれるように頼もうか？ 彼女は看病も得意なんだ」

「分かったわ、分かったから貴方は少し黙って……あ、でもこうして近くで貴方の声を聞いていると、胸が温かくなつて……恐怖が溶かされて……すうー……痛みが引いて……すう……はあ。安心するわ……万病に効く……」

「ええ……」

きも……じゃなかった、えっと、何て言えばいいのかな。悪いけど適当な言葉が出てこないや！ この姿を見たらご両親が悲しみそうだなっていう感想だけは出てくるんだけど！

たつぷり十回以上も僕を吸った(?)レティーシアは、顔を上げて満足そうに表情を緩めたよ！ 可愛いね！ 満足したなら離れてね！

「ありがとう、もう大丈夫……あつ、まだ不安だから頭を撫でて欲しいわ。不安だから仕方がないわ」

「だったらせめて不安そうな顔で言ってほしいんだけど。それに、女の子の髪に気安く触れるのは良くないから止めておくよ」

「……まさかの反応ね。どうして変なところだけ常識的なのかしら。変なところだけ」

「故郷では常識人で通ってたからね。ハッピーのおかげで女の子との付き合い方はバツチリさ」

『?シ澆シ』

それに、ハッピーと暮らす中で身に付いた知識だけじゃなくて、村の大人達からも色々と教わってきたからね！

「女子の髪には気安く触っちゃいかんぞ。殺される」っていうのは

武器屋のお爺ちゃんからの言葉だよ！

「縛遺？…ヲ縛ヲ縛控^あ c 縛ゆ？√ 縛^{頭を} 縛九^{撫でて} i 縛矩？縛呈牒^{もらえてない} 縛縛ア縛ヲ縛」

もちろんその助言があったからだよ！ ハッピーがいないタイミングで「男同士の話をしようや」とか言われた時はビックリしたけど、今となつてはその情報提供に感謝しているよ！ 家族や友達に失礼な態度は取りたくないからね！

まあハッピーには髪なんて無いけど、ようは頭に触らなければいいんでしょ？

『縛ヲ縛ヲ縛^あの^{お爺さんへの} 縛^{お土産は} 縛^{買わなくても}？？ 雁悄逕 縛ツ雉キ縛^{良さそう} 上→縛上縛』

いや、入学祝いも貰ってるんだし、それくらい買って帰ってあげようよ……。

そんな風にハッピーと頭の中で会話していると、胸に抱き着いたままのレティーシアが小声で何か言っているのが聞こえてきたよ！
なんだか聞くのが怖いんだけど、聞き逃すのはもつと怖いから耳を澄ませてみよう！

「……でも、ここで諦めるにはあまりにも惜しいわ。どうか認識の穴を突いて頭を撫でてもらえるよう誘導できないものかしら……」

「レティーシア？」

「貴族の風習や慣例には疎いようだから、そこを攻めて丸め込めば大体の要求は通る……そう、そうよね……ついでに色々と言質も取って……」

「レティーシア……？」

まだ頭が痛むのかな？ 相変わらず変な事を言っているね！

何かを企むのは結構だけど、田舎者の僕にそういう搦め手を仕掛けようとするのは人としてどうかと思うな！ 貴族は交渉術にも長けているだろうし、主導権を握られると簡単に素寒貧^{すかんびん}にされそうで怖いよ！

部屋に入ってきた時に比べて気分も落ち着いたみたいだし、妙な事をされる前に帰ってもらって……いや、待てよ……？

この状況、使えるかも知れないね……！

「あのさ、レティーシア。召喚師が相手に何かを求めるなら、その交渉材料は掴み取った勝利であるべき。違うかな？」

「……！」

そう、僕は閃いたよ！ 今の状況を利用して、レティーシアにゲームの練習台になってもらおうってね！

ハッピーに勝つためにハイドラと遊びながら特訓をしようと思っていたけど、どうせならハイドラにも最初から勝って契約者として頼り甲斐のあるところを見せたいからね！ レティーシアにはその為の礎いしずえになってもらうよ！

「……分かったわ、場所を変えましょう。前に貴方が言っていた、授業で呼び出した召喚獣での決闘で構わないわね？」

「違うよ。ゲームだよ。これ、今日買ってきたんだ」

「ゲーム？」

瞳に闘志を滾らせているレティーシアには悪いけど決闘するつもりなんて全く無いよ！

その条件だとハイドラとコン子さんが戦う事になる訳だけど、相手のコン子さんが普通に勝負してくれるタイプとは思えないからね！
絶対に何か理不尽な事をしてくるに決まっているよ！

その点、このゲームは理不尽な要素なんて無い知的戦略ゲーム！
実力のみが物を言う真剣勝負！

さっき買ってきたゲームの対戦相手になってほしい旨を説明すると、レティーシアは口元を手で隠しながら頷いてくれたよ！

「……成る程。それで勝負して、私が勝てば何だって言う事を聞িয়েくれる。そういう事ね」

「何でもとは一言も言っていないけど、まあ趣旨としてはそうだね。付き合ってくれる？」

「ええ。こちらからもお願いするわ」

よし、上手く話を運べたね！

さっき考えた最強の戦術が対人戦で通用するのかを最終確認して、召喚獣達との本番に備えよう！

あつ、ハッピーは今からのゲームも見ちや駄目だからね！ また別の日に正々堂々と勝負しよう！

『正々堂々 睨？ ス邵イ？ スツ？？ 遯』

「ところで、貴方はこのゲームを今日買ったばかりなのよね？ その……大丈夫なのかしら。よく似たゲームの経験があるとか……」

「いや、こういうゲームは初めてだね。でもルールならバツチり覚えたよー！」

「……私は五本先取でいいわ。貴方は一度でも勝てば勝ち。もし貴方が勝てたのなら、何でも好きなものを要求してもらって結構よ」
「えっ」

……すごい自信だね！

これ、もしかしてやらかした？ レティーシアってこのゲームかなり得意だったりする？ それともハツタリ？

あつ、なんだかボコボコにされる未来が見えたかも！ 五連敗した上に金銭なんて要求されたら一直線で奴隷落ちだよ！ なんだか話の流れで賭け勝負をするみたいになっちゃってるけど、一旦ここは条件を白紙に戻した方が身のためだろうね！

「あのさ、やっぱり——」

「現金は受け取り難いでしょうし、貴方が勝った時は……町の飲食店で使える無料券なんてどうかしら。どこの店でも、何度でも使える切符をクレセリゼ家が用意するわ」

「——……え、無料？ どのお店でも？」

「ええ」

「何回でも？」

「その通りよ」

「……」

……リスクとリターンを天秤に掛けて、必要な時にしっかり勝負できるのが真の男ってやつだよね！



「4, 3に魔導兵を移動させて、魔力トークンを消費して5, 2に魔法陣を設置するわ」

「……」

「最後に竜騎兵の向きを西側に変えて、先手の野伏を発見状態にして終了よ」

「……」

ハッピー！ ハッピー助けて！ 序盤からずっと苦しい！ 窒息しそう！

『邵阮呻檣ク？イ奸？壺？邵？スス笞？ケア葱哲鍋クコ？邵ココ蟬??クア雋樽櫓？スウ邵コ蝻カ？狗ケア？郢？郢郢？』

レティーシアが想像の二十倍くらい強いよ！ 十分な助走を取った上で過去の自分を殴り飛ばしたい気分だね！

ちなみに魔力回復用のポジションは構築段階でデツキから抜いちやつてるよ！ 終盤になる前に一気に押し切れる算段だったからね！ アハハ！

『縛縛ソ縛ア縛？』

「し、召喚師を一旦後ろに下げて……」

「そこに下げると貴方の破城槌が迂回する事になるけど大丈夫かしら。それ以上行軍が遅れると私の魔導ゴーレムが間に合ってしまうわ」

「……」

ああ……！ 無料券が！ 武器屋のお爺ちゃんへのお土産代が！

男の信念

「おはよう。既に全員知っているとと思うが、先日奴隷を狙った組織的な盗みと魔導具店への強盗があった。どれも王都内での事だ」

やあ、僕の名前はヘレシー！

レティーシアにボードゲームでボコボコにされつつも素質を認められた僕は、いつか彼女にリベンジを果たす事を誓いつつあの有名なヴァリエール召喚師学園に通っているんだ！

今日は学園内の闘技場に移動して先生の話を聞いているよ！

強盗っていうのは昨日の買い物中に見たあれかな？ 犯人が捕まっているといいね！

「詳しい情報は降りてきていないが、関連する事件に生徒が巻き込まれる、または直接狙われる可能性が十分にあるというのが学園長の考えだ。そこで、この国の未来を担う召喚師である諸君らを守るために学園側でも警邏や護衛に一部の人員を割く事になった」

へー、思ったより大事になってるみたいだね！ 昨日のあれが王都の日常風景じゃなかったみたいで安心したよ！

それにしても、まだ資格も取れていない生徒に護衛を付けるなんてよっぽど召喚師を大切にしているんだね！ まあ単純に貴族層に向けたアピールなのかも知れないけど！

「これはあくまで一時的な対応だが、全員に護衛を付ける訳にもいかん。そこで、今日は諸君らの自衛能力を確認するために召喚獣を使わず模擬戦を行ってもらうことにした。前に呼び出した召喚獣の能力に関しては既に記録しているので、残った召喚師本人の力を確認する事で総合的な自衛力を割り出そうという訳だ。それらの情報から優先度を決定して効果的に人員を配置していく。家が大きく十分な戦力の護衛を既に付けている者も、今後の授業の参考にするため今日の模擬戦には参加してもらおう」

なるほど、今日は召喚師本人が戦うみたいだね！ ……召喚師学園なのにな？ そんな事ある？

闘技場に集合した時点で嫌な予感はしていたんだけど正直この授

業内容は予想できなかつたね！ 流石はヴァリエール召喚師学園、いつも僕の想像を超えてくれるなあ！

「一応確認しておくが、この中で魔法を使えないものはいるか」

「はいー」

「いるのか……」

え、正直に答えたら引かれちゃったんだけど……もしかして魔法が使えないのって召喚師として結構ヤバイ？ でも差し支えがあるんだったら入学前に確認するべきだよな。

召喚術が使えるだけの魔力を持っている人は幼い頃から魔法も習うのが普通なのかな？ 確かに僕も自称門番のお婆さんに教えてもらった事があるよ！ 残念ながら使えるようにはならなかつたけどね！

「……現代戦闘において、敵魔導師への対抗手段はほぼ必須だ。今からでも訓練を受けて魔法を使えるようになるか、少なくとも防御用の魔導具を揃えておくべきだろう。護衛はまずお前に付ける事になりそうだな……」

なんだか正論で諭されちゃったけど、先生が言ってる事は理解できるよね！ 召喚獣がどれだけ強くても召喚師本人がやられたら意味ないし！

もう一度魔法の習得に挑戦するっていうのは考えた事がなかつたよ！ ずっと自分には無理だって諦めてたけど、王都には魔導師学園もあるし、魔導書だって書店に充実してるし、この恵まれた環境で頑張ったら意外と習得できるかも知れないね！

「では、今から二人ずつ中央に出て模擬戦を行ってもらおう。これはあくまで自衛能力を確認するための特別な行いであり、勝敗が成績に影響するような事は無い。誰か最初に名乗り出る者はいないか？ 好きな相手を使命していいぞ」

「先生、わたくしここは私が」

「レイチエルか。いいだろう」

先生がそう言うと、一人の女の子が元気よく手を上げたよ！ レティーシアとコン子さんが契約した後すぐに召喚に臨んでいた子だ

ね！ 彼女が契約したのは確か大きめの鳥さんだったかな！

黙っていればクールに見えるレティーシアと違って、レイチエルさんはイメージ通りに貴族貴族してる感じのお嬢様ですわよ。

「私は……レティーシアさんとの対戦を希望しますわ！」

「おお……っ」

「すごい……」

お嬢様はレティーシアと戦いたいみたいだよ！ 何か因縁でもあるのかな？

他のクラスメイト達はその対戦カードに驚いているね！ 格上への挑戦を讃えて……というよりは、単純にレティーシアに戦いを挑んだ事自体に驚いている感じかな！

もしかしてレティーシアって友達少ない？

「ええ、私は構わないわよ」

「感謝しますわ。訓練の成果をお見せします。今日こそ努力が才能を上回る事を証明してみせますわ！」

「なんだか久々ね。貴女とのこういうやりとりも」

お嬢様の挑戦をレティーシアが受けた形だね！ 過去にも模擬戦の経験があるっぽい口振りだけど、二人の関係性はよく分からないや！

お嬢様の努力がレティーシアの才能を上回るか、みたいな話をしていくけど、レティーシアだって努力はしてると思うよ！ 言いたい事は分かるけどね！

模擬戦用の装備置き場から、お嬢様は両手持ちで頭の小さいハンマーを、レティーシアは首から下を覆い隠せる大盾を選んで取ってきたよ！ ……なんか初っ端から異色じゃない……？

ただの模擬戦だし好きな武器を使ったらいいとは思うけどさ、二人ともちよつと尖り過ぎかな……。

「よろしく願います！ 【アクアショット】！」

「ええ、よろしく願いますわ。【アンチ・アクアマジック】」

【「サンダーアロー」！】

【「グラッドフィールド」】

二人の模擬戦が始まったよ！　まるで魔導師同士の戦いみたいだあ……。

クラス全員がこんな感じの戦い方をするんだとしたら、僕もレティーシアみたいに盾を持った方がいいかもね！　魔法を防ぐ手段が無いと勝負にすらならないよ！

「ブレイズマイン」！　いきます！」

お嬢様が回り込みながら飛んでいくタイプの炸裂魔法を複数放つてから間合いを詰めに行ったよ！

あのハンマー、当たり方によつては洒落にならない威力になると思うんだけど、頭に直撃でもしたらどうするんだろうね？　レティーシアの家にはお抱えの治癒師がいるとは言っていたけど、実際に怪我させたら親御さんに滅茶苦茶怒られそう！

そういうリスクもあつてレティーシアに挑戦しようとする人が少ないのかな？　お嬢様には是非ともこのまま彼女の友達でいてあげてほしいね！

「アイスウォール」

「！　それを待っていましたわ！」

炸裂魔法とお嬢様に挟撃される形になったレティーシアが魔法を使って氷の壁を周囲に展開すると、お嬢様が勢いよく床を蹴つてその氷壁に向かっていったよ！　なるほど、守りに入ったレティーシアの氷を壊すためのハンマーだったんだね！　過去の対戦経験から対策を考えたのかな？

透明度の低い氷が邪魔でレティーシアの様子が見えなけれどそれは相手も同じ事だろうし、不意について一撃を入れるチャンスだね！
「はあっ！」

お嬢様が炸裂魔法より先に氷壁に取り付いたよ！　大きく振りかぶつたハンマーがレティーシアの氷を捉えて――

「インパクト衝撃」

「なっ!?　ぐう……ッ！」

――と思つたけど、ハンマーが直撃する寸前でレティーシアが大盾を氷壁に叩きつけて、内側から氷を割つてお嬢様を吹き飛ばしたよ！

水壁は魔法を防ぐためだけじゃなくて、相手を迎え撃つための目眩ましてもあつたんだね！

大盾で強く打ち据えられたお嬢様は、何度か床を転がってからすぐに体勢を立て直して魔法を構えたよ！ 根性あるね！

「あ、【アクアショット】……………」

スライドステップ
「【滑 歩】」

「っ……………!?!」

なにあれ。レティーシアが氷の上で踊るみたいにスルスルと移動していくよ！ 摩擦とか慣性を無視しながら優雅に床の上を滑走する姿に頭が追いつかなくて混乱するね！

咄嗟に放った魔法も避けられて、お嬢様はハンマーで防御姿勢をとったまま固まっちゃってるよ！ 大盾みたいな金属の塊が高速で迫ってくるのって普通に怖いよね。

「き、今日は勝ちを譲りますが、私は決して諦めせんわっ！ いつの

日か——」

インパクト
「【衝撃】」

「みッ やっ！」

あ、飛んだ。最後まで言葉を紡ぐ事さえできずにゴロゴロとこつちに転がってくるお嬢様を見てると何ともいえない悲哀を感じるね！

レティーシアの容赦の無さは美德だと思うけど、これじゃクラスメイトに引かれちゃうんじゃないかな。同じ学び舎で顔を合わせる仲間だからこそ互いを尊重する意識が大切だと思うよ！ やり過ぎには気を付けよう！

「流石レティーシア様！ 魔法だけでなく戦技も一流だ！」

「必要以上の手の内を見せずに勝利する……………難しいな……………」

「お、俺も頑張るぞ……………っ！」

あ、そういう反応なんだ。意外に肯定的でビックリだね！

勝てば官軍ってことなのかな？ お貴族サマらしい明快な判断基準だと言えるね！

「げほっ、げほ……………っ、また……………届きませんでしたわ……………！」

お貴族サマの思考の難解さに頭を悩ませていると、足元に倒れてい

たお嬢様がゆっくりと動き出したよ！

見たところ外傷は無さそうだけど、骨とか内臓に損傷があったら大変だよな。一応声を掛けておこうかな。

「えっと……大丈夫？ 随分と派手に吹き飛んでたみたいだけど」

「ええ、ありがとう。ですが問題ありませんわ。目標として……ライバルとして……いつか彼女を越えてみせますわ……！」

お嬢様はゆっくりと立ち上がってレティーシアの方を見ながら氣丈に笑ったよ！ その不屈の精神は僕も見習っていききたいね！

お嬢様は戦いで、僕はボードゲームで、どちらもレティーシアに挑む立場なのは同じみたいだ！ 僕の知らない癖や弱点なんかを教えてもらえれば勝利にグッと近付くだろうし、ここは是非とも協力関係を築いていきたいところだね！



「うわ、すごい猛攻だね」

「マリードさんの長所はあの素早さですわ。あれは決まったでしょうね」

お嬢様とレティーシアの戦いを見て気合が入ったのか、それから次々に模擬戦が行われていったよ！ 見世物でも眺めているような感覚で気楽に観戦していたけど、残りの人も減ってきたしそろそろ自分の事も考え始めないといけないね！

僕と同じく相手がいなくて余ってるっぽい庶民の人が少し離れた所に座ってるから話し掛けに行こうかな！ いつも教室では逃げられちゃうんだけど、今みたいに強制的に誰かと二人組にならないといけないタイミングならそうもいかないよね！ 拳を交えつつ庶民トークで盛り上がろう！

「お、おい庶民！ 俺と勝負しろ……っ！」

「……ん？ あー、君かあ」

庶民の子に狙いを定めて腰を上げたところで聞き覚えのある声が近付いてきたよ！ この男の子はあれだね、ジエイド君の取り巻きの

一人だね！ 名前は確か……カイゼル君だったかな？

校舎裏に呼び出された時にコン子さんから精神攻撃を受けちゃったみたいだから心配していたんだけど、今ではすっかり元通りみたいで安心したよ！

「俺が勝ったらジエイド様について知っている事を全て吐け。……そして、あの校舎裏で会った女性を紹介してくれ……！」

「……なんて？」

あ、元通りになってないね！ コン子さんの影響が残ったままだね！ 可哀想に！

これって法的にも色々駄目な状態だと思うんだけど、契約者であるレティーシアの責任問題になったりしないのかな？ それともクレセリゼ家の発言力で握り潰される？

「分かってる。あの女性^{ひと}はレティーシア様の召喚獣なのだろう。だから、こうしてお前に話を持ち掛けている」

「いや、契約者に直接言った方が早いと思うんだけど……」

「馬鹿が。レティーシア様の召喚獣だぞ？ 俺なんかが下手に近付いて妙な誤解でもされようものなら家ごと潰されかねん。無論こちらに下心など無い。下心など無いが……向こうがどう感じるかは別の話だからな」

「まあ、何事も受け手の気持ちが大切だよな」

「そこでお前だ」

「どこで僕？」

ちよつと考えが読めないんだけど、リスクがあるのが分かっているのに親しくなろうと画策している時点で魅了の影響が残っちゃっているのは明らかだよな！ 今度コン子さんに会ったら治してもらえるように頼んでおくよ！

「不自然にならない程度に俺を紹介するだけでいい。別に、あの女性^{ひと}に俺と契約するよう言い寄ったりするつもりはない。ただ、どこかで顔を合わせた時に軽い話ができる程度の仲にはなりたい。彼女が町で単独行動をしている姿を見た時に、強くそう思ったんだ」

「へ、へ……」

うわあ、なんだか話を聞いていると体がむず痒くなってきたよ！
まるで恋する少年の青春物語みたいになってるけど、どうせ魅了が抜けてなくて暴走してるだけだろうからここで変に後押ししちゃうと後でカイゼル君が大変な事になりそうで怖いなあ。召喚師は貴重らしいから簡単に消されちゃったりする事はないだろうけど、歴史の裏側に回される可能性は十分にあるよ！

ただでさえジェイド君が出席してこなくなっちゃったのに、この短期間でもう一人いなくなるのはマズいよね。クラスの中に悪い奴でもいるのかと思われちゃう！

なんとかカイゼル君にコン子さんを紹介しないようにして、彼を権力者の魔の手から守ってあげよう！

「うーん……話は分かったけど、勝った時の要求が二つもあるのは欲張り過ぎだよ。君にとって本当に必要な方だけにしてくれないかな」
「ぐ……なんて卑怯な……！」

そんな歯ぎしりして悔しそうな顔されても……。
そもそも僕、君の話に乗ってあげてる側なんだけど？

「……………ならば是非もない。ジェイド様の情報を教えろ」
「まあ、そうなるよね。分かったよ」

お、意外に冷静。ジェイド君の取り巻きとしての自覚が見受けられるね！ 単に時間経過で魅了が弱まっているだけかも知れないけど！

これで勝っても負けてもカイゼル君にコン子さんを紹介しなくて良くなったね！ 僕は今、一人の学生の未来を守ったよ！

それにしても実際は何も知らないジェイド君の情報を空売りできるとは思わなかったね！ ジェイド君の取り巻きに対しては今後も同じ手口が使えるかも？

こういうのが王都の交渉術ってやつなのかな？ あくどいね！
「あ、そうだ。僕も教えて欲しい事があるから、君が負けた時はよろしくね」

「はあ？ 馬鹿にするのもいい加減にしろ。そんな事は万に一度も有りはしない」

「まあまあ。そういう条件を付けた方がきつと盛り上がるよ。一方的な勝負じゃ君だつて面白くないでしょ?」

「……フン、いいだろう。大口を叩いた事を後悔させてやる」

ついでにこつちからも条件を出してみたけど、結構チョロい……じゃなくて快く応じてくれたね! なんだか故郷で聞かされていた話よりノリがいいんだよね、ここの貴族の人って。おかげでストレスなく勉強に打ち込めているよ!

ちなみにもし僕が勝ったら例のボードゲームのコツを教えてもらおうと思ってるよ! 流行ってるゲームらしいしカイゼル君もやってるよね?

「行くのね。貴方の剣がレティーシアさんに届き得るものかどうか、同志としてしっかりと見させていただきますわ」

「いや、そんな目線で見なくていいから」

カイゼル君との話を聞いていたレイチエルさんが変な事を言い始めたんだけど……もしかして僕も一緒に剣や魔法でレティーシアと戦うとか思われてたりする? ボードゲームで勝ちたいんだつて観戦中に説明したよね?

これが貴族ジョークなのか、それとも僕の話を全く聞いていなかったのか、ちよつと判断がつかないなあ。丁寧に説明してボケを殺しちゃうのも悪いし、ここは触れないでおこうつと!

「カイゼルの相手は……ヘレシーか……? カイゼルよ、その者が魔法を使えないという話は聞いていたな?」

「はい。そのような人間に魔法を使うなど魔力の無駄です。剣技のみで圧倒してみせます」

「ならばよし。始めるがいい。ただし、あくまで自衛力を確認するための模擬戦だという事を忘れるな」

ペアになった事を先生に伝えに行つただけ……何故か僕だけじゃなくてカイゼル君も魔法を使わない流れになつてるよ! ラツキー!

負けても実質的に失う物が無いとはいえ、僕がジェイド君の事を実際は何も知らないつてバレたら怒られそうだし、ゲームのコツを聞き

出すためにも勝てるなら勝ちたいもんね！

武器は……どうしようかな？ 故郷で害獣駆除をした時の印象だと、人型の生き物には鍬がやりやすいと思っただけだけど用意されてないんだよね！

どうせ訓練用の武器に刃なんて付いてないんだし、適当な重さのある棒ならなんでもいいや！ ご立派な戦術なんて僕は知らないし、畑仕事で身につけたパワーを単純に振るうだけだよ！ この大きな剣なんか丁度いいんじゃないかな？

「……ふん、両手剣か。型を修めているかも怪しい素人がどうやって扱うのか見物だな」

「型……型ね……」

ないよ！ そんなもの！

魔法と同じで害獣駆除の仕方もある自称門番のお婆さんから教わったんだけど、あの人感覚派だから言ってる事が何一つ伝わってこないんだよね！

「冷たい感じがしたら体の芯を持ち上げる感じ」とか言われても僕には全く分からないよ！ ちなみにこれは戦技を使うためのイメーヂ………みたいに関こえるけど、ただの走り方のコツらしいよ！ 冗談きついね！

カイゼル君が選んだ武器は使いやすそうな長剣！ 他のクラスメイトも同じ得物を使っている人が多かったよ！ 王国剣術の基本なんだらうね！

「おい、初手は譲ってやる。好きに打ち込んでくるがいい。それが開始の合図だ」

闘技場の中心に移動して向かい合うと、カイゼル君はどこかで聞いたような言葉で僕に先手を促してきたよ！ 流石はジェイド君の取り巻きをやってるだけの事はあるね！

剣を横に構えているって事は、まさか一発目は避けずに受けるつもりなのかな？ こっちは両手剣だから結構な重さがあるんだけど……随分と防御力に自信があるんだね！

「じゃあお言葉に甘えようかな。いくよー」

両手で大剣の切っ先を天高く掲げながら一歩ずつ近付いていくよ！絶対に相手が攻撃してこないって分かっているからこそできる隙だらけの構えだけど、一撃を重くする方法としては理に適ってるんじゃないかな！

「お前……なんだその滑稽な構えは……」

「おい見ろよ、あの庶民の剣の持ち方！」

「ハハハ！ あいつ本当に何も知らないんだな！」

あ、カイゼル君が呆れてる！ 遠くで見守ってくれてるクラスメイ卜達も楽しそうに盛り上がっているね！

そのままゆっくり歩き進めると、両手剣なら大きく踏み込めば攻撃できそうな距離になってきたよ！ やっぱリーチの長い武器ってそれだけで優位性を感じちやうよね！

重いから単純に振り下ろすだけでも強力だし、害獣駆除のトドメっていう用途に限れば素人でもある程度の仕事ができる武器種だと思うよ！

「舐めやがって……俺が本当の剣の振り方というものを教えてやる！

来いッ！」

「はいはい」

僕は頭上に掲げた両手剣はそのままに、一息で距離を詰めてカイゼル君の腹部に蹴りを叩き込んだよ！ お貴族サマに来いと言われたら行く。庶民として理想的な働きだね！

「ッ!? がハ……っ！」

突き刺した足を前方に振り切ると、カイゼル君は長剣を手放しながら吹き飛んでいったよ！ これで試合開始って事でいいんだよね？ 相手が体勢を崩している間に追撃しよう！

自称門番のお婆さんが「血が出る生き物は腹を刺せば死ぬ」って言ってたし、カイゼル君は血が出る生き物だから腹部を狙おうかな！

「ゴボ、ごほっ……エ、【エアフィールド】……！」

「おおっと」

両手剣を持ち直して跳び上がると、カイゼル君が使った魔法にぶつかっちゃったよ！ 透明な空気層に阻まれて全然前に進めないん

「ただ何これ？ 魔法ってやっぱり不思議だなあ。」

「こうなると僕はもうお手上げだよ！ 召喚できない召喚師なんてこんなものだよね！」

「ふむ。魔法を使ってしまったようだ……どうする、カイゼル。まだ続けるか？」

「ツ……いいえ、俺の負けで構いません。しかし、クソツ！ なんて卑怯なやつなんだ……」

「あ、降参してくれた。間違って咄嗟に魔法を使っちゃったから勝ちを譲ってくれたんだね！ カイゼル君が両手剣の方ばかり見ていたからつい蹴つちやっただけ、なんだか不意打ちしたみたいで悪いなあ。」

「でも勝ちも勝ち！ これで知りもしないジエイド君の情報を空手形にした事はバレずに済みそうだね！」

「庶民が……汚い口で……」

「カイゼル……人柱……」

「やはり……の信……手段を選ばない……」

「特に技量を競う展開にならなかったからか、クラスメイト達も盛り下がってヒソヒソ話を始めちゃったね！」

「でもこれってカイゼル君がうっかり魔法を使っちゃったのが原因であって、別に僕が悪い訳じゃない？」

「おめでどう。流石貴方だわ」

「うわ」

「気が付いたら後ろにレティーシアが立っていたよ！ なんで足音消してたの？ 心臓が悪いからやめてほしいな！」

「僕がレイチェルさんと一緒に模擬戦を観戦していた時もチラチラとこつちを見ているようだったけど、何か用事でもあったのかな？」

「どうしたの？」

「模擬戦をしましょう。今の試合内容ではきつと消化不良でしょうから、私とその欲求のはけ口になってみせるわ」

「絶対に嫌だけど……」

「何言ってるのこの子。どこか誇らしげな表情で駆け付けてくれた」

のは結構なんだけど、短杖とバックラーに持ち替えてガチの魔導師スタイルやめてくれない？ 僕達召喚師だよ？ 大盾どこやったの？

魔法を使われたら何もできない僕と魔法を使う気満々のレティシアじゃ模擬戦っていう体裁すら保てないだろうから悪いけど他を当たってほしいな！

「そう……貴方が勝ったら昨日言っていた無料の食事券を渡そうと思っていたのだけれど……」

「！……いや、やらないよ。僕はあのゲームで君を越えるって決めたんだ。他の手段で目的を達成したとして、それは僕にとっての勝利じゃない」

「連戦で疲れているでしょうから、貴方は私の体に一度でも触れたら勝ちで構わないわ」

「違う、違うよレティシア。手加減されて拾った勝利に意味なんて無いんだ」

分かってないね……男つてのは一度自分自身で決めた事は譲れないんだ。精密に組み立てられた論理よりも、熱く燃える気持ちを優先したくなる生き物なんだよ……！ 他人からすれば不器用に見えるかも知れないけど、自分の信念には逆らえないし、逆らっちゃいけないんだ!!!

「最初の十ターム(約十秒)、私は一步も動かないわ。魔法も使わない。どうかしら」

「よし、やろうか。丁度体を動かしたいと思っていたところなんだ。短剣に持ち替えてくるね！」

ラッキー！ 魔法使わないんだって！ 申し訳ないけど全力でやらせてもらうよ！

正直この条件でも勝てるかは分からないけど、今のところボードゲームよりは勝機を感じるよね！

『縛ゆ？ 窶ヲ窶ヲ縛咄(縛縛咄s縲ゆ%縲後？…乖譎縲り』

え、何？ ハッピーも応援よろしくね！

テンション上がってきたなあ！ もし勝てたらハッピーにも美味しい果物をいっぱい買ってあげるからね！

副音声ガイド

「あの……私、今から予定がありますので……」

「予定？ そんなの俺達が後から手伝ってあげるって。お礼はたっぷりとするからさ、ちよつとだけ付き合ってくれない？」

「やあ、僕の名前はヘレシー！ 模擬戦でレティーシアの魔法と戦技に手も足も出なかった僕は、レイチエルさんとの反省会で互いの健闘を讃えつつ情報交換を行ったんだ！」

「そうして極秘に入手した情報によると、どうやらレティーシアは昔から魔力操作に秀でていたみたいだね！」

「あとレイチエルさんは水の魔法に適性があつて、得意な武器は硬鞭で、家が貴族区の北側にあつて、趣味は戦闘訓練と手料理で、最近また服の胸回りが窮屈になつて、昨夜は星が綺麗だったらしいよ！ オマケの情報が多いね！」

「今は放課後！ 数人のクラスメイトが新しく付く事になつた護衛の人達と一緒に帰つていくの見送つて、僕は一人で寮に戻つて着替えて、一人で町に繰り出したよ！ 一人で！ 不思議だね！」

「先生が僕に護衛を付けてくれるとか言つてなかつたつけ？ 聞き間違い？」

「もしかしてハイドラの力が大きく評価されて、総合的な自衛力は十分だと判断されたのかな？ そうだったら契約者としては嬉しい限りだね！ やっぱり自分より召喚獣が褒められた時の方が何倍も嬉しく感じるものだから！」

「そんな事を言われても……ううん、困りましたね……」

「別にいいでしょ、ちよつと道案内してもらうだけだからさ。俺達だって王都に出てきたばかりで困つてんだよ？」

「ほら、その荷物は俺達が持つてやるからよ。いいだろ？ な？ す

ぐ終わるって」

『あそこの人達縋なんだか揉めていませんか……？
縋ゆ◎縋雑？羨驕斐？√→縋雑□縋区初縋√※？』

「今日は何を食べようかなあ。昨日は安いスープを飲んだから、今日は普通のスープを飲もうかな！ 楽しみだなあ！」

いつか進学して後輩が入ってきた時には嫌われないように気を付けよう！

「僕は今から大通りに行くところなんだ。一緒に連れて行ってあげようか？」

「しつこいな。もしかしてこの子を助けようとか思ってるの？ 舐めてると痛い目見るよ？ あ？」

「いるよなあ、こういう勘違いした馬鹿。一発殴ってやりやあ目え覚ますだろ。こうやって……よおッ！」

あれ、なんか殴られそうになつてない？ さつきまでクラスメイトの模擬戦を観戦していたから、素早い動きに目が慣れてて拳の軌道が良く見えるね！

『縛？ 縛！』

「い……っ!? ……う、お……な……なんだよこれ……っ!? ひ、ひッ……！」

向かってくる拳を見ながら物思いに耽っていると、ハッピーが目の前に肉腫を出して守ってくれたよ！ ナイスハッピー！ この顕現しないまま世界に干渉するっていうインチキ、まるで僕が魔法を使ってるみたいに見えてカツコ良いんだよね！

子供の頃に魔導師ごっこをして遊んでいたのを思い出すなあ！

絶対ウケると思つて大人達に披露したら滑り過ぎて逆に笑えたよね

！
『縛ゆ縛あ 面あ白あかつたあ ツあ鬚あ通あスあ縛あ丸あ ▲縛あ溘あ縛あ 呐あ? 窶あ窶あ 縛あ薙あ? 豁あ ウあ縛あヲあアあ縛あ? kあ縛あヲあ縛あツあ蟆あ代あ@あ諱あ』

僕達まだ若いんだから大丈夫だつて！ 都会に来たからつて背伸びして落ち着いた雰囲気を出そうとするのは良くないと思うな！ 寮に戻ったら久しぶりにやってみようよ！

「うわああつ！ 血、血が！ く、クソッ、気持ち悪い！」

！
お、ウケてる。やっぱり若いと感性が豊かで反応も良くなるんだね

破裂した柔らかい肉片を浴びて血塗れになった男の人はかなり驚いているみたい！ 必死に手で血を拭おうとしてるけど、水で流した

方が早いよ！

「畜生！ なんだってんだ！ お、お、おいつ、こいつヤベえぞ！」

「まさか呪術師か……!? 呪われるぞ、逃げろ！」

「おい待ってって！ 俺も行く！ 一人で逃げるんじゃないやねえ！」

「あつ……行っちゃった」

二人とも土地勘が無いって言うっていたけど、何も聞かずに走って行って大丈夫なのかな？

暴力はいけない事だと思うけど、女の子の前だからって意地を張らずに知らない事は知らないって言えば良かったのね！ 最初は誰だって無知なんだから、素直に人に教えてもらうのが上手な生き方だと思うよ！

「ありがとうございます。御自ら私のような者を助けていただいた事、深く感謝いたします」

「……うん、うん……うん？」

気付いたら足元で女性が膝を突いてるんだけど何これ？ そんなに感謝されるような事はしてないし、そうだとしても畏まり過ぎじゃない？ 随分と律儀な人だね！

「ずっと、この瞬間を待ち望んでいました。最期だからこそ、貴方様のお姿をこの目に焼き付けられた事を大変嬉しく思います……！ ありがとうございます……！」

「そうなんだ……うん？」

分かった。この女性、ちょっとヤバい人だ！

視線に籠もった熱量が凄いいし、言ってる事は意味が分からないし、変に敬われて反応に困るし、なんだかさつききの二人を相手にするより面倒な事になっちゃった気がするね！

人助けには見返りを求めてはいけないうって言うけどこんな展開になるなんて全くの予想外だよ。人生って難しい選択の連続なんだなあ！

「既に準備は整っています。確認をお願いできませんでしょうか？」

「何の……？」

「貴方様のお姿を見れば他の者も一層奮い立ちます。どうか、どうか

一緒に……」

うん、やつぱり話に通じていないね！ 綺麗な女の人を足元に跪かせているところなんて誰かに見られたら変な勘違いをされそうだからやめてほしいな！

低姿勢なのに押しが強いつてなんだか新しいやり口だよね！ 意外と断るのが難しくって長期戦になりそうな予感がするよ！

「やめなよ」

ん？

「……誰ですか、貴女は」

「その彼は今から私と約束があるんだ。夜の誘いならまた今度にしてくれないかな」

「そう、なのでですか……？」

あ、コン子さんだ！ 耳と尻尾を隠した完全な人間形態のコン子さんが現れたよ！ こんにちは！

前にも似たようなタイミングで現れた気がするけど凄い偶然だね！ どこかで僕の動向を監視しているとか……そんな訳ないか！

コン子さんと会う約束なんて一切していなかったけど、助け船を出してくれてるみたいだから有り難く話に乗らせてもらおうかな！

この後の約束があるって言えば足元の女性も引き下がってくれるよね！

「うん、本当だよ。今から彼女と約束があるんだ。悪いね」

「今から二人でデートをして、最後は夜景が綺麗な宿で夜を共にする予定さ」

「そうそう、だから今日のところは……ん？」

なんか今急に約束事が具体化しなかった？ 気のせい？

これって僕を助けてくれるための口実なんだよね？ 話に乗って良かったんだよね？

「そうですか……あつ、失礼しました……！ そうですよ、今夜は……」

「おや、言質が取れてしまったねえ……？」

足元の女性は納得してくれたみたいだけど、その代わりにコン子さんがニヤついてて怖いよ！ どうやら乗っちやいけない話だったみたいだね！ まさか助けに来てくれた知り合いに後ろから刺されるとは思わなかったなあ。

でもまあコン子さんが来てくれなくても困っていたのは同じだし、どっちに転んでも結果は大きく変わらなかったって事なのかも！

世知辛いね！

「では、私は邪魔にならないよう戻ります。当日はよろしくお願いいたします」

姿勢良く立ち上がった女性は深くお辞儀をしてから去って行ったよ！

一応これで状況は落ち着いたかな？ 裏道を通ろうとしただけで随分と時間を取られちゃったね！

「色々と言いたい事はあるけど……取り敢えずは助かったよ。ありがとうコン子さん」

「気にしなくていいよ。それよりも今の女性は仕えさせている信者かい？ 手を焼くようなら偶たまにはハッキリと言ってあげるのも上に立つ者の務めだと思うけどね。それに、その地面にべったりと張り付いた穢れているにも程がある血痕もどうせキミの仕業だろう？ もう少し上位者としての自覚を持った行動をだね……」

「ごめん、僕ってどういう存在だと思われてる？」

半笑いで注意するのやめてもらえる？ 絶対面白がって言うてるでしょ。

そういう冗談って本当に信じちゃう人がいるから良くないと思うよ！

「まあキミの立場については一旦置いておくとして、早速デートに向かおうか。丁度キミの眼で確認してもらいたい場所があったんだ」

「……予想はしてたけど、デートは本当にするんだね。助けてもらったし別にいいんだけどさ」

「おや、不満かい？ 私との逢い引きなんて普通の人間だったら泣いて喜ぶんだけどねえ。多分」

「……多分？」

「うん。今までこうして男性を誘う経験なんてなかったからね。不確実な事を言い切ったりはしないさ」

「ふーん。へえ」

「なんだい、その生娘を見るような目は。……あつ、違うよ？ 違うからね！」 キミは大きな勘違いをしている！」

そんな風にコン子さんと楽しく会話をしながら中心地から離れるように歩いていると、やがて大きめの建物の前で彼女が立ち止まったよ！ 目的地はここかな？ 掲げられたシンボルからして教会っぽいね！

「——」応言っておくけど、最近まではこうして自由に動き回れなかったからそういった感情も機会も持っていなかっただけなんだ。つまりキミの想像は単なる誤解であって、決して私が経験皆無の生娘のくせに耳年増という訳では……聞いているのかい！」

「うん聞いている聞いている。それより目的の場所ってここですよ？ 何を見ればいいの？」

「ん？ おっと、そうだね……コホン」

立ち止まってなお熱量高めに語り続けるコン子さんに説明を促すと、彼女は小さな咳払いの後に姿勢を正して神聖な雰囲気纏わせたよ！

まるで威圧するみたいに霊格ってやつを振り撒いてるけど、もしかして教会と張り合おうとか思ってる？ 迷惑だからやめようね！

「ここはエルピスという神を信仰する人々の教会だ。召喚を司っている神らしいから、流石のキミでも名前くらいは知っているんじゃないかな？」

「それはまあ。メイユールの特別な神様だから」

エルピス様っていうのは召喚の神様だよ！ 戦場で天下無双の活躍を見せた召喚獣の姿を見て、兵隊さん達が召喚術そのものを神格化した存在なんだって自称門番のお婆さんが言ってたよ！ 学園の先生はもつと昔からいたって言っていたけど、どっちが本当なんだろうね！

この国の大半の人はエルピス様を信仰しているよ！ 僕は故郷で祀られてる神様を応援してるからエルピス教の教徒ではないんだけど、どうやら召喚が上手くいくように見守ってくれてる神様らしいから挨拶くらいはしたいと思っただよな！

「ここは少し規模の小さな教会だけど、エルピス教では教会それぞれに神が宿っていると信じられている。信じられているという事は、つまり本当にいるんだ」

「へー」

「だったら丁度いいね！ ちゃんと挨拶しておかないと！」

僕の名前はヘレシー！ 小さい頃に呼び出した守護獣のおかげで召喚師としての素質を認められた僕は、少し前からあの有名なヴァリエール召喚師学園に入学して召喚師になるべく頑張っています！

「色々やっていく前にキミの見立てを聞いておきたくてね。この神……どう見る？」

「どう見る……？」

「コン子さんがなんだか不穏な事を言ってるんだけど、そもそも神様の見立てって何？ それって人間がしているような事？」

教会の方を眺めると、確かになんだか近寄りがたい神聖な雰囲気を感じるね！ コン子さんに感じるのとはまた違う眩しさがあるよ！

「何ていうか……ちよつと薄い、かも？ 自分とは全然違うなっていう感覚はあるけど、危機感はいささかかな」

「ふうん？ そうかそうか。どうやら私の予想は当たっていたみたいだ」

「不安になる笑顔だなあ」

「コン子さんが何やら目を細めて悪い笑みを浮かべているね！ 僕の私見を聞いて何を思ったのかは知らないけど、今のうちに釘を刺しておかないといつか大変な事をやり始めそうで怖いよ！」

「楽しそうなのは結構だけどさ、失礼な事はしないでね。大事な神様なんだから……」

「成り立ちに隙があるんだよね。ある程度の年月はかかるかも知れないけど、少しずつ信仰の形を複雑化してから根底をすり替えれば別の

神に信仰対象を移せそうだ。うんうん、ありがとう」

「今一番聞きたくない感謝の言葉」

人を共犯者みたいに言うのやめてもらっていい？

コン子さんが余計な事をしでかす前に、レティーシアに密告しておいた方が良さそうだね！



「そこでエルピス様は言いました。『あなた達に、悪に抗う術を与えましょう』」

コン子さんの用事が終わって、折角だしそのまま観光気分で教会の中にお邪魔したんだけど、ちょうど子供向けの朗読会をするところだったから勉強も兼ねて参加させてもらう事にしたよ！

「声を聞いた王様は早速教えられた場所に向かいました。すると、そこにはとても大きな魔法陣があったのです」

「(成る程ね。童話に扮した歴史のお勉強って訳だ)」

子供達の邪魔にならないように最後列の長椅子に座ったんだけど、話が始まると同時に何故かコン子さんの膝の上に乗せられたんだよね！ ……なんで？

確かに保護者の人と一緒に来てる小さな子供が大人の膝に座ったりしてるけどさ、僕はもう成人してるんだけど？

「あのさ、耳元で囁かれるとくすぐったいし、恥ずかしいから降ろして欲しいんだけど……」

「(しーっ……大きな声を出しては子供達の迷惑になってしまうよ。行儀良く座ったまま、静かに話を聞かないとね……?)」

「……」

「(ほら、私を背もたれにして深く座るんだ。……こうして後から抱き締めて、しっかりと支えてあげるから……)」

「……」

「(んー？ そんな弱々しい力で逃げようとしても無駄だよ……？ぎゅっと密着して、みっちり埋めて、もっと辱めてあげようねえ

……)」

「……」

もうやりたい放題じゃん。

教会への移動中にイジられた仕返しのももりなんだろうけど、周りの子供達を盾にして動きを封じるとかやり方が姑息過ぎるんじゃないかなあ。

相手をイジる時には自分もイジられる覚悟が必要って事なのかな？ 覚えておこう！

『鬪^勝ア蝮^か力^にツ^しー邵^て コ窠^もコ？ オ邵^まコ蜂窠^{しよ} サ郢^かア纏^{……？}？ス臥^こク？ ??^状奸^況』

エ邵^あコ蜂^まア？クス^気？ツ^進ー遯^み力^ま？ヲ遯^{せん}力^ん？遯^け力^ど？遯^{……}』

そうなんだよねえ。近くに子供達がいるし、そもそも教会で暴力沙汰は良くない気がするよ！

本人は楽しんでるみたいだし、ここは好きにさせてあげるのが大人の対応ってやつかな！

「その大きな魔法陣にはとても強い魔力が流れていました。その魔法陣を使って王様が召喚をすると……なんということでしょう、お城よりも大きな召喚獣が現れたのです」

「これは事実らしい。メイユールの初代国王となったニフィラスは、大魔法陣の力を使って高位の存在を呼び出し、近隣国を圧倒したんだ」

「現れた召喚獣はエルピス様に仕えていた聖獣でした。神様は私達を守るために、魔法陣を通じて力をお貸し下さったのです。王様は呼び出した聖獣で敵を倒し、平和を取り戻しました」

「（ここは違う。そもそもエルピスとかいう神が信じられるようになったのはこの国が興ってからだ。子供用に話を分かりやすくしているんだろうけど、因果関係が逆転している）」

あ、補足説明してくれるの意外と助かるかも。

コン子さんがエルピス様についてやけに詳しいのが怖いんだけど、今はありがたく解説を聞かせてもらおうかな！

「聖獣を召喚した大魔法陣と、その近くにあった三つの特別な魔法陣は今でもヴァリエール召喚師学園で大切に保管されています。再び

私達に困難が訪れた時、そこから召喚される聖獣が私達を守ってくれるのです。有事の際にエルピス様の力をお借りするためにも、毎日の祈りを欠かしてはいけませんよ」

「これについては……大体は合ってると思う。まだ直接は調査できていないんだけど、学園の外周に建てられている大小合わせて四つの塔の中に、お伽話に出てくる魔法陣が保管されているっていう話だよ。それを最大限利用するために信仰が必要だという部分も……まあ後付けされた制約だとすれば納得できる)」

へー、お伽話に出てくるような物が今も保管されているなんて面白いなあ！ 話を聞いているだけでもワクワクしてくるね！

そんな凄い魔法陣を自分が使ったらどんな召喚獣を呼び出せるのか興味はあるけど、信仰心が必要だって言われると僕には無理な気がするよ！ 別にエルピス様の存在を否定してるとかそういう訳じゃないんだけど、間違いなく教徒ではないし……。

でもお城より大きな召喚獣なんて呼び出せたら革命的だよね！

村中の畑を一日で耕せそう！

「……以上がはじまりのお話です。続きは次の朗読会でお話します。お菓子を用意しておきますから、次回も来てくださいね」

「はいー！」

「わかりました！」

「(おや、随分とあっさり終わってしまったね。まあ、子供の集中力を考えるとこれくらいの長さが丁度良いのかな？ あまり帰るのが遅くなってもいけないだろうし)」

「もう耳元で囁かなくてもいいと思うよ。あとそろそろ降ろしてくれない？」

「……仕方ないな」

どうやらお話は終わりみたい！ 故郷での儀式とはまた違った雰囲気が新鮮で面白かったね！

コン子さんも不満そうにしながらも解放してくれたし、子供達が帰るのを待ってから僕達もお暇いしましようかな！

「いやー、咄嗟にキミを抱えたのは我ながら名案だった。お仕置きを

しながら庇護欲も満たせるなんて、これが母性本能というものかな」
「悪戯心でしょ」

弱者を力で押さえ付けて辱めるなんていう蛮行が母性である筈がないんだよね！

コン子さんはハッピーみたいにこことは全然違う場所から召喚されてるっぽいし、こつち側の常識を一度誰かに教えてもらった方がいいと思うよ！ ハッピーも召喚したばかりの頃は色々あったからね！

「あの……」

子供達が帰っていくのを見送りながら二人で他愛ない話をしていると、こつちに近付いてきた教会の人がコン子さんの隣で立ち止まったよ！

初参加の僕達に感想でも聞きに来たのかな？

「ん……？ 何か用かい？」

「はい。お話したい事があります……少しお時間を頂いても？」

「ああ……成る程ね。ふふ。この威厳と霊格、聖職者には隠しきれないって訳だ」

教会の人から話し掛けられてコン子さんが得意気な顔をしているね！

胸を聳^{そび}やかすように腕を組んで鼻高々なのは結構だけど、そんな反応じゃ威厳よりも子供っぽさの方が前に出ちゃうんじゃないかな？
口に出したらまた仕返しされそうだから言わないけど！

「でもさ、いくら眩しい相手がすぐ側に来ていたとしても、自分が信仰する神の前で相談しようとするのはマナー違反というものだよ。ここには神エルピスがいる。祈祷でも、相談でも、信徒なら彼女を頼るべきではないかな」

「何を言っているのか分かりませんが、全く違います。私は懺悔を促しに来たのです」

「……っ？」

「なんですか、今の読み聞かせ中の不真面目な態度は。ここは神聖な教会であり、あのような不埒な行為をする場所では決してありません

ん。確かに人間は欲深い生き物です。ですが、その欲望を制御する努力を怠ってはなりません」

「あれ、もしかして私説教されてる……?」

「ありがたい話だね。ちゃんと聞いた方がいいと思うよ」

不思議そうに目を瞬かせてるのは可愛いんだけど、コン子さんが朗読中に余計な事をして遊んでいたのは紛れもない事実だし教会の人が怒るのは当然じゃないかな！

相手は善意で注意してくれてるんだから無下にするのは良くないよ！ いつてらっしゃい！ しつかり反省してきてね！

「では、二人共こちらに来て下さい。神の前に自らの魂を晒し、それぞれが犯した罪を告白するのです」

「じゃあ僕は外で待つてるから……え、二人……?」

「はい。当然です」

ええ……? 僕は完全に被害者側なんだけど? 告白する罪なんて無いんだけど? 清く潔白かつ純情な新入学生なんだけど?

「くくく……言われたからには仕方が無いね、一緒に行こうじゃないか。なに、心配する事なんてないさ。私が手を握っていてあげよう。キミは逃げたりなんかしないだろうけど、念のためにね」

「ごめん、一旦話を聞いてもらってもいい?」

「安心して下さい。己の罪に真摯に向き合えばエルピス様はきっとお許し下さいます。貴方達のような活力に溢れた若者は、真っ直ぐ正直に生きてさえいればいつか必ず道が開け、幸せになれるのです。私も見守っていますから、頑張りましょうね」

白昼の衝光

「昨日は召喚師本人の戦闘能力をある程度見させてもらったが、当然ながら本来の我々の役割は召喚獣を呼び出す事にある。特別な事情がなければあのような授業は行わないので、魔法や戦技等の研鑽は必要に応じて各自で行うようにしてくれ。今日は召喚獣同士の模擬戦を行い、戦闘経験の蓄積による能力向上について実戦を交えて説明していく……予定だったが、今の状況で召喚獣を無闇に消耗させる訳にもいかん。不本意ながら、本日も授業の予定を変更する」

「やあ、僕の名前はヘレシー！」

あの後レティーシアに召喚されて消えていったコン子さんと別れた僕は、当初の予定通り夕飯を食べてから寮に戻ってハッピーと魔導師ごっこをして遊んだんだ！

今日は学園の中心付近にある召喚場に集まっているよ！

「どうやらまた授業内容が変更になったみたいだけど、入学してから今までの間で半分くらいしか予定通りに授業できてくない？ そのうちお貴族サマの親御さんから学園に苦情が入りそうだし、早く事件が解決するといいね！」

「授業で過度に消耗させるな、という学園長からの指示には私も教員として従わなければならん。しかし、授業内容として召喚術は取り扱いたい。このような時にどうすれば良いか。答えは——これだ」

「あ、あの書類は……！」

「まさか、もう一度魔導院の報告書が見られるというの……!?!」

「いや、あの書類の表紙には魔導院の印が無い。あれは一体……?」

学園長から釘を刺されたらしい先生がしたり顔で取り出したのは紙の束！ 周りのクラスメイト達はその内容を予想して盛り上がった。先生は勿体ぶって中々話を始めないし、みんな楽しそうだね！

「そうだ。この文書には魔導院の正式文書である事を証明する印が捺されていない。しかし、これは間違いなく魔導院の研究所から持ち出……情報提供を受けたものだ。印が無い理由はこれが正式な報告書

の体を成していないからで、あくまで文書として纏められる前段階――ただ実験結果を書き記しただけの走り書きに過ぎない。が、それ故に情報は最先端のものだ。内容も今までの常識を覆す興味深いものであり、もし書かれていた技術を習得する事ができれば確実に召喚師として躍進できるだろう」

「なんだと……？」

「す、すごい……いや、凄過ぎる……」

「抗えない……この情報鮮度に……」

ん？ 今研究所から持ち出したって言おうとしなかった？

先生の言う事があまりにも凄かったからか、それとも情報の入手経路が怪しいからか、いつもはノリの良いクラスメイト達も困惑しちゃってるね！

最近たまに思うんだけど、もしかして僕達の先生って結構危ない人だったりする？ 授業っていう名目があれば何でも許されると思っ
てそう。

「前にも似た趣旨の文書を紹介したが、今回の内容は全くの別物だ。これは既存の魔法陣に手を加え、根本的な魔力消費を抑えようという研究の記録なのだ。召喚の際には魔法陣を展開するのが一般的だが、その術式をもっと効率の良いものに組み換えられないかという研究は古くから行われてきた。しかし結果は契約している召喚獣との繋がりが保てなくなったり、そもそも魔法陣として起動できなくなるものが殆どだった」

形式化されて上手く纏まってると思っていた今の魔法陣だけど、まだまだ改良しようっていう動きがあったんだね！

現状に満足せず更なる高みを目指すのはとても良い事だと思うよ！ こうした努力を積み重ねて技術は進歩してきたんだろうね！

「だが、今回は違う！ 契約済みの召喚獣を呼び出す術式は未契約の召喚獣を呼び出すものと比べて魔力消費が抑えられる事は常識だが、この技術を使えばそこから更に宣言と定義を組み換えて魔力効率を向上させられるのだ……！」

「今より更に消耗しなくなるなんて……」

「魔法陣はもう完成形だと聞いていたのに……」

「なんて革新的なんだ……!」

おー、それは本当に凄いね!

召喚師の魔力はボードゲームでもよく枯渇する重要なリソースだし、節約した分の魔力で召喚獣を追加で召喚したり、魔法を使って仲間を援護すればもっと活躍できるよね!

直近の戦^{いくさ}でも猛威を振るっていたらしい召喚師がこれ以上強くなつちやったら、いよいよメイユールが大陸統一しちゃうかも!

「そう、これは革新的な技術だ。……扱^{あつか}う事さえできればな」

あつ、なんか一筋縄ではいかなさそう!

「新しく発見された術式で魔法陣を書き換える……これはそんな単純な話ではない。精密な魔力操作技術を要する非常に難度の高い方法なのだ。実験記録を見ても、初級魔法の起動に成功した記録は多数あるものの、召喚術を成功させたという記録は魔導院技術者の実力を以てしてもただの一度に収まっている。だが悲観する事はない。成功例がある以上、理論上は我々にも実行可能なのだ。一朝一夕で身に付く技術ではないだろうが、自分の手札の一つ、或^{ある}いは伸び代の一つとして覚えておいて欲しい」

よく分からないけど、どうやら得られる恩恵が大きいだけあって難しい方法みたいだね! 大陸最高峰の技術を持つているらしいこの学園で教鞭を執っている先生が難しいって言うなんて相当だよ!

周りのみんなも盛り上がっていた空気を一変させて、真剣な表情で先生の話聞いてるね!

「考え方は簡単だ。魔法陣を安定させるために必須と言われてきた記述を敢えて省き、その状態で術式を成り立たせ、起動する。諸君らが魔法陣の基本や大前提として習ったであろう部分……最も美しいと言われているあの定義と宣言文を、ここに書かれている法則に従って分解し、仮組みのような形に再構築するんだ。順を追って説明するぞ。まずは――」

「な……っ!? そこに手を加えるというのですか……!?!」

「神が用意したとも言われる完璧なその記述を……分解する、だと

……？」

「俺が今まで積み上げてきたものはなんだったんだ……」

先生が壁際から引つ張つてきた白板によく分からない紋様を書きながら説明を始めたよ！

でも……うーん、普段から魔法陣に慣れ親しんでいる人なら理解も早いんだろうけど、教科書を読んだ程度の知識しかない僕にはちよつと難しいなあ。

クラスのみんなは……あつ、驚いたり頷いたりしながら先生の話を聞いているね！もしかして内容とか理解できてる感じ？取り残されてるの僕だけ？

「——手順は以上だ。更に安定性を排除して切り詰めた方法も考案されているようだが、これ以上は得られる恩恵が少ない上に危険過ぎる。記録によると実験の中で少なからず事故も起きているようだ。今説明した方法は難度が高く安定性の欠片も無いが、辛うじて安全性だけは確保できている。授業で扱える範囲としてはここまでが限界だろう」

やり方の説明は終わりみたいだね！結局僕には何も分からなかったけど、魔法陣は間違つた組み方をするとか危ないって事だけは分かつたよ！

もし小さい頃の僕がこの分野の知識と才能を持っていたら絶対に色々と試して事故を起こしていただろうね！召喚以外何もできなくて逆に良かったのかも！

「では、準備の出来た者から試してみろ。最低限ここに書いた部分を守れば失敗しても事故にはならないし、魔法陣が起動しなければ魔力もさほど消費しない。様子を見ながら試していけば放課後に十分な量の魔力が残せるだろう。体調が優れない者や、現時点で魔力量が万全でない者は見学しているだけで構わない。全員、学園長から言われているので無理はしないように」

「分かりました！」

「よし……この新しい技術、絶対に習得してやるぞ……！」

「これをモノにできれば、俺が派閥の代表に……！」

学園長に釘を刺されて残念そうな先生の言葉を受けて、みんなが召喚場のあちこちに散らばっていくよ！

宙に手を掲げてみたり、何やら呪文を唱えてみたり、祈ってみたり、展開した魔法陣を触ってみたりで楽しそう！ 見ていたら僕も輪に入りたくなってきたね！ 試しに形だけでも真似してみようかな！

白板に書かれた紋様や式をノートに写してっと。……よし、行こうか！

「こ、これを極めればレティーシアさんに勝てますわ……！」

周りを見渡しながら歩いてると、興奮しながら魔法陣を描いてるレイチエルさんを見つけたよ！

コツや心構えを聞いてみようかと思っただけど、なんか目がギラついてて怖いし、邪魔になっても悪いから今は離れておこうかな！ 陰ながら応援しているよ！

「うう……試したい、けど魔力は余裕をもって残しておけて護衛の人に言われたし……でも、少しくらいなら……」

もつと白板から離れていくと、俯きながら葛藤してる庶民の子を発見！

どうやら教わった内容を試したいけど踏ん切りがつかなくてウズウズしてるみたいだね！ 同じ庶民の僕が隣で派手に失敗するのを見せれば背中を押してあげられるかな？

「うわ……またこっち来てる……」

と、思っただけで近付いたら逃げられちゃったよ！ なんて？

もしかして僕がレティーシアとよく話しているのを見て、僕の事を貴族だと勘違いしてたりするのかな？

僕も最初はお貴族サマに絡まれたらすぐ面倒事になるんじゃないかって警戒していたから気持ちは分かるけど、ここの貴族の人って案外いい人達ばかりだから意外と雑に扱っても大丈夫だよ！ そもそも僕は貴族じゃないから二重で安心！

丁度周りから人がいなくなった事だし、もうここで魔法陣を試してみようかな！

体術なんかもそうだけど、新しい事を教えてもらった直後って不思議

議と自分にも出来るような気がしてくるよね！ ノートを見ながら一つ一つ手順を踏めば意外と上手く行ったりするかも！

「よーし」

確か最初は……どんな召喚獣を呼び出すのかを宣言するんだっただよね！ 今から召喚するのはハイドラだから……えつと……？

「……」

あつ、違う違う！ その前に、そもそもこれが召喚術用の魔法陣だって事を定義する必要があるんだよね！ 慣れない方法だからうっかりしていたよ！

「……」

……いや、違うな。あれだっけ、まず輪っかを出すんだっけ？

輪っか。人間も魔法陣も、形から入る事が大切だよね。

「……」

……。

「……」

……まあ予想はついてたよ。予想はついてた。何も練習してないのに話を聞いただけで急に出来るようになる訳がないよね。でもさ、たまには閃きや直感を信じたくなる事もあるじゃない？

そもそも魔力で文字や紋様を描くって何なんだろうね。本当に同じ世界の話？ ハッピーの居た世界の話の方がまだ理解できるよ。

魔力操作については召喚術の教科書にも抽象的なコツしか書いていなかったし、そういう初心者お断りみたいな導線の少なさが召喚師や魔術師の希少性に拍車を掛けてるんじゃないかなあ。

学園の教科書を受け取れるような人は既に一定の基礎を身に付けてるっていう想定なんだろうけど、それにしても入学試験がザル過ぎるよね……。

「あ、そうだ」

ここで僕は閃いたよ！ 魔法陣の起動経験すら無い人間がいきなり高度な手法に挑戦したって成功する訳がないんだから、完成形をイメージし易いように下書きをすれば良いんじゃないかって！

あらかし

予めノートか何かに魔法陣を描いておいて、それに沿って魔力を流

すだけっていう単純な構図なら成功率も上がるんじゃないかな？

「これでよう」

早速ノートの新しいページにハイドラを呼び出すための魔法陣を描いてみたよ！ 召喚場の中心にある魔法陣を参考にして、教えられた通りに最初の部分をいい感じにバラして不安定にしたよ！ これで魔力消費が減るんだよね！

後はこれに触るなり、上から手を添えて気合いを入れるなり、なんとかして魔力を流したら起動できるはず！ ところで魔力を流すって何だろうね？

出る！ 魔力出る！ 気合いで出ろッ！ フッ！ はっ！

……あれ？ なんか揺れてる？ 気のせい？

「うわっ……!?!? なんだこの揺れは!?!?」

「ひっ……!?!? 地響きが……!?!?」

「一体何がどうなって……!?!?」

どうやら気のせいじゃなさそうだね！ もしかして何か失敗しちゃったかな。でも魔法陣は起動してないし……うーん、ちよつと原因が分からないね。普通に地震かな？

肩をすくめて何もしてない事をアピールしつつ白板のある場所に戻ると、先生がなにやら魔法を使いながら遠くに目を凝らしていたよ！ 随分と落ち着いた様子に見えるけど、もう揺れの原因に見当が付いてるのかな？ 流石だね！

「……そういう事か。全員、何も心配はいらない。一旦授業を中断して外に出てみる。面白いものが見られるぞ」

先生に言われるまま外に出て見晴らしの良い場所まで移動すると、なんと遠くにある北側の校庭に赤錆色の巨大なゴーレムが立っているのが見えたよ！ 金属製の巨人って感じでカッコイイね！

もしあれが敵の魔導ゴーレムだったら大変な事なんだけど、先生の反応的にあれは学園関係者の召喚獣なのかな？ 本校舎と同じくらい大きいから遠近感がおかしくなりそうだよ！ 昨日教会で聞いた昔話の聖獣もあんな大きさだったのかな？

「あれはサヴァンの……サヴァン先生の召喚獣だ。ここ数年は前線演

習の時にしか召喚していなかったから、この中で実際に見た事のある者は少ないだろう」

「すごい……あんなに大きな召喚獣を呼び出せるなんて、流石は学園の先生だ……！」

「初めて見た……なんというか、言葉が出てこないな……」

「俺もいつかは、あんな召喚獣と契約を……」

へー、あれはサヴァンっていう先生の召喚獣みたいだね！

魔法陣の最新技術といい、あの赤錆色の巨人といい、まるで新入学生への僕達にこれから目指すべき召喚師像を示してくれているみたいに感じるよ！

生徒の意欲を上げる演出まで凝っているなんて流石はヴァリエール召喚師学園だね！

「だが、周囲に与える影響の大きい召喚獣を呼び出す際には事前に通達が必要だったはず。サヴァン先生はあのゴーレムを呼び出して一体何の授業をするつもりなのだ……？」

先生が顎に手を当てて疑問を口にしてているよ！ 大きな召喚獣を呼び出すのって事前に許可が必要だったりするんだね！

まあ確かに召喚する度に地震なんて起こしてたら近くに住んでる人が困るだろうし、召喚獣が大きいと気を付けないといけない事も多いのかな？ 聖獣を呼び出したっていう王様も案外苦労してたのかもね。

「おお、動き出したぞ！」

「歩くだけでも凄い迫力だ……！」

初代国王様を心配しているうちに校庭のゴーレムが歩き始めたね！ 一歩進む度に砂煙が舞い上がっていて振動もすごいよ！

どうやらゴーレムは学園の北端に建っている一番背の高い塔に向かっていているみたい！ あれって確かお伽話の魔法陣を守ってる建造物なんだっけ？

赤錆色の巨人も大きいけど、塔はそれより更に大きいんだからとんでもないよ！ メイユールの起源みたいな魔法陣を守る建物だし、昔の人達も気合いを入れて作ったんだろうね！

あれ、巨人が徐々に歩幅を広げて、速度を上げて……まるで殴り掛かるみたいに腕を振りかぶって……なんだか嫌な予感がするなあ。

「なっ……!!? サヴァンツ! 何をするつもりだっ!?!」

あ、殴った! 歴史的にも国防的にも重要そうな塔を巨大なゴーレムが殴ったよ!

塔を守る透明な障壁と巨人の拳がぶつかり合って、この距離でも轟音と衝撃波が伝わってくるね! ゴーレムが何度も塔を殴りつける度に、地平線まで真っ白な光が明滅しててとっても幻想的!

なんだかすごい瞬間に立ち会っちゃったよ! これ、もしかしたら歴史の教科書に載ったりするかもね! アハハ!

歴史見学会

「私はあの馬鹿を止めに行く！ お前達は全員本校舎に避難するんだ。事故に備えて、交代で召喚獣を呼び出しながら移動してくれ！」

やあ、僕の名前はヘレシー！

赤錆色の巨大なゴーレムが腰の入った連打を塔に打ち込んでいる間に学園内のあちこちで爆発まで起こって状況はもう滅茶苦茶！

非現実的な光景を唾然として眺めていた僕達だったけど、いち早く我に返った先生に言われて安全な場所に避難する事になったんだ！

避難先として指示されたのは学園の南側にある本校舎！ 授業をしていなかった他の先生や学園長もいるだろうし、王都の中では王城の次くらいに安全な場所なんじゃないかな！

「私も行くわ。イーガス、先導しなさい」

「レティーシア様……？ 危険です。それに、レティーシア様には生徒達の避難誘導をお任せしたかったです……」

「これだけ実力者が揃っていれば不要でしょう。敵が護陣塔を破壊するつもりなら、他にも裏切り者がいる筈よ。最悪の事態を想定して戦力を揃えるべきだわ」

「裏切り者……そう、ですよね。分かりました。行きましょう」

どうやらレティーシアは先生に付いて行くみたい！ サヴァンっていう人を含めた相手の動きについて話し合っているよ！ どんな理由かは知らないけど、召喚獣のゴーレムが塔を攻撃してる以上その契約者であるサヴァン先生が敵だと判断されるのは仕方がない事だよね！

もしかして敵国の間諜だったりするのかな？ でも召喚師として才能があつたり学園で教鞭を執っていたり、潜伏するにしてもこの国に馴染み過ぎだよな。

なんだか僕達の先生も交友があつたような反応をしているし、普段は悪い人じゃなかったのかも？ やってる事は極刑ものだけどね！

「ヘレシー、いいかしら」

隊列を組んだクラスメイトのうち三人が召喚獣を呼び出して、みんな

なで本校舎に向かって歩き始めたところで僕だけレティーシアに呼び止められたよ！

僕達とは別行動をするみたいだけど、先生を待たせて何の用事だろう？

「避難している途中、もし誤って別方向に移動している人を見つけたら声を掛けてあげてほしいの。本当は貴方に頼んで良いような事ではないのだけれど……単独行動になる可能性が高い以上、他の生徒では不安があつて……」

「うん？ それくらいなら全然構わないよ。レティーシアの方は大丈夫なの？」

「ええ。コン子もいるし、戦闘になる前に他の教員とも合流できるようにしようから心配はいらないわ。貴方こそ十分気を付けて頂戴」

「うん。まあ、何も無いと思うけどね」

どうやら迷子になりそうな人に声を掛けて道案内をしてほしいみたいだね！ わざわざ僕を名指ししなくても、そのくらい誰でもやってくれそうな気がするけど……やっぱり貴族が貴族に頼み事をするのって色々と面倒があつたりするのかな？

あんなに大きなゴーレムを見失って逃げそびれるような人なんてこの学園にはいない気がするけど、レティーシアが言うからには少なからず可能性はあるんだろうね！ 迷つてる人を見逃さないように注意して歩こう！

そんな風に話をしていると、何かが割れるような大きい音が響くのと同時に一際強い衝撃波が駆け抜けてきたよ！ 北の塔に視線を向けると、半透明の障壁が光を乱反射させながら碎け散っているのが見えるね！ あれって結構マズいんじゃない？

「っ！ 行つてくるわ！」

「いつてらっしやい。頑張つてね」

「頑張るわ！」

レティーシアと先生が北に向かって走り去るのを見送ってから、少し距離が開いちゃったクラスの隊列に合流したよ！ 呼び出した召喚獣を先頭と左右に配置した形だね！

遅れたせいで僕が自動的にしんがり殿を務める事になっちゃったんだけど、
クラスのみんなは周囲の警戒で忙しいのか僕を一瞥しただけで何も
言わなかったよ！

……いや、最後尾なんて絶対に魔法が使える人が適任でしょ。もし
かして空気か何かだと思われてる？



無駄に広い学園の中を進んでいくと、召喚場や闘技場がある中央の
区画を抜けて噴水や謎のオブジェや別館が見えてきたよ！ 目的地
の本校舎までもう少しだね！

途中で索敵用の召喚獣も追加して奇襲の対策も万全だし、これはも
う勝ったも同然！ 本校舎に着いたら安全な場所から先生達の戦い
を応援しよう！

「あつ」

なんて思っていたら……見つけちゃったよ、迷子。本当にいるんだ
ね。もしかしてレティーシアって未来が見えてたりする？ 今年の
畑の収穫量とか教えてくれない？

こなれた制服を着た高学年っぽい男の子が不安そうに左右を見渡
しながら西側にある建物の影に入っていたんだけど、あれ絶対道に
迷ってるよね。学園の西側なんかに行っても倉庫みたいな建物と自
然公園的な瞑想ポイントがあるばかりで、守ってくれる先生は多分
いないよ！

「どうした庶民、何かいたのか！」

最後尾の僕が変な声を出したからか、近くにいたカイゼル君が慌て
てやって来たよ！ 驚かせちゃってごめんね！

「いや、生徒だよ。もうあっちの校舎に隠れちゃったけど。僕、迷って
る人がいたら声を掛けろって言われてるんだよね」

「そういう事か……ならば行くがいい。ただしこの状況、相手が生徒
だからといって味方とは限らない。死に急ぐなよ」

「うん、すぐに戻ってくるよ」

カイゼル君も警告してくれている事だし、気を引き締めてあの男の子を追いかけよう！ 彼が迷子でもそうでなくても、色んな所で起こってる爆発に巻き込まれたら大変だもんね！

さっき見た建物まで近付いて角を曲がると、足早に歩いている男の子の背中を見つけたよ！

「おーい、そっちじゃないよー！」
「っ!？」

あれ、男の子がそのまま真っ直ぐ走り出したね。もしかして敵か何かだと思われてる？

僕なんてどう見ても制服ピカピカの新入生なのに……きつと混乱しているんだね！

「僕は怪しい人間じゃないよ！ 本校舎の方が安全だから一緒に避難しよう！」

「クソツ、【ウインドブラスト】 ツー！」
「お？ おおー」

男の子のすぐ後ろで空気が圧縮されたと思ったら、次の瞬間にはそれが爆発して物凄い突風が襲ってきたよ！ 建物の窓は残らず割れてるし、体は前に進まないし、男の子は風に乗ってとんでもない速度で走り去っていくし、どう見ても僕一人で解決できる状況じゃないね！

「ハイドラ、ちよつといい？」
「はい、お待ちしていました！」

僕の声に驚きの早さで反応してくれたのは召喚獣のハイドラ！

浮かび上がった黒い水溜まりから太くて柔らかい足を伸ばして地面を掴んだ彼女は、そこから残りの体をズルリと引き上げて全身を顕あらわにしたよ！ 僕を包むような姿勢で出てきてくれたおかげで突風や窓の破片から身を守るのがとても助かるね！

正面に少しだけ作ってくれている足の間隙から外の様子を見てみると、男の子が見失いそうなくらい遠くに進んでいるのが確認できたよ！

「急に呼んじやって悪いね。向こうにいる男の子……今見えなくなっ

ちやっただけど、あの生徒を追いかけたんだ。運んでもらってもいい？」

「分かりました！……え？へレシーさんを運ぶ……？」

「うん、運び方は何でもいいよ。足で持ち上げてくれてもいいし、本体に乗れって言うならそうするし」

「足で持つ……？乗っていただけ……？……私、いくら払えばいいですか？」

「もしかして君も混乱してる？」

急に召喚したのが良くなかったのかな？それでもすぐに正気を取り戻して僕を背中に乗せてくれたハイドラは、複数の足を器用に動かして滑らかに前進し始めたよ！これだけの質量があれば風に吹かれても安定するし、やっぱり歩幅(?)が大きいと移動が速くていいね！

ハイドラの足に巻き込まれた地面や石畳が割れたり抉れたりしてるのが気になるけど……まあ誰がやったかなんてバレないだろうし、今は緊急事態だから怒られたりしないよね！多分！



それから暫く追跡劇は続いて、こつちが距離を詰めて、向こうが魔法を使つての繰り返しになっていったんだけど、結局は学園の西端にある塔に逃げ込まれちゃって男の子を捕まえる事はできなかつたよ！

「すみません……さっきの魔法、人間への殺傷力が高いものだったのでへレシーさんを狙つてくると思って……」

「いやいや、一旦見失いはしたけどさ、最終的に彼が入っていった場所を特定できたんだから十分だよ。ありがとう」

最後に男の子が使ってきた魔法が敵を空中に巻き上げる強力なものだったらしくて、咄嗟に動きを止めたハイドラが防御魔法で僕を守ってくれたんだけど、その隙に男の子は自分を空高く吹き飛ばして建物を飛び越えていっちゃったんだよね！混乱しているとはいえ自分を攻撃魔法の対象にするなんて驚きだよ！

そうして一時的に男の子を見失っちゃったものの、ハイドラも建物の壁は登れるし小さな倉庫程度ならそのまま乗り越えられるからなんとか追い付いて撒かれずに済んだよ！

それにしても相手の使う魔法の種類が分かったり、防御魔法が使えたり、ハイドラつてどこで覚えたのかは知らないけど魔法に詳しいよね！ 僕とハッピーには全く適正が無い分野だから、そこを補ってくれるのは本当に助かるよ！

早速塔を調べて男の子を連れ戻そう！ なんだか不思議な雰囲気のある建物だなあ。

「入口は正面の一方所だけみたいだね。これ以上追いかけてこをする必要は無さそうかな」

「はい。でもこんな場所に逃げ込むなんて、一体何の施設なんでしょうか？」

「多分だけど、大切な魔法陣を守ってる塔……だと思う」

この塔、北でゴーレムが攻撃してる塔と同じくかなり巨大な建造物で、外観の特徴も近いんだよね。同じ時代に同じ工法で作られたっぽい雰囲気があるよ！

『聖獣を召喚した大魔法陣の他にも特別な魔法陣が三つある』っていう話を教会で聞いたし、普通に考えたらこの塔がそのうちの一つなんだろうね！ 入口も嚴重に鍵で施錠されていた痕跡があるし！ 全部壊されてるけど！

「北側の塔にも魔法障壁があったから、この中に隠れば安全だと思っただけ避難しに来たのかな」

「この塔の障壁……綺麗に入口の部分だけ切り抜かれていますね。あそこに描かれている魔法陣で突破したんだと思います」

「ほんとだ。大きな魔法陣だなあ」

入口から少し離れた地面に大規模な魔法を行使した跡があるね！ 魔法陣の大きさに十人以上は術者がいないと起動できないんじゃないかな？

さっきの男の子には鍵を開けたり障壁を突破する時間なんて無かった筈だから、それよりも前に塔の中に入った人達がいそうだね！

中で何をしているのかは知らないけど、外が大変な事になってるって教えてあげないと！

「おー、かなり広いね！」

「なんだか厳かな雰囲気がありますね……」

塔の中は吹き抜けの大広間！ 平面の大きさだけでも召喚場くらいあるし天井は更に高いけど、一番奥に階段が見えてるから少なくともこれが二階層以上はあるんだろうね！ 流星は歴史的建造物！規模が違うよ！

昔話に出てくる特別な魔法陣はてつきり地上階にあると思っただけだけど見当たらないね！ 上の階層にあるのかな？

「うーん、なんだろう……上から歌みたいなのが聞こえる気がする」

「あ、確かに。これは……呪文でしょうか……？」

「上で何かの集会をしていて、それに遅刻しそうだったから急いでいたのかもね。ちょっと心苦しいけど今は状況が悪いし、声を掛けて中断してもらおうか」

「そうですね」

階段がある最奥までは少し距離があるけど、一步進む度にシンとした空間に僕の靴音とハイドラの水音が響いてどこか神聖な感じ！

壁や天井にも細かく装飾が施されていて、見ているだけでも面白いね！

普段なら絶対に入れない建物だろうし、この経験は故郷の友達だけじゃなくてクラスメイトにも自慢できちゃうかも！ こういうのを役得って言うのかな？

あつ、そうだ！ ハッピーも出てきて一緒に見てみない？ 実際にここに立ってみるとまた違った印象を受けると思うよ！

『縛遺？ヲ窶ヲ螟ア荳亥、オ縛アア縛励g縛ア？。縲？ア慕樟縛励』

平気平気！ もしかしたらレティーシアは怖がるかも知れないけど、多少は慣れてるだろうし前よりも短い時間だったら彼女も取り乱したりしないって！ ハッピーが僕の守護獣だって二回も説明してるしね！

もし誰かに姿を見られちゃっても咄嗟に隠れば問題無いだろう

し、何よりこの機会を逃すのは勿体ないよ！ 見るだけじゃなくて直
接肌で感じ取れるものがあると思う！

『縛じや控あと縛ちよつゆ？』とだ■縛け？▲縛……イ』

おいでおいで！ ほら、あそこの装飾なんかとっても綺麗で見応え
があるよ！

……あ、床にあんまり血とか付けないようにしてね！ 後で滅茶苦
茶怒られそうだから！

邂逅：ジエイド

『私から情報を聞き出したとて無駄だ！ 終焉はもう目の前にある！』

『我々は辿り着いた。邪悪を増幅させるための仕組みは、既にこの地に用意されていたのだ！』

『神聖を尊び、誤った歴史に踊らされている貴様らでは決して真実に辿り着けない！ 本当に見るべきものに気付かない！ あんなもの、初めからこの世界に必要ななかったのだ！』

『指を啞えて見ているがいい！ 間違った分岐をしたこの世界が終わる瞬間をッ！』

確定した未来を語っているような口振り。まるで演説のような狂言。昨夜の殺傷事件で捕まった女からの聴取を終え、ジエイド・グレードは尋問室を後にした。

あれから邪教の調査は予想を遥かに超える早さで進展した。王都内で連日続く窃盗、誘拐、そして殺人。その何れもが根底では邪教に繋がっており、捕らえた犯人は嬉々として自分達の活動内容とその素晴らしさを語ってみせた。

拷問するまでもなく全てを自白する信者達。仲間を売っていると思えない情報量。それでいて、一様に勝ち誇った態度を崩さずにいる横柄さ。

そうした教徒の振る舞いにより、敵組織の規模や目的、そして今朝には本拠地までもが判明した。今まで姿を隠していたのが嘘のように明らかにになっていく組織の全容に、誰もが困惑しつつも事件の早期収束を確信した。

既に邪教の中核は解散しており、残党が好き勝手に暴れているだけの状態。そう考えるのが自然な程に、邪教徒の犯行はどれも散発的で自暴自棄に見えるものだった。

（拠点は割れた。じき以後援組織の尻尾も掴めるだろう。大規模な掃討作戦を実施すれば、王国内に潜む危険因子を一掃できる。しかし――）

『もう終わるんだよ、この世界は』

『俺達はもう隠れない。耐え忍ばない。儀式の準備は既に整いつつある』

(くそッ……)

蘇るのはあの日、ジェイド・グレードが再起した日の記憶。今も狂気に吞まれて自我を失ったままになっている、一人目に捕らえた信者の言葉。

着実に敵を追い詰めているのに、考え得る最速で物事が進んでいるのに、それでも及ばない。何か取り返しのつかない事が自分の認知しない場所で起ころうとしている。そんな悪い予感が思考の至る所に絡み付き、根拠の無い焦りを生む。

(掴まされているだけだ、情報は。邪教がここまで全てを擲なげっているという事は、何か大きく状況を動かす算段がついているに違いない。まさか本当に、邪神を召喚する事が可能なのか……?)

このまま順当に痕跡を辿っているようでは致命的な何かに間に合わないのではないか。そう強く訴えている自分の本能に従い、外に出る。

冷えた空気が停滞する朝の貴族区。普段と何も変わらない日常の風景が、今は不思議と焦燥を煽った。

(何か、何か手を打たなければ。だが……どうやって?)

どれもこれもが直感の域を出ない、根拠の無い空想だ。誰に説明したところで理解は得られないだろう。しかし自分の力のみで調査するには王都は広く、限られた時間の中で出来る事など知れている。

袋小路の思考。調査が進んでも、足が前に進んでいない感覚。言いようのない不安。

直じきに敵拠点への突入作戦が始まるが、とてもではないがそれをただ待つ気にはならなかった。

(足踏みしている暇は無い。事件のあった場所をもう一度調べて——ッ!?)

視界に、体勢に違和感。

焦りと緊張によって正常な感覚を失ったのか——否、世界が揺れて

いる。

「地震……う？　こんな時に……いや、まさか邪教の儀式が……!?!」

それは最悪の想像。しかし有り得ない話ではなかった。今日邪神召喚の儀式を行うのであれば、信者が今朝に活動拠点を明かした事にも頷ける。実際に儀式を行う祭壇は拠点と別にあり、大量の情報をばら撒く事で調査の目を逸らそうとしていたのだろう。

本当に邪神などという存在が召喚できるのかは別として、儀式が進行すれば地震以外の被害が出る可能性がある。急いで屋敷に人を呼びに返ろうとしたところで、遠方に土煙が立ち昇っているのが見えた。

「あの場所は……学園……!?!　不味い……っ!」

気付けば足が前に動いていた。この時間、当然ながら学園では多くの生徒が授業を受けている。メイユールの未来を担う彼らに何かあった時、この国が受ける影響は一時的な人的被害に留まらない。

再び地面が揺れ、地鳴りと土煙が連続で発生し始める。一定間隔で規則的に響く重低音が、この揺れが自然現象によるものではない事を物語っていた。

学園には強力な魔力増幅効果が得られる大魔法陣がある。聖獣を呼び出したというそれを利用して邪神を召喚しようというのだろうか。

当然、同所が邪教に狙われる可能性を考えなかった訳ではないが、大魔法陣には強力な障壁が張られている。その特性を知り尽くした内部の人間でもなければ、解除はおろか破壊すら不可能だ。

中小規模の団体ではあまりに困難なため可能性を排除していたのだが、何か掻い潜る手立てがあったのだろうか。それとも――
(いや、何れにせよ行けば分かる。急ぐ)

またも複雑化しようとする思考を脳内から追い出し、強く石畳を蹴る。

貴族区を抜けて建物の隙間から学園の外壁を確認した時、一際強い振動と共に放たれた白い光が王都の空を染め上げた。



学園の正門を固めていた騎士達の目を避け、少し回り込んだ場所の壁を跳び超えて学園内に降り立つ。

先程まで護陣塔に攻撃を仕掛けていた赤錆色のゴーレムは、教員のものと思われる複数の大型召喚獣と戦闘を開始しており、塔は障壁こそ突破されたものの間一髪で破壊を免れていた。

(まさか正面から障壁を突破しようとは。俺も早く援護に……)

王都内、特に王城付近は魔法障壁によつて厳しい高度制限が設けられているが、召喚師学園を含む一部の施設では飛行や実験を行うためにその制限が免除されている。学園の敷地内に入った事で飛行が可能となったため、シルバーを呼び出してゴーレムの元に急行しようとしたところで——気配がした。

或いは、悪寒。

(——ッ!? これは……っ！)

最初に邪教徒を捕らえた際、町中に現れた気配。しかし、その前から知っている感覚のある気配。信者曰く邪神のものであるらしいそれは、信心を持つ者にしか察知できないという確かな狂気。

何故このタイミングで、とは思わない。状況や邪教徒からの情報を鑑みるに、この狂気こそが邪教の活動によるものなのだろう。『終焉はもう目の前』と信者が言っていたが、今まさに邪神召喚の儀式が行われているのだとすれば全ての辻褄が合う。人間が意図的に神を降ろすなどという行動の可否は兎も角として、その企みは阻止しなければならぬ。

邪悪な気配を辿りながら数歩進むと、大まかな位置を掴む事ができた。どうやら大規模な戦いが起こっている北側ではなく、人の気配が少ない西側の護陣塔付近から発せられているようだった。

ではあのゴーレムは陽動なのか、それとも別の目的があるのか。どちらにせよ北側に学園の戦力が集中している以上、そして一部の者にしかこの気配が感じ取れない以上、適任者は自分だけだ。

「行く。きつと、これは俺にしかできない事だ」

シルバーを呼び出そうと思ったが、止めた。あのゴーレムによる攻撃が邪教による陽動だとすれば、それに気付いた事を相手に悟らせるべきではない。幸い西の護陣塔までの距離はそう遠くなく、木々などの遮蔽物も多い。道を選べば敵に見つかる事なく目的地に辿り着けるだろう。

身を潜め、警戒し、駆け抜ける。程なくして護陣塔が観察できる距離にまで近付くと、既に塔の扉は開け放たれており、その内部から邪悪な気配が発せられている事が分かった。

遠方からは悲鳴や爆発音が聞こえてくるが、護陣塔の近くは不自然な程に静かで空気が張り詰めている。元の敵かな雰囲気には重圧も加わり、息を切らしている訳でもないのに不思議と息苦しさがあった。

（一部とはいえ護陣塔の魔法障壁を破るか。邪教め、相当な人数の術者を抱えているようだ）

邪神召喚は邪教の悲願だ。資金や人材の全てを今日の作戦に投じている筈であり、塔の内部では激しい戦闘が予想される。最初から幹部級の実力者と対峙する事も有り得るだろう。

いつでも守護獣を呼び出せるよう身構えつつ塔の側面へと取り付き、正面に回り込んで中を覗き込むと――想像もしていなかった人物がそこにいた。

「なんだ君かあ。一応聞いておくけど……ここに何の用？」

緊迫した状況に不相応な気の抜けた声。

悍ましい触手の怪物を従えた庶民のクラスメイトが、たった今まで何かがいたような床の痕跡を隠すように一歩進んでジェイド・グレイドの前に立ち塞がった。

決意：ジエイド

「そういう……事か……」

あの日挑み、敗れた相手。いつか越えなければならぬ相手。再戦を誓いはしたが、それは決して今日ではなかった。

自分を見つめ直し、研鑽に励み、もつと相応しい場所で、正々堂々と。そうした想いは今、最悪の形で裏切られた。

何度も夢に出てきた顔。どこか不気味な笑み。その何も映さない黒塗りの瞳を見ていると、自分がこの相手と本当に向かい合えているのかも分からなくなる。

全てを察した俺は、自然と口を開いていた。それは相手に語り掛けるためではなく、ただ自分に言い聞かせるための言葉。

「俺は……逃げていたんだ。この期に及んで」

「へー、何から？」

「現実から」

考えないようにしていた。邪教徒が邪神のものだと言っていた狂気を、何故自分が知っていたのか。決闘で見た凄惨な悪夢は、本当に弱った心が生み出した幻覚だったのか。この庶民が現れてから邪教の動きが活発になった事は偶然なのか。

入学式の日、父親の話聞いて運命めいたものを感じていた。互いに立場を考えず実力を出し合い、全力でぶつかり合い、敗北すら糧にできる宿敵との遭遇。一度は敗れ、戦意を失いながらも、その後は明確に目標として定めるようになった。

グレード家を背負い、強く崇高であらなければならぬ自分。そして、そのために越えなければならぬ壁。

そんな宿敵が人類の敵であって欲しくないという願望が、見えている現実から目を背けさせたのだ。

「まあよく分からないけどさ、ここはもうすぐ終わりだよ。他の応援に行った方がいいんじゃないかな？ 例えば、北にいるゴーレムの所とか」

「いや、いい。尤もらしい理由を付けて見えない振りをするのは終わ

りだ。俺は今日、ここでお前に立ち向かう」

「立ち向かう……君が？ 僕に？」

こちらの正気を疑うような物言い。だが言わんとしている事は分かる。何もできず惨敗した相手が、たった数日で再戦を挑もうというのだから。

しかし、あの時には油断があった。驕りがあった。そして覚悟が無かった。全てを出し切り、這い蹲つくばってでも勝利しようという覚悟が。「あの日、俺は全てを失った。邪教との出会いで前を向き、目標をすり替え、視野を狭める事で立ち直ったつもりになっていた。俺にはまだ時間が残されていて、一つ一つ着実に問題を解決していけばいつか何かを掴めると思っていたんだ」

「……」

「だが違った。こうして対峙して分かった。俺は今も、あの日に囚われたままだ」

形だけでも立ち上がり、歩み始めた気になっていた。だが実際、敗北の過去に打ち棄てられた魂はその場で置き去りになっていて、自然と闇が晴れるのを怯えながら待っているだけ。惨めで弱い本質。才能に、環境に、全てに恵まれながらもジェイド・グレードはどこまでも人間だった。

「決めたよ。力を貸してくれ、シルバー」

目を閉じ、手をかざす。光を放つ魔法陣から現れたのは、深く息を吐いて集中し、目の前の敵を睨み付けて闘志を燃やす銀竜。今まで数々の戦場を大空から支配してきた相棒は、その翼を広げて存在を誇示する事もなくただ静かに重心を低くする。敗北を受け止め、一時は失意し、再戦を誓っていたのは彼も同じだ。

自分の意志で、自分達の意味で立ち向かい、切り開かねばならない。この敵に勝利し、過去を払拭しなければ何も変えられない。ここで邪教を止めなければ、民を守れない。世界を救えない。約束を守れない。

「俺はもう逃げない。もう油断しない……！ 全力で挑み、お前を越えてみせる！ 来いっ、ヘレシー！」

抜剣。そして強化魔法。普段は断りなく能力を補助すると不満を訴えてくるシルバーの瞳も、今は正面を見据えたまま動かない。

眼前で堂々と戦闘準備を行っていても相手は自然体の立ち姿のまま。その悠然とした態度に焦って魔法で牽制しようとしたところで、こちらの先制を戒めるように触手の怪物が前に出てきた。

「何かに挑戦し、心砕け、それでも手を伸ばす気持ちは私にも分かりません。無謀な戦いに挑むのは、本当は相手を打ち負かすためではなく自分を納得させるため……ですよね」

人の言葉こそ発しているが、無数の触手を蠢かせ、ぬめる水音を響かせながら移動する姿は異形そのもの。

邪神との密接な関係を思わせる外観。およそまともではない肉体構造。見覚えはないが、相手が契約している召喚獣の一体だろう。

「ヘレシーさん、ここは私に任せて下さい。あの人は貴方に出会う前の私に似ている。そう思うんです」

「そうなんだ？　じゃあお願いしようかな。彼、ちよつと勘違いしているみたいだから目を覚ましてあげてほしいな。終わったらすぐに戻るよ」

勘違い。

油断しなければ、力を出し切れれば勝てると言つてのけた挑戦者に向けた言葉。侮辱でも嘲笑でもなくただ事実を述べたようなその口調から、敵が未だにこちらを脅威として認識していない事が分かる。

勝たなければならぬ。実力を示さねばならぬ。奥の階段へと歩き去っていく宿敵の背中を追おうとして、それを防ぐように伸ばされた触手によって視線が遮られた。

「分かります、貴方の気持ち。私もそうでしたから」
この場に残された異形の召喚獣が語りかけてくる。

本体と思しき部位は人型をとっているが、触手を含めた全長は大型召喚獣と呼んで差し支えの無いもの。時間稼ぎを任されている以上、それに適した能力も携えている筈であり、無視して先には進めそうにない。

「悩んで、苦しんで、それでも求めてしまう、繰り返してしまう。私の

場合それは間違った行動ではありませんでした。最後には救われたから。救っていただけだから。ですが、結局はただ運が良かっただけで、今思えば本当に小さな可能性に賭けていたんだと別の未来を想像して怖くなります」

大木を思わせる巨大な触手を増やし、敵の召喚獣が人型の本体を高く持ち上げていく。空の支配者である竜を見下す挑発的な姿勢。

「ヘレシーさんは優しい方ですが、きつと甘くはありません。多分ですけど、さつきご挨拶した先輩も手加減は不得手だと思います。貴方は自暴自棄にならず一旦立ち止まって息を入れるべきです。……といても、そう簡単に気持ちの整理なんてつきませんよね。今の自分の力を試してみたいですよ。だから——」

触手が床を打ち付ける。人型の本体が手を掲げ、黒い渦を喚ぶ。

「——私が貴方の壁になりますよ。受け止め切れるかは分かりませんが……ちゃんと役割を果たせるように頑張りますから」

黒渦から濁流が流れ込み、大量の水と触手が視界を覆う。

その光景は奇しくも一枚の大きな壁のように見えた。

悪魔

やあ、僕の名前はヘレシー！ 迷子の生徒を避難させるために追いかけていた僕は、学園の西端に建っている塔の中で久しぶりにジェイド君に会ったんだ！

家の用事か何かでずっと休んでいたのに学園の危機に駆け付けてくれるなんて流石は貴族だよな！ でもここでは避難するように声掛けするだけだから僕だけで十分だし、ジェイド君は空を飛べる守護獣がいるんだからゴーレムの方を手伝いに行くべき……だと思ったんだけど、何故かこっちに突っ掛かってきて面倒だったからハイドラに任せて後回しにしたよ！ 状況を考えてね！

今は丁度階段を登りきったところ！ 地上階の天井の高さから予想はついていたけど、次の階層まではかなりの段数があったね！ 畑仕事で足腰を鍛えていなかったら息切れしていたかも！

次の階層にはすぐに広間への扉があつて、これも塔の入口と同じく一部が壊された状態で開いていたよ！ 横から少しずつ顔を出して扉の中を覗いてみると、広間の真ん中にある魔法陣を黒装束の人達が囲んでいるのが見えるね！ 間抜け面で視線を上に向けているみたいだけど、みんなで一体何を見ているのかな？

「や、やった……！ やったぞ！ 邪神様が降臨なされた！」

「我々の祈りが通じたのだ！ 今こそ世界に破滅を！ 我々に救いを！」

「あれが邪神様……なんとお美しい……」
「えっ」

急になに？ 邪神？ 破滅？ 神様いるの？ だとしたら、あんまり人間の主観で変な呼び方をするとう失礼になるからやめようね！

僕も広間に入って天井を見上げてみると、そこには純白の翼を広げている人型の存在がいたよ！ 白を基調とした法衣みたいな服装がよく似合っていて、神話やお伽話に出てくる聖者様みたい！ 軽く後光も差してるね！

外見はすごく清らかで美しいんだけど、見てるとすっごく嫌な感じ

がするし、本能的な忌避感で鳥肌が立つちやうよ！ そういうところが邪神って言われちやう原因なのかな？

神様っていうには何か足りない気がするけど、危険で嫌な感じがあるのは間違いないね！ 多分早く帰ってもらった方がいいよ！

というか、そんな存在を意図的に召喚したっぽい黒装束の人達もかなりヤバイよね。普通に犯罪でしょこれ。この緊急時に何やってくれているの？ 僕、ここに避難誘導しに来てただけなんだけど？

「jajaajaajaajaajaajaajaajaajaaja!!!
ジャ。シーシーシー。hee……aa……あー、こうか」

あ、翼の生えた存在が何かと波長を合わせるような声を出してるね。

もしかして話し掛けてこようとしてる？ 知性のあるタイプかあ。

「jajaajaaja……！ そうだ、俺が邪神だ！ さあ人間よ、天使を殺せ！ 女神を殺せ！ そして俺に穢れと血肉を……いや、やっぱ無し。冗談でも気持ち悪いわ。オエツ」

あ、意味の通る言葉が聞こえてきた。綺麗な見た目にして言葉遣いが乱暴なのがちよつと面白いね！

うーん。なんとなく嫌な感じがして、よく分からない事を語り掛けてきて……こういう存在の事を昔どこかで聞いた覚えがあるんだけど何だったかな。少なくとも善良な存在ではない気がするよ！

「ハァー、ここは……相当な低次元みてえだな。どんな理由かは知らねえが、俺を呼び出したのはお前達か。ご苦労ご苦労。丁度時間が必要だったんだよ。ほんとウンザリだわ。あのクソの『尖兵』共も、『母胎』も」

言葉は通じるようになったけど、具体的に何を言っているのかは理解が難しいね！

人間に何かを告げる時は威厳だけじゃなくて話の解り易さも重要だって故郷の神様も言ってたよ！ ほら、黒装束の人達も困惑してる！

『子飼い』もこんな低い次元まで見に来ねえ。潜伏して様子を見るのも悪くねえか。おい、テメエら。今から……そうだな、少なくとも千

年程度はこの世界を維持しておけ。そしたら望みのものをくれてやる」

「は……せ、千年……？　あの……邪神様、今すぐに世界を滅ぼして下さるのでは……」

「あ？　馬鹿な事言ってるじゃねえぞ。人間なんてのはな、何も知らず、何も考えず、その瞬間までのうのうと生きていればいいんだよ！

【永く穏やかな人生を】！　j a j a j a j a j a !!」

「な……？　どういう事だ……!?!」

「こんなもの、我々が求めていた終末と違う！　あれは邪神様ではないー！」

「私達は一体何を喚び出してしまったのだ……!?!」

ええ……？　なんか悪い人達と召喚された存在の間で揉めてるんだけど？　話がややこしくなるから認識の擦り合わせくらいは円滑に済ませてくれないかなあ。

つまり黒装束の人達は邪神を呼び出そうとしていた悪い人達だけど、その邪神を呼び出すのに失敗して思っていたのとは違う存在が出てきちゃったって事？

……じゃあ、あれ何？

「分からねえか？　これは契約だ。たった千年の安寧で永劫の『救済』が得られる……こんなにも旨い話はねえよなあ!?!」

綺麗な声でなんだか詐欺師みたいな事を言っているけど、もし本当に神様なんだとしたら回りくどい会話なんてせず先に力を示すよね？

……あつ、思い出した。人間を丸め込むような甘言ばかり言っていて、変な要求をしてきて……あれって故郷で前に聞いた『悪魔』とかいう存在なんじゃないかな？　耳触りの良い言葉で契約を迫って、その直後は幸せになれたとしても結果的には破滅させちゃうっていう怖い存在。

姿が清らかで美しく見えるのも、自分を神聖な存在だと思わせて人間の警戒心を解くための擬態だとすれば辻褄が合うよね。そうして心の隙間に入り込んで危ない契約を結ぶ……みたいな！

悪魔の契約には世界への強制力が伴うらしいから、内容によっては本当に世界が滅亡しちゃう事もあるだろうし、黒装束の人達が召喚したかった相手としては意外と惜しい存在かも知れないね！

『フヲ謨才^敵縛^すア縛^すハレ^ヘシ^シヤ^シ縲^シキ縲^シ輔^シS縲^シる』

「へ？ あ、うん。いいよ」

状況が想定外過ぎて頭を悩ませていたら、ハッピーが珍しく有無を言わせない様子で出てきたよ！ 空間の裂け目からズルリと落ちてきて勢いよく潰れる肉々しい体と、血液と共に弾け飛ぶ肉片が眩しいね！

地上階ではギリギリ姿を隠すのが間に合ってジエイド君から見られずに済んだけど、今は沢山の人の前で顕現しちゃったからもう開き直るしかないよ！ 床に付いちやった血なんて後で掃除したら良くない？

それにしてもハッピーがここまで強引に顕現するなんて珍しいね！ 僕と同じくあの悪魔に嫌な力を感じ取ったのかな？ 敵を見定める能力は僕なんかより彼女の方が遙かに優れているから信頼しているよ！

「なんだこの揺れは！ うおっ!? 肉の塊……いや、人……間……?」

ひ……!」

「まさか本当の邪神様が……!? つ、違う……違う! なんだ、この溶けた……う……おえ……」

「ひいっ！ 来るな……! 来るなああああああつ!!」

「が、が……あひ、あが、あが」

あー、黒装束の人達が腰を抜かしたり口の中に手を捻じ込んだりしながら壁際に逃げていつてるね。やっぱり王都の人ってホラーが苦手なんだなあ。

それにしても妙に反応が大きい気がするけど、これって意図的に怖がらせていたりはしないよね？ 放っておいたら全員大変な事になりそうなんだけど。

『縛^え医^と▲縛^とイヲ^多寡^少壺^は一^影代^響? 縛^縛髪^縛縛^縛励^縛※縛^縛励^縛縛^縛縛^縛ヲ^縛縛^縛? k縛^縛九^縛b

今^今は^はか^かなり^{なり}威^威圧^圧し^して^てい^いる^る? 縛^縛九^九→縲^縲雁^雁イ』

威圧……あつ。……でも大丈夫大丈夫！

こうなったのも元を辿れば変な存在を召喚した黒装束の人達のせいでし、今は自分の身を守らないといけないもんね！ これは正当防衛だよ！

「尖……兵……？ お……おい、なんでこんな次元に『尖兵』がいやがるッ!」

「え、なに？」

「クソッ、罨か!? 待ち伏せて各個撃破だと……？ チッ、腐れ肉団子風情が変な知恵つけてんじゃねーよ死ぬ！」

ハッピーの姿を見て暫く固まっていた悪魔が我に返って騒いでるんだけど、もしかして知り合いだったりする？ 僕が言えた事じゃないけど、友達を選んで方がいいと思うよ！

『寔ヲヲ ウ縛? 下縛励 g縛? よ代→ 縛上↓縲 ゆ? ∞? 九? 違? 險倅縛? 縛才縛縛ゆ j縛縛縛 s寔ヲ寔ヲ縛縛縛 縲…霧縛』

あ、そういう感じなんだ？

でも大体分かったよ！ ハッピーの敵って事は僕にとっても敵だからね、一緒に頑張ろう！

『縛ゆ j縛後↓縛 ? #縛悶 縛 セ縛呐? ゆ☆縛 ソ縛セ縛 帙 s縲』
『ソキ誼代』

いやいや、これは黒装束の人達が悪いだけでハッピーのせいなんかじゃないよ！ 呼び出したのも被害を受けそうになっているのも人間だからね！

でもあの悪魔が敵だとして、どうやって対処すればいいのかな？

一応は召喚獣っていう扱いだろうし術者に確認せずに攻撃するのはマズいと思うんだけど……当事者の人達はもうまともに会話できそうにないしなあ。その辺りの法律とかがどうなってるんだろう？ 勝手に攻撃したら捕まったりする？

「……いるのは『尖兵』だけ、みてえだな。はぐれの相手なんて一体だけで十分だったか？ 舐めやがって……!」
「不浄なる存在に滅却の光を」ッ!」

おー、悪魔が呪文みたいな言葉を唱えたら、上から金色掛かった光

現実：

平和の象徴にして国防の要。神によって用意された魔法陣を守るべく作られた建造物——護陣塔。

そんな偽りの歴史と用途を持つ建物の二階層で、この日、本来であれば敵対する筈のない者同士が対峙していた。

「まさか家族の体が破裂する様子を見せられるとは思わなかったよ。珍しい経験だとは思うけど、全く気分の良いものじゃないね」

床から宙を見上げているのは一人の少年。親しみ易い顔立ちは見る者に温厚な印象を与える一方で、黒塗りの何も映さない瞳からは感情の機微を読み取る事ができない。

どこか超然とした雰囲気を持つてはいるが彼の身体は等しく人間であり、高位の存在と相對するには余りにも脆弱だった。

「家族だあ？ 何を言って……ああ。人間、テメエ……『穢染体』なのか」

そんな少年を見下ろすのは光柱を背負った純白の翼徒。意図せずこの世界に顕現する事になった彼女は、同族から孤立して主神との繋がりや失った今なお多くの神聖と祝福を内包している。

「へ？ 僕はハッピーの家族だよ。僕が兄で彼女が妹で……え、違う？」

「……穢れが記憶にまで回ってやがる。洗脳されたのは昨日今日の話じゃねえな。もつと前……ガキの頃から取り入られてんのか。可哀想に」

翼徒は悲痛な表情で少年の歩んできた人生を想う。人として本来得られる筈だった平穏や幸福の全てを奪われ、今日まで利用され続けてきた哀れな容器^{少年}。邪神の眷属による酷く理不尽な所業を目の当たりにし、彼女は憤りと共に強い使命感を覚えた。

「安心しろ、お前は俺が救ってやる。そこに跪け。一人の子よ、その身に祝福を——」

『縛輔○縛七縛!!帙』

洗脳と汚染から少年を救うため、翼徒が高度を下げ彼に手を伸ば

したと同時に。それに反発するように床が、壁が、天井が混沌に沸き立ち、粘り気のある血と肉の大波が現れた。

穢れ塗れたその血肉に込められるのは怒り。相反する存在による勝手な行いを阻止するべく急造された半液状の肉体が、敵を喰らおうと空間の中心部に殺到する。

「っ!?! 【邪悪よ、穢れよ、我が輝きを見よ】——！ う、ぐあ……っ、ああああああア”ア”ッ!”」

決して警戒は解いていなかった。だが、敵の再生が早過ぎた。翼徒は咄嗟に生み出した光球を炸裂させて迫り来る血肉を浄化したが、全方位から際限なく押し寄せる膨大な質量によってその清らかな光さえもが取り込まれ、押し潰される。

通常の『尖兵』の個体であれば既に存在が保てなくなる程の穢れを滅却しているにも拘わらず、それでも勢いを緩めず流れ込んでくる滂沱の血肉。それらはやがて聖なる光を完全に押し込んで翼徒へと喰らい付き、腕を、脚を食い千切りながら彼女に宿る祝福を汚染する。美しく澄んだ魂を穢す。

「ッ……、あ”アっ……! ツ、『尖兵』風情がッ、俺を、舐めるなああああああッ!!」

—— 回帰。

古典召喚術によつて単身でこの世界に呼び出され、力の供給を絶たれた事により残量を考慮しなければならなくなった神聖と祝福。それを多量に注ぎ込み、翼徒は肉体を失う寸前で燃え盛る車輪を生み出した。

静かに回転する車輪の中心に灯る種火は世界を静謐に染め上げる一滴。その小さな炎が零れ落ち、洪水のように流れ込む穢れの一部に触れた瞬間——空間内にあった全ての血肉が最初から存在していなかったかのように燃え上がり消滅した。

「うく……、ハア、ハア……ッ! すぐに、治療を……!」

不意打ちからの攻防を征したのは翼徒。しかしその代償も大きかった。

邪悪の気配は遠ざかり、今この場所を満たしているのは温かな光と

神聖な空気だけ。そんな静かな空間の中、翼徒はむしろ警戒を強めながら自らの再生と浄化に尽力する。

「ク、ソ……治りが遅え……力も使い過ぎた……ッ！　何なんだ、あのイカれた個体は……っ！」

通常よりも遥かに多くの時間を費やしてようやく元の姿を取り戻した翼徒は、体の調子を確かめるように翼を羽ばたかせて悪態をついた。

膨大な穢れと狂気。全てが規格外の敵との邂逅。単独では決して対峙してはならない強い汚染力を持った邪悪の化身が、わざわざこの低次元の小世界を平らげるために顕現している。

一体どこからその異常な力を得ているのか。何があの個体に『尖兵』として逸脱した性質を持たせているのか。

その疑問の答えは、彼女の直ぐ足下にあつた。

「ハッピーの体が……君、本当に危ないね。あまり他のひとに迷惑は掛けたくなかったけど、これは仕方がないかな」

「ガキ……そうか、穢れを溜め込ませた『穢染体』から力を取り出してやがるのか……！」

自我が完成していない幼少期の子供に取り入り、その身を不浄の器として使うという非道。長い時間を掛けて心に、魂に注がれ続けた穢れはやがて元の人格を完全に破壊し、狂気によって書き換えられた常識と感性は本人に濁った別世界を見せる。現実を正しく認識できなくなった子供は無邪気に邪悪を受け入れる傀儡と化し、悍ましい怪物の体内へと取り込まれるその時を待つて生きる。

邪悪を強力に補助する増埒と化した少年の姿を見て、翼徒は怒りで歯を食い縛った。

余りにも卑劣な手法。安寧の徒である人の子から未来を奪い、都合の良い道具に作り変えてしまうという生命への冒瀆。狂気と悪意の煮凝りでしかない邪神の眷属がそのような長期的な策を打つ知性を持っているかは疑問だが、もしこの方法が有効だと判断されれば多くの人間が同様の被害を受け、世界は生命の理から外れた存在で溢れ返るだろう。

空間の裂け目。吐き出される肉塊。

穢された人間の魂を清らかに再構築するための炎は、少年との間に割り込んだ敵の肉体によって物理的に防がれ、その中心部を刳り貫くように焼き尽くして消えてしまう。

妨害が間に合う筈のない時間だった。しかし事実として敵は不完全ながらも体を構築し、この世界に干渉してみせた。翼徒はその異常性に思わず声を上げながら、眉を顰めて足元の敵を観察する。

『縛セ縛滓……力医…縛……縲……』

「……流石に万全じゃねえか。顕現を優先しただけみてえだな」

顕現した瞬間から崩れていた肉体。弱々しい鳴き声。炎で体内を焼かれた邪神の眷属は苦しそうに半端な手足を動かしているが、ただそれだけ。やはり再生が間に合わず、中身の伴わない形だけの肉体を作る事しかできなかつたのだろう。

溶けた人面が発している呪詛を無視して翼徒がもう一度少年に向けて炎を落とすと、敵は反応を遅れさせながらも飛び跳ねてそれを庇い、甲高い悲鳴を上げながら融解して動かぬ肉溜まりとなった。

自らを犠牲にしても『穢染体』を守ろうとするその行動に翼徒は思わず首を傾げる。邪悪の坩堝として利用している人間に何らかの価値を見出しているのだろうか、『穢染体』が浄化されるといふのならその前に全ての力を吸い上げるなり、自分の中に取り込んで同化するなり他にやりようがある筈である。

あくまで外付けの容器でしかない『穢染体』を守るために自らが肉壁となり、何もできないまま消耗を繰り返しているようでは本末転倒だ。

「……そこまで固執する理由は知らねえが、どうしたってそのガキが大事らしい。だがな、そいつはテメエの玩具なんかじゃねえぞ……！」

命の使い方ってのは、持つてる本人が決めんだよッ!!」

敵が身を擲^{なげ}ってでも浄化を阻止しようとするのなら、その体ごと『穢染体』を貫いてやれば良い。怒りに吠えた翼徒は自分を照らしていた光を掴んで束ね、一本の大槍を作り出して少年の元へと羽ばたき降りた。

狂気に染まった人間を救い出し、在るべき現実へと連れ戻す。それだけを想って突き出した光の槍は、今度は誰にも阻害されないまま少年の胸に突き立ち、静かに染み入るようにして背後へと貫通した。「え」

「耐えろよ、ガキ」

唾然とする少年の声。彼の背中から突き出た光槍が燃え盛り、穢れた魂を砕くべく内部から肉体と精神を焼き切っていく。狂気と幻覚で塗り固められた少年の人生を否定する。

「うツ……あ！ い”っ、が、ああ”っ！ 嗚呼あああああ”あ”あ”!!」

肉体を傷つけられる痛みと心を失っていく苦しみ。人が生きる全ての時間を拷問に費やしたとしても到底届かない苦痛。そんな理不尽に襲われる罪無き少年は、記憶も、経験も、人格さえもが破壊されて空虚な存在へと作り変えられていく。

「痛”ッ、あ”ぐツ……！ が、……ア”アツ!!」

「すまねえ、今だけだ。すぐに終わる」

愛し、救うべき対象の痛ましい姿。それを見て張り裂けそうになる心を保つべく、翼徒は目を伏せて光槍に力を込める。

空間に響き渡る絶叫の中、翼徒がもう一度謝罪の言葉を口にしようとしたその時——今にも壊れそうだった少年が雰囲気を一変させた。

濃い闇の気配。

「ああ、痛い。苦しい。どうして……どうして——お姉さんは僕を痛めつけるの？ どうして僕を殺そうとするの？」

「な……!?!」

頭を殴られたような衝撃があった。思考に影が差す感覚。

少年に起きた変化は明らかに異常なものだったが、純粹な疑問によつて行動を責められた翼徒は冷静ではいられなかった。彼女にも同様の迷いがあった。

「ツ、これは、お前を救うために」

「ひどいよ、こんなの。僕はそんなの望んでないのに。今までずっと幸せだったのに……天使がそれを奪うんだ？ 女神の使徒が人の幸

せを奪うんだ？」

「!? 違うっ！ 俺は……」

「言ってあげようか、自分本位な上位者。人間を寵愛と快樂で溶かして進化を妨げる停滞の化身。僕は——人間は、お前達なんか必要としていない」

「やめろ……やめろッ!!」

翼徒は咄嗟に目を閉じ、声を上げて自らを非難する音を掻き消した。即座に否定しなければならなかった言葉を否定できないまま、頭を振って身を縮める。

彼女が再び目を開けた時、そこには大きく形を変えた少年がいた。何倍にも身体を腫れ上がらせ、増えた手足で溶け落ちた血肉を掻き分け、表面に張り付いた無数の顔の口元を楽しそうに歪める少年が——
「ガキ、お前、その体——ぐっ……ぐ……あ……あ……ッ……!」

異様な光景から逃げるように槍を手離して一步退いた翼徒だったが、その白い背中は生温かい肉壁に触れて押し戻された。彼女の背後には大きく損傷していた筈の『尖兵』が完全な姿で顕現しており、その内臓部から伸ばされた管状の器官が翼徒の腹部を貫いて根を張り、体内に大量の穢れと狂気を注ぎ込む。

気付けば室内は視界を妨げる程の邪悪に満ち溢れており、背後も、床も、天井も、全てが穢れた血肉で覆われていた。

「ぐ……う……うッ、あ……あ……あああああッ!! くッ、【焼べた命を煌めく光に】——ッ!」

残った力だけでは最早この状況を覆せない。翼徒は自らの格を大きく削って一時的な力へと変換し、命の輝きによって体内に入り込んだ肉管と周囲の邪悪を焼き払った。

どうにか貫かれていた体を自由にしたものの、立ち上がろうとしても各部に力が入らず、穴の空いた腹部を押しさえて膝を突く事しかできない。

「はあっ……はあっ……! 何が……どう、なって……やがる」

思考に差していた影が薄れていく。

翼徒が自然に閉じようとする瞼を無理矢理こじ開けて顔を上げる

と、目の前には真実があった。

少年は人間の姿を保ったまま元の場所に立っており、槍が刺さっていた筈の胸部には何の痕跡も無い。不思議そうに首を傾げているその様子からは己を問い詰めていた際の異様な雰囲気は一片も感じられず、自分が負わされた傷以外の全てが幻だったと言われても納得するしかない光景。

背後にいた『尖兵』は振り払われた紐状の臓器を引き摺りながら、瀕死の獲物天使を放置して少年の隣へと移動していく。

この時、ようやく翼徒は自分の精神が汚染され、恐ろしい悪夢を見せられていた事を知った。

「っ……狂気に、吞まれてたつてのか。俺が」

邪神の狂気に侵された人間は悪夢を見る。自分の中の不安を、迷いを、咎を想起させられ、在りもしない過去に責められながら最も恐怖する光景を見せられる。その恐怖は心の奥底に種を植え付け、やがて芽吹いた種は宿主の人格を蝕みながら育ち、狂気の花を咲かせる。

清く神聖な存在である女神の使徒は邪神の眷属にとつての天敵だ。滅し、滅される事こそあれど、主神から直接祝福を受けている天使が悪夢を見る事は無い。しかし、事実として今それが起こっている。それが可能な相手と単独で対峙してしまっている。

絶望の悪夢から脱して尚、翼徒の置かれている状況は絶望的だった。

「……分かった、テメエは強え。イカれてやがる。俺は……ここで死ぬんだろう」

確信する。己の最期を。

いつそ清々しい心境の中、翼徒は手の中に光を灯した。残り僅かな命を限界まで焼べた尊く美しい光を。

「ガキ、安心しろ。シケた終わり方はしねえ」

少年と目が合い、翼徒は自然と柔らかく微笑み掛けた。

もう身を守る必要は無い。先を見据えた余力も必要無い。必要なのは全てを投じた最後の一矢だけだ。

狂気と幻覚に囚われ続け、今まで正しい世界を認識できていなかった

た少年に、一瞬でも本物の光を見せる。邪悪によって洗脳されている現在とは別の生き方があるのだと示す。たとえ正気を取り戻せなくても、何かに気付く切っ掛けになればそれでいい。

これは人を愛し、人を導くべく生まれてきた天使としての矜持だった。

「よく見とけ。そして感じるんだ。お前が少しでも自分の中の狂気に疑問を持つようになってくれたなら……俺も死に甲斐があるってモンだからよ」

体が沸騰したように熱くなる。自分の中で大切なものが崩れていく。強い喪失感を代償にして、全身に漲ってくる膨大な力。

翼徒は限界を超えた力を捧げ、朽ちて横倒しになっていた車輪へと光を焼べた。強く清らかな光はやがて熱を持ち、燃え盛りながら回転を始めた車輪は闇を照らし邪悪を払う太陽となる。

そんな太陽は爆発的に増え続ける力を内部に抱き込みながら脈動し、本来の役割である浄化のためではなくただ一人の少年を照らすために回転を加速させていった。その中心部で強引に圧縮された力はついにこの世界の法則では到達できない領域にまで膨れ上がり、抑えきれずに溢れ出た一筋の光でさえ星の地表を焼き尽くすに十分な熱量を持つに至った時、車輪がその核熱を解き放つべく分解を始め――

「あ、来た来た」

――別次元から突如向けられた無数の質量を持つ眼光に貫かれ、上空から滝のように降り注ぐ臓物と体液に呑み込まれて消滅した。

「何――」

『道七纏丞悉纏ユ縲るウ輔縲。C纏』 纏溯縲』

新たな敵の気配。空間が波打つ程の邪悪。翼徒が咄嗟に上を向くと、そこには先程まで存在しなかった円形の泡立つ沼が生まれていた。門を潜るようにして不浄の沼から姿を現したのは、宙に浮かぶ巨大な球状の肉塊。邪神の眷属。

それは絶えず脈打ち、穢れた体液を垂れ流している肉の裂け目から定期的に大量の血肉を産み落とす世界の敵。現れた戦場を瞬く間に死んだ土地へと塗り替えていく戦略兵器。

通称『母胎』。決してこのような場所に投入されるべきではない不浄そのものが、瀕死の天使ただ一体を犯す為だけに顕現した。

『葱@縛酔蠢励h縲…轆ス縛才縛励※縛◆縛九』

援軍はそれだけではない。更にその隣、床から天を貫くように生きてきたのは『子飼い』と呼ばれる巨大な柱。大小様々な眼球のみが敷き詰まった凹凸のある肉体は見る者にこれ以上無い忌避感を与えると共に、ここが邪神の領域である事を知らしめる絶望の旗印。

戦場を俯瞰し、前線の兵に効率的な破壊と汚染を指示する司令塔は、その無数の瞳で少年を追いながら眼球同士を擦り合わせる独特な音を響かせている。

「ごめんね、召喚の授業の時にも来てもらったのにまた呼んじやって。ハッピーが敵だって言うから少し心配になっちゃってさ。手土産はまだ用意できてないんだけど、もし良かったらお礼に今度食事でもどうかな？」

そんな世界を容易に破壊し得る存在へと無邪気に語り掛ける少年は、この光景を前に心から安心したように笑っていた。

壁：ジエイド

学園西端の護陣塔——激しい水音が鳴り止まないその第一階層で、ジエイド・グレードは異形の召喚獣と対峙していた。

天井付近に現れた黒渦から濁流が流れ込み、上層へと繋がる階段を完全に沈め、塞ぐ。そのまま空間を満たすまで上昇するかと思われた水位だったが、開け放たれた塔の入口から水が流れ出ている事に加え黒渦から流入する水量も不思議と穏やかになった事により、現状は室内の半分に満たない高さを覆い隠す程度に落ち着いていた。

とはいえ陸棲動物の泳ぎでは逆らえない程に水流は激しく、もしシルバーが飛行能力を持っていなければ手も足も出ずに溺死していただろう。何も無い空間に水を喚び寄せて環境を作り変え、適正を持たない敵を一方的に殺めるその能力は大きな脅威だ。

（攻め方はどうする。ブレスは……使うべきではないだろう）

力任せの広範囲攻撃。若しくは反撃の手も届かない高々度からのブレス。ここが戦場であれば真つ先に取るであろう選択肢を除外し、慎重に敵を観察して効果的な攻め方を考える。敵は時間稼ぎに集中するつもりなのか、身構えるばかりで攻撃を仕掛けてくる様子はない。

クラスメイトの召喚獣であることに気を使い、手心を加えようという訳では決してない。相手が明確な人類の敵であることが判明した今、人間であるヘレシー本人は未だしもその召喚獣の生死を気にかけている余裕などない。

それでもブレス等の強力な攻撃を躊躇う理由は、ここがメイユールにとって歴史的、戦略的に重要な建造物の中であるからだだった。

護陣塔の防護壁は強力だ。今は入口部分に穴を空けられているものの、それ以外の防御機能は生きている。大量の水による圧力を物ともしない様子を見るに並大抵の攻撃では壁面に傷を付ける事すらできないだろう。

だが、シルバーは特別な召喚獣だ。その絶大な力が護陣塔の防護壁で防ぎ切れるのかどうか、確かめる方法は実際に攻撃してみる他に無

い。

（そうでなくとも、ここで力を使い過ぎてしまえば後に控えているヘレシーとの戦いで勝つ事などできない。消耗の激しい飽和攻撃ではなく、もっと効率的な……）

「あ、あのー……」

残すべき魔力を逆算しながら間合いを計っている目の前で、敵の召喚獣が大きさに広げていた触手を足下へと戻していく。攻撃を開始しないこちらの實力を見下げたか、眉を吊り上げた険しい表情もどこか気の抜けたものに変わっていた。弛緩と油断。この認識の甘さは大きな隙になるだろう。

「……もしかして、私の準備を待っていたりしますか？ それなら大丈夫ですよ。あまり時間を掛けていたらヘレシーさんの用事が終わってしまいます。それは貴方にとって……良くない事ですよね？」
ヘレシーの用事の完遂。それは邪神召喚が成され、世界が滅亡する事と同義だ。

悠長に構えている時間は無いと暗に伝えるその言葉が、水音で満たされた空間に緊張と重圧を生む。

息を吸い、シルバーの背を叩く。待機中も静かに闘志を滾らせていた相棒は、翼を一際（ひときわ）力強く羽ばたかせて合図に応えた。

「エンチャント・シャープネス」……シルバー、一気に叩くぞ！」

相棒に特性を付与し、短く指示を出す。一度大きく高度を上げたシルバーは両翼で宙を掻き、無防備に露出している敵の本体に向けて降下しつつ突進した。この戦場は竜種にとってあまりに手狭だが、高さを利用した加速によって瞬時に大空での速度にまで到達する。

「スプラッシュウォール！」

銀竜の突進。僅かでも相手の反応が遅れていればその身を両断できたであろう飛行速度。しかし敵は素早く魔法を行使し、正面に高圧の水飛沫を展開してみた。

目眩ましと力の受け流し、そして水による戦場の環境操作。人間同士の戦いでは絶大な効果を発揮する水魔法の一つだが——認識が甘い。その程度でシルバーは止められない。水流で僅かに狙いをずら

されながらも大爪は展開された水壁を容易く切り裂き、その奥で回避行動に移っていた敵召喚獣の触手を掠め取るようにして切断した。

すれ違つて壁際まで飛行したシルバーは正面に向かって羽ばたき、自らの勢いを殺しながら相手に追撃を加えるべく瞬時に転回する。

恐らく敵召喚獣は魔法を使って状況を仕切り直そうとするだろうが……この詰め時を逃す訳にはいかない。

「っ！ め、【メイルシュトローム】……！」

「【アクセラレーション】！ 喰い破れ、シルバー！」

敵の魔法により水面が局地的に膨れ上がり、中心に発生した大渦が複数の竜巻を伴いながら獲物を呑み込むべく襲い掛かる。

本来なら不可避かつ対抗手段の少ないその最上位魔法を強引な加速で掻い潜り、俺達は一筋の銀弾となつて巻き上がる水の烈風を突き抜けた。

視界が晴れた先には敵召喚獣の本体。後は真つ直ぐに爪を滑らせて体を切り裂くだけ。必殺を確信して正面を見据えていた俺の視線は、何かシルバーが身を捻つた事により大きくその角度を変えていく。頭上を影が覆つた。

——轟音。

振り下ろされた数本の触手の一本が先程まで自分がいた位置を力強く打ち据え、側面に重い一撃を受けて体勢を崩したシルバーの大爪が空を切る。命中しなかった他の触手が水面を割り、床にまで到達して亀裂を作つたのを見て、俺はシルバーが咄嗟に体を捻らなければ即死していた事を数瞬遅れで理解した。

俺を背に乗せたまま着水したシルバーは、翼で水を切りながら敵との距離を空けて入り口側の壁際で飛び上がり、空中で水を払い体勢を整える。俺は一連の動作で大きく消耗した騎乗用の魔導具に魔力を込め直しつつ、再び見下ろす形で敵と対峙した。互いに致命傷を与えられないまま状況が振り出しに戻ったが、得られた敵召喚獣の情報は多かつた。

強力な魔法を単独で連発する豊富な魔力。突進する銀竜の軌道を逸らせる程の力を持つ無数の触手と、それらを統括して自在に操る情

報処理能力。気味の悪い外観に反して全てが召喚獣として高水準であり、遠近問わず、魔法も物理も使い分けて立ち回れる隙の無い性能を有している。一個体として突出したその力は作戦の主軸として運用するに十分であり、間違っても時間稼ぎに使われるような存在ではない。

（方針を変える。全ての条件を都合良く満たして突破できる相手ではない）

護陣塔を傷付けず、余力を残し、素早く勝利する。それは最善の目標だった。一度矛を交えて現実的ではない事がよく分かった。

優先順位を考える。今最も失ってはならないのは時間だ。確実に邪教の儀式を妨害し、平和の敵である信者達を捕らえる。混乱と争いの芽を摘む。致命的な何かを召喚されてからでは遅い。

「……凄い力です。それに、お二人の絆も確かに伝わりました。これならヘレシーさんもきつと認めてくれます。だから、貴方はもう止まっていいんです。一度立ち止まって隣に目を向けてあげて下さい。貴方は、一人じゃない」

「俺はもう逃げない、そう言った筈だ」

遠回しな停戦の提案。先の攻防でこちらを油断ならない相手と見て、単なる力比べだけでなく搦手を交えた時間稼ぎに切り替えたのだろう。拙い交渉術ではあるが、人語を発音するという召喚獣としては珍しい長所を活かした策だ。今が人々の未来を天秤に乗せた極限の状況でなければ、その外見が多少なりともまともであれば、耳を傾ける者もいたかも知れない。

敵も焦り、手段を問わず時間を欲している。儀式が成るか成らないか、世界の命運を左右する分水嶺は恐らくここだ。

切り札を切る。竜族が最強種と呼ばれる所以を示す。後悔も責任も、明日を迎えられてから背負えばいい。

「お前は殿しんがりの役割を十分に果たして死んだ。ヘレシーにそう伝えてやるろう」

意識して勝ち気な言葉を選んだ。相棒の首を撫でると、溢れんばかりの力が躍動の瞬間を待っているのが分かる。

自信に満ち溢れていたあの頃のように不敵に笑ってみせ、俺はグレード家の伝家の宝刀を抜いた。

「シヨックシールド」、「ヒートバリア」、「マジックヴェール」……見せてやれ、シルバー！」

「グル……GYAAAAAAAAAAAAAAAAAAAAA!!!」

熱線。或いは閃光。

開かれた竜の顎から生まれたのは万物を無に帰す魔力の奔流。ただ同じ空間にいるだけで、幾重にも展開した防御魔法を貫いて大きな衝撃と熱量が身を襲う。

直撃すれば何者も形を保てないと確信できる絶大な破壊力。指向性を持った破滅の波。過去の戦場で万の敵兵を葬り去った銀の息吹が、行く手を阻む滂沱の水を蒸発させながら目標へと進んでいく。本来は一瞬である筈のその光景が、極度の集中状態によって脳内で引き伸ばされる感覚。

「は、「ハイドロシエルコート」！」

刹那を切り取ったような時間の中で、敵の反応速度も尋常ではなかった。ブレスを防ぐべく周囲の水を固めて高硬度の水殻を作り出し、そこに室内の水流を集中させる事で少しでも防壁を維持しようと抵抗してみせる。その行いは不変の未来を先延ばしにする延命措置に過ぎないが、最期の時まで時間稼ぎの役割を果たそうとする確かな気概が感じられた。ここにいないヘレシーとどのような契約を結んでいるのかは不明だが、その揺るぎない忠誠心は召喚獣として高く評価されるべき資質だ。

しかし俺達は二人いる。一方的な忠義ではなく、確固たる絆がある。シルバーを助け、その障害を取り除くのは契約者としてではなく家族としての俺の役目だ。

「アンチ・アクアマジック」

幼少期、顔合わせを兼ねた競技会で想い人が使っていた魔法。家に帰ってから目にも焼き付いて離れない彼女の姿を想いながら何度も練習した魔法。同じ魔法や戦技を覚えればその才能と努力に追いつけると本気で考えていた過去の自分が、今の自分に残した数少ない中

身のある実績。

その属性反発魔法を受けて、急激に縮小しながらも辛うじてブレスを防いでいた敵の水殻が波打つように揺らぐ。自分の力量では完全に打ち消す事はできなかつたが、今はそれで十分だった。

「あつ……」

甲高い音が響くと共に水の防壁が砕け散り、小さく発せられた声が掻き消される。敵召喚獣は丸めた触手で本体を覆って防御を固めたが、それごと飲み込むように致命の閃光が降り注いだ。

竜の息吹の直撃。敵対する生命の悉くを消し去ってきた最強種の威光は、今回も例外なくその力を発揮した。

幾重にも束ねられた太く長い触手の表面が泡立ちながら変質し、まるで幻想であつたかのように光の粒子となつて消えていく。強い光に付随する膨大な熱が空間を焼き尽くし、この状況からの回避と生還を不可能なものにする。

紛れもない強敵の、余りにも呆気ない最期。こうして敵対する事なく、味方としてメイユールのためにその力を振るつていたとすればどれだけ多くの命が救えたのかと考えずにはいられない。そんな口惜しさと共に、戦いが起きている原因であるヘレシーに勝利し、その道を正さなければならぬという強い使命感が湧き上がる。

視線の先では断続的に放射されるブレスが敵の体組織を崩壊させ、既に大部分の触手を蒸発させていた。間もなく敵の本体にも破滅の光が届き、戦闘が終わるだろう。

今度こそ勝利を確信し、次の戦いに思いを馳せる。体内の血潮に意識を向け、残った魔力の量を確認する。

その時だった。

(……？ 何が――)

先ず変化したのは室内の照度。敵を消滅させるべく放たれていたブレスが中断され、背中の俺を何かから庇うようにシルバーが水面付近へと高度を下げた。

胸騒ぎにも似た違和感。天井を隔てて上部から僅かに漏れ出ていた既知の狂気が、何倍にも膨れ上がったような感覚――否、それだけ

ではない。

一つ。いや、二つ。完全に未知の邪悪な気配がこの世界に姿を現わし、狂気の持ち主へと合流していた。

天地を塗り潰す穢れ。人類を複数回滅亡させて尚弱まりそうになり強大な悪意。そんな世界にとってこれ以上ない異物達が、よりによってこの国の中心に同時に顕現している。

「俺は……間に合わなかったのか……」

尋常ならざる空気。ただ真下にいるだけで何もせずとも息苦しく、体が震え、意識が奪われていく。

狂気と瘴気。空間を歪ませる程に濃い穢れ。死よりも恐ろしいものが護陣塔に張り巡らされた魔法障壁を貫通し、どろりと染み出すように天井から溢れ落ちてくる。ここは既に邪神の領域だ。

「あ、危なかった……もう少しで、逃げ帰らないといけなかったところでした」

敵の召喚獣が半壊した防御姿勢を解き、本体が姿を見せる。欠損した足を補充するように新たな触手が内側から現れ、粘液を撒き散らしながら身を振る。

仕留め損なつたという事実には何も感じない。頭の中にあるのは塔の上にいる存在への恐怖心だけだった。

「貴方達の力、本当に凄かったです。でも、私もこの戦いで負ける訳にはいかないんです。ヘレシーさんの召喚獣になって、初めて単独で任された仕事なんです。ここで失敗したら……失望されちゃいます」

ここで気付いた。絶えず水を吐き出していた黒渦が放水を止め、天井と壁を完全に覆い尽くすまで拡大していた事に。

「人間って水中で呼吸できませんよね。ちよつと狡ずるいかなと思つて水位を加減していたんですけど……ごめんなさい、私も嫌われたくないんです。もう天井まで沈めます」

堰を切ったように巨大な黒い渦から大量の水が流入する。超質量を持った水の壁が全方位から迫り、まともに抵抗する事もできないまま押し流される。まるで海の一部を切り取つて召喚したような圧倒的な光景。

「貴方は挑戦者としての役割を十分に果たして死んだ。ヘレシーさんにそう伝えておきます。……なんて」

先程のこちらの発言への意趣返し。そんな敵の言葉遊びに反応する時間は残されていなかった。

空気に触れていられたのは一瞬。水の壁同士がぶつかり合った強い衝撃を受け、俺は窒息するよりも先に意識を失った。

人が望んだもの：

「う…………ぐあ…………ううう……………！　　つ、あああああああつ！！」

西の護陣塔。その二階層。

この世界にとつて考え得る限り最大かつ最悪の穢れを一箇所に詰
め込んだ邪悪の巣窟に、大きな呻き声が響く。

脈動する不浄な血肉の柱に四肢を埋め込まれ、腹部に接続された管
のような器官から強制的に穢れを流し込まれているのは神聖なる女
神の使徒。

隣には『母胎』、背後には『子飼い』、目の前には『尖兵』の異常種。
絶望を越えた絶望の中、抵抗する力を失って磔はりつけにされた天使が困ま
れ、嫩なぶられ、一方的に苦痛と屈辱を与えられていた。

「なんか、こうしてると僕達が悪者みたいだね」

「ハア、ハア……………つ、そう、だ。ガキ。少しは客観的に……………つ、物事が
見えて、きたじやねえか……………いい子だ……………！」

『驟驟溘溘d 縛縛九→蜃蜃ヲ蛻蛻? r 謗謗イ螂螂イ縛縛唎唎k』

「へっ……………やれるもんなら、やってみやがれ……………この腐れ肉団子ども
が……………つ！　　うぐ……………つがああ”あ”あああああッ！」

血肉の柱から突き出た太い管が翼徒の露出した太腿を貫き、抉えぐるよ
うに蠢いて内部の肉を掻き回す。十分な苦痛を与えた後に管が抜き
去られると、途端にその穴は塞がって元の白く滑らかな脚へと形を取
り戻していった。

もう己を治癒する力など残っていない筈の翼徒の傷が、誰が何をす
るでもなく再生していく。この世界にいる殆どの人間が願い、望んで
いる安寧への想いが、清く善なる神への信仰が、同じ性質を持つ彼女
に僅かながらの不死性を与えていた。

「ハ、ハ、は……………！　　見ろ、どうやらこの世界の人間は俺の味方らしい
……………！　　望まれてねえのは、消えるべきなのはテムエらの方なんだ
よッ！」

『谿谿コ縛縛』

「殺せるか。人が望み、人が信仰する善神の徒である俺を。人を愛し、

人に幸福を与えるべく存在しているこの俺をつ！」

「あーはいはい。悪いけど今ちよつと急いでてさ、そういう露骨な物言いに一々構ってあげられる時間が無いんだよね。下から凄いい水の音がしてるし、なんだか塔全体が軋んでる気もするし」

「……いや、いいんだ。お前は何も悪くねえ」

少年はまだ外部からの言葉に耳を傾けられるだけの自我は取り戻せていないが、今回の接触によって少しずつ、確実にその視野を広げている。

彼の反応からそうした変化を読み取った翼徒は、身を襲う激痛に耐えながらも笑顔を作ってみせた。

「ガキ、安心しろ。俺は不滅……なんて事はないだろうが、どうやらもう少しだけ保つらしい」

「ふーん？ でもさ、その状態で傷が治っちゃうのって逆に辛いんじゃないのかな」

「優しい子だ。だが心配すんな、お前の苦しみに比べりやこの程度何でもねえよ。人間が神を必要とする限り、その想いが俺を支える。俺は俺でいられるんだ」

「人間が神を必要とする限り、ねえ。……あ、そうだ」

翼徒の話聞いて何かを思いついたように手を打った少年が、隣の守護獣へと向き直ってその体に触れる。楽しげに口角を上げながら濡れた肉塊へと話し掛ける気安さは、本来の双方の関係上有り得ないもの。

「僕、いいもの持ってるよ。ハッピー、この前買ったあれ出してくれない？」

『縛ゆ？辟。闇？▲縛??ヲ窶ヲ閻御シク縛ウ縛励※雋キ縛縛溢d縛、縛ア縛呐。窶ヲ窶ヲ？』

「え？ いやいや、あれはいい買い物だったから！ お買い得だったからー！」

『縛ウ縛◇……』

少年の頼みを聞き入れた『尖兵』が空間の裂け目から取り出したのは一振りの大鎌。金属部分が中程で折れ、半端な長方形の刃体が長柄

の先端に固定されているだけの使い所が限定された武器。

それは魔術的效果すら付与されていない安価な再生品であったが、ただ一つ、作り手の強い思いが込められていた。

「これ、神様を否定しながら作ったらしいから試してみようよ。結構な恨みが込められてるんじゃないかな。連勤だったみたいだし」

「……あのな、ガキ。俺が永く苦しまないよう気遣ってくれるのは嬉しい。でもな、これだけ信仰が偏った世界でそれを否定してる人間なんて……?!? いるのか……」

「いたんだよね。僕も驚いたよ」

翼徒は掲げられた大鎌の中に見た。強い憤怒と共に込められた神への怨嗟を。

人を導く神の存在を、他でもない人自身が否定して製作した武器。こうして今の状況を的確に解決するための鍵を事前に入手していた事からも、邪神の眷属達による一連の作戦の計画性が見て取れる。

「……呪いは一人分か。その割に強力みてえだが、それでも俺はそこそこの階級だ。もし中途半端な殺り方をしてみる、この世界じゃすぐに生まれ直しちまうかも知れねえな? そしたら俺はお前を救い出すために何度でも戻って来る。これは俺が主神の影響下から離れて、初めて見つけた自分自身の願いなんだ。……なあガキ。今ある全ての痛みと苦しみから解き放たれて、人の精神では到底処理しきれない量の愛情と快楽を注がれ続けながら永劫の時を多幸福感に満たされて生きないか?」

「うわあ……最後だと思ってとんでもない事言い出したね」

『霄才纏ヨ遞九r 遏・纏』

『纏輔▲纏輔↓豁サ纏ユ』

持っている価値観が大きく異なっているであろう翼徒からの言葉を受け、少年は苦笑しながら一步身を引いた。『母胎』と『子飼い』もそれに賛同して短く呪詛を吐いたが、人間と価値観が大きく異なるという点においては彼女達も同様だ。

この場において少年と同じ価値観を持っているのは、群ではなく個としてこの世界で始まり直した彼の家族だけだった。

「で、この鎌はどうか。使えそう？」

『蛻？ 縲峨 縲ゆ □ 縲梧ア昴？ 譯医 → 縲芽ウヲ 縲励※ 縲ソ 縲医 ≧』

「うん、そうだね。じゃあ……はい、ハッピー」

『縲医？ ∫ ア √ ⊥ 縲呐。 婁ヲ 婁ヲ？』

「だって僕の方じゃ物理的に落とせないかも知れないし。得意だったでしょ、草刈り」

『……』

草と首とは違う。そんな口を衝いて出そうになった言葉を飲み込んだ『尖兵』は、溶けた全身を混ぜ返すように回転させ、腕が密集している部位で少年から鎌を受け取った。

同郷の者と比べれば小柄な、それでも人間から見れば十分に巨体である彼女が持てば大鎌も小枝のよう。何度か振り下ろして刃が最適に入る角度を確認すると、そのまま肉柱に繋がれた翼徒の首へと押し当てる。

「ガキ、絶対に諦めるなよ。お前はいつかそのすり替えられた世界から目覚めて、本当の意味で自由になれる日が来る。育った環境、出会った者、今まで当たり前に受け入れていた全てに疑問を持つんだ。最も信賴している相手を警戒しろ。今いるこの場所だって、本当は――」

『縲医 ≧ 縲』

乞いも抵抗もせず、最後の瞬間まで一人の少年の幸福を願った翼徒。

彼女が天使として言葉を紡いだのは、ここまでだった。

召喚学園の生徒だけど守護獣が異形すぎて邪教徒だと疑われています

【報告書】

邪教の幹部格であった元教員サヴァン・タレツジによる北の護陣塔への攻撃を合図にして、邪教徒による世界滅亡計画は最終段階へと移行した。数多くの召喚師が在席するヴァリエール召喚師学園の施設を狙った一見無謀にも見えるその計画は、入念な準備と数多くの協力者によって迅速かつ円滑に進行した。

邪教が企てた作戦の核は 西の護陣塔 (検閲により修正) の魔法陣を利用した邪神の召喚。

元教員サヴァン・タレツジによる大規模な陽動に加え、校舎の爆破や放火等で現場の混乱が極まる中、敵陣営の狙いを的確に見抜いて祭場へ乗り込んだのがヴァリエール召喚師学園一学年のジェイド・グレード及び同クラスの 西の護陣塔 (検閲により削除) であった。

彼等が突入した時、既に邪教は召喚の儀式を終えていた。しかし古の文献に記された方法を再現して呼び出されたのは、邪神ではなく一体の悪魔であった。邪悪な召喚術は確かに成立したが、邪教徒が望んだ結果にはならなかった。古い召喚方法の不安定性から、術者達の願いと異なる存在を召喚してしまったのだ。

世界を破壊する事が目的であった邪教徒は悪魔を問い詰めたが、悪魔は暴力によりこれを退けた。その後、祭場へ乗り込んできたジェイド・グレードと 西の護陣塔 (検閲により削除) に対して交渉を行い、甘言によって不平等を巧みに隠した悪魔の契約を迫った。当然二人はこれに反発。 西の護陣塔 (検閲により修正) が大きく損傷する程の激しい戦いの末、悪魔に勝利して悲劇を未然に防いだ。その際、悪魔は肉体を消滅させたが、禍々しい漆黒の翼だけはその場に残ったという。現在その翼は回収され、安全性を確認するために奴隷

を使った接触調査が行われている。

祭場や学園内だけでなく、王都内に潜んでいた者達も含めて邪教徒は全員が取り押さえられた。邪教の中で階級の高かった教徒の多くは、平和によつて力を失いつつある武家貴族の子供世代であった。これは元教員サヴァン・タレツジも同様である。争いと混乱のみに価値を求める歪み偏った考えを幼少期から親に刷り込まれて人格を形成した彼等は、その強い思想と信心によつてか我々とは別の現実を見ているようであった。精神鑑定の結果が待たれる。

何れにせよ悪魔は討伐され、邪教は事実上の解散となつて一連の事件は終息した。他の宗教団体の調査及び不穏因子の弾圧が行われる事も決定しており、王都はこれまで以上に安全かつ強固な大陸の中心として栄えていく事だろう。

メイユールに更なる繁栄を。

ニフィレリカ様万歳。



やあ、僕の名前はヘレシー！

小さい頃に呼び出した守護獣のおかげで召喚師としての素質を認められた僕は、今日からあの有名なカンガス地下監獄に収容される事になったんだ！

今は薄暗い檻の中で薄っぺらい寢床に腰掛けているところ！石と鉄に囲まれた冷たい雰囲気割には意外と寒くはないんだけど、薄着一枚だし靴も脱がされてるから夜になったら足元から冷えてきそうだね！

あの後ハッピーとその知り合いには一旦帰ってもらつて、ハイドラと協力しながら塔の汚れを水で流したり壊れた場所を掃除して誤魔化そうと頑張っていたんだけど、その途中で騎士っぽい人達が突入してきて捕まっちゃったんだよね！事情があつたとはいえ神話に出てくるような建造物を傷付けたのはやっぱり不味かつたみたい！人助けの結果だから後悔はしてないけどね！

ちなみに床に転がってた黒装束の人達（邪教つていう集団らしい）

も一緒に捕まったよ！ 大部分の人が目が覚めてから変な言語で喋りはじめたり頭を壁に打ち付けたりしててビックリしちゃった！
見ている今後の人生が心配になる奇行っぷりだったけど、でもまあそっちはいいんだ！

問題なのは理性的な振る舞いをみせた残りの数人で、倒れる直前に見たハッピーの姿を思い出しながら壁に血で絵を描いたり、僕を仲間だと思い込んで話し掛けてきたりするんだよね！ もう迷惑とかそういう次元を通り越してて笑っちゃった！

この人達、悪事を妨害された腹いせに僕を道連れにしようとしてない？ レティーシアみたいに忘れてくれてた方がよっぽど良かったよ！

「司教様。私は今、とても感動していますっ！ 意識を失う直前に見たあの禍々しい眷属の姿。あれぞ不浄不転の世界の敵です……！」

しかも何故か同室にそっちタイプの女の人がいるんだよね！ よく見たらこの人、前に王都で買い物した日に路地裏で会った女性なんだけど、顔見知りだからって男女同室にするなんて事ある？ 前に会った時と違って変に興奮してるのも怖いよ！

檻の外にいる見張りの人が真剣な顔付きで会話の内容を記録しているし……これは多分あれかな、僕がうっかり彼女達の仲間だって言い間違えるのを待ってる感じかな。僕の味方はどこ……？

狙い通りの失言をしてあげるつもりは一切ないけど、ハッピーについての認識は改めてもらわないとね！ 僕の守護獣は品行方正で清潔白！ 貴族にも存在を認められている召喚獣です！

「違う。彼女は普通の女の子だよ。少し他人と体の作りが違うだけで、すごく優しい子なんだ。世界の敵なんかじゃない」

「……？ ……!! そう、ですよね……まだ計画は終わっていませんよね……！」

「あの、話聞いてた？ 僕の守護獣は——」

「私、心のどこかで諦めてしまっていました。どこかやりきったつもりになって、もう最後なのだと、全てが終わったのだと思っていました。でも、諦めなければまたいつか好機は巡ってくる、そういう事な

のですね……！ はい……！ いつか必ず再起し、共に世界を滅亡させ……いえ、救済しましょう！」

目に涙を溜めながら迫ってくるのやめてもらっていい？ っていうか絶対僕の話聞いてなかったよね。

そういえば前に会った時もこんな感じだったなあ。人間の本质っていうのは牢屋に入ったくらいじゃ変わらないって事なのかな？

見張りの人が深刻な表情で女性の言葉を書き記しているのが気になって仕方がないよ！

「禍々しい召喚獣……邪教の司教……再起する……やはりそういう事か」

「その見張り。私達は改心し、世界を救う事に決めました。早くここから出しなさい」

「黙れ」

「哀れですね。ですが、それも仕方のない事でしょう。司教様の眷属の姿を見ていない貴方には分からないのです。あの流動的に混ざる血肉！ 無数に寄せ集められた皮を剥がれた人間の部位！ 混沌を体現したあの姿こそが世界を破滅……ああ、いや、世界を救ってくれるアレなのです」

「血肉……人の体の寄せ集め……他の邪教徒が描いた絵と外見の特徴が一致するな。やはり化け物を使役しているという報告は事実だったか。……『シアワセ村のヘレシーは悍ましい異形の召喚獣を使役しており、捕らえた他の邪教徒の発言からも同組織に所属していた事は確定的である』と。これで今件について口を挟んできている勢力も認めざるを得ないだろう。おい特級犯罪者ども、二度と元の生活に戻れると思うなよ」

「あ、司教様、お体は冷えていませんか？ どうぞ私の服をお使い下さい」

「……」

拝啓、母さん。お元気ですか。

僕は今、守護獣が異形すぎて邪教徒だと疑われています。

了

会食

「おじやましまーす」

『失礼しますア遺シ縫励』

「……いらつしやい」

「どうぞー」

やあ、僕の名前はヘレシー！ どうやら裏で色々と動いてくれていたらしいレティーシアとジェイド君のおかげで地下牢から出してもらえた僕は、その騒動で保留になっていたハッピーの知り合い達との食事会を開く事にしたんだ！

今日はその当日！ 前にハッピーを助けに来てくれた時のお礼も兼ねてこつちが場を準備して持て成したかったんだけど、彼女達が西側の塔（護陣塔っていうらしい）に来てくれた時の影響が思ったより大きかったのを見て、向こうが気を遣って隠れ家的な空間に招待してくれる事になったんだよね！

寮の自室に開いてくれた門を通ったら、真っ暗なんだけど不思議とどこまでも見渡せる空間が目の前に広がったよ！ ねつとりとした黒で塗り潰された世界の中心に純白のテーブルが置かれているのが映えるね！

「いやあごめんね。本当はもっと早く会いたかったんだけど身の回りの事で忙しくってさ」

「気にしなくていい。人間はそういうの、ある」

「よく言うよ、ずっとソワソワしてたクセにさ」

テーブルを囲うように置かれた白い椅子に着席していたのは、ハッピーの知り合いの『母胎』さんと『子飼い』さん！ これ、最初に聞いた時は勝手に変な呼び方をされてただけかと思ってたんだけど、どうやら本名（？）なんだってさ！ なんとというか、こう……独特なセンスでいい名前だと思うな！

人間の食性に合わせてくれるのか、今日はふたりともあの大きくて肉々しい姿じゃなくて小さめの人型になっているね！ 滑らかな黒のツインテーブルが可愛い落ち着いた雰囲気の子が『母胎』さんで、

同じく黒色のショートヘアが元気な印象を与えつつもどこか知的に見える女の子が『子飼い』さんだね！

どっちも人間基準ではまだ幼さの残る子供の姿なんだけど……本当に擬態が上手いなあ。ねえハッピー？

『……』

「あ、無理しなくていいよ。誰にでも得手不得手はあるもんね。うん……」

「肌が足りてない。顔も多過ぎる」

「切り離したらこういう能力も失っちゃうんだね。面白いなあ」

ハッピーが母さん以外からこうやって駄目出しされてるのは新鮮だなあ。僕じゃ彼女の体の使い方は理解してあげられないから、感覚が似てるひとの話聞けるのは貴重だね！

早速席に着いて歓談といきたいところだけど、まずは持ち込んだ物を渡しちやおう！

「今日は招待してくれてありがとう！ これ手土産。ちよつと食べ物のお好み分かったから、綺麗な花を選んだんだ。受け取ってくれる？」

「勿論。ありがとう」

「わあ、ありがとう。こっちにも花はあるよ。人間から贈り物を貰うなんて初めてだからドキドキしちゃうね」

手土産に選んだのは花屋さんで売ってたアエニラのブーケ！

前にレティーシアが屋敷で咲いてたって言ってた花だね！

花に込められた意味なんかは知らないんだけど、明る過ぎない落ち着いた赤色がふたりに似合うかなって思ってたよ！ 今は擬態しているから少し見た目の印象が変わっているけど……うん、可愛らしさと強さを併せ持った彼女達にピッタリだね！

「……そんなに心の中で褒められると照れる。この体、気に入った？ なら帰りにいくつかあげる」

「本当にね。そんなに褒めても眼球くらいしか出せないよ。いる？」

「手土産を喜んでもらったのは嬉しいけど、部屋が一杯になりそうだからお返しは遠慮しておこうかな。……座つてもいい？」

「うん。テーブルに人間を観察して用意した食べ物や並べてある。色々と話したい事はあるけど、まずは行儀や礼式を気にせず自由に食事を楽しんで欲しい」

「ありがとう。約束した時からずっと楽しみだったんだ」

『螟^失ア^礼道^し纏^ま励^す』

着席してテーブルの上を見ると、白いお皿に載ったステーク(?)やパン(?)やサラダ(?)やケーキ(?)がとっても美味しそうに盛り付けられて並んでいたよ！ 血を薄めたような何とも言えない色をしているお茶(?)もいい香りで、何一つ既知の物が無いワクワク感！ 味から食感まで全てが楽しみだね！

食器も普段使ってる物に近い形をしているから扱い方を練習しなくてもすぐに食べ始められそう！ 先ずはお茶を一口……うん、おいし……おいしい！ ステークは……あ、これはまだ動いてる感じかな？ 鮮度がすごいなあ！ サラダの植物達も極彩色でありながら光と影をどんどん吸収してる！ 食感はサクサクしてて……いや、違う。シヨマシヨマ、かな。シヨマシヨマとした勇ましくも臆げな食感！

肝心の味だけど、どれもちよつと信じられないくらい美味しい！

既存の概念を何周も通り越した先にあるような美味しさ！ 頭の中が弾けるみたいに多幸感が溢れ出して、脳が次の一口を求めて自動的に手を動かしてるのが分かるよ！ 飲み下す度にどんどん体の感覚が鋭くなって、味が鮮明に、より深くどこまでも広がっていくね！

一口、また一口と食べ進めていくにつれて美味しさと満足感が加速度的に増加して行って、脳の許容量を超えた悦びが全身に駆け巡って意識を塗り潰していくよ！

多分だけど、どれか一皿でも持って帰ったら争いの原因になるだろうね！ そのくらい美味しい！



「——いやあ、美味しかったよ。ありがとう！」

『緋^ご秘^馳ヲウ襍^走讒^様控^でニ緋^た励^{なん}◆縲^だゆ→縲^懐薙^か□緋^い九^味∴∴緋^が九^{しま}@』

「喜んで貰えて嬉しい。これ、全部私が目にしたから」

「『母胎』さんが？　すごいすごい！　料理ができるひとつで憧れちゃうなあ」

「ふふん。ちなみに、『子飼』は全然駄目だった」

「それ今言う……？　いいじゃん、私は他の事に能力使ってるの！」

料理を食べたら勝手に溶けて消えるお皿に驚きつつも食事を終えて、お茶っぽい液体を飲んで一息ついたよ！　美味しい飲み物もそうだけど、仲の良さそうなたりの会話を聞いていると心が温まるね！

こんなにも素晴らしい場を設けてくれたふたりには幾ら感謝してもしきれないよ！

「わざわざ手間を掛けさせてごめんね。本当ならこっちがお礼しないといけない立場なのに」

「いやいや、礼だなんてとんでもない。あれは私達の敵だからね。寧ろ迷惑をかけてしまって申し訳ないくらいだよ」

「敵……ああ……敵、ね。……実はその事でさ、一つ話があるんだよ。相談というか、質問というか」

「ん、何かな？　私は特にあいつらには詳しいから何でも聞いてよ」

丁度いい話題になったから、少し前から気になってた事を聞いてみようかな！

ハッピーに目配せしてから『子飼』さんに体ごと向き直ると、その間も彼女は上機嫌に微笑みながら僕の言葉を待っていてくれたよ！

「この前、助けに来てもらった日に僕達が戦ったあの白い翼の女性つてさ、本当は悪魔なんかじゃなくて———天使、だったんだよね？」

僕達は天使を……倒しちゃったんだよね？」

「うん。そうだけど?」

「あ、やっぱりそうなんだ」

天使。あのお伽噺や教典によく出てくる善良な神様の遣い。人に寄り添い、人の幸せを願う慈愛の徒。

あの時、邪教の人達に呼び出された悪魔だと僕が思っていた相手は、実はそういう存在だったらしいんだよね! 人生本当に何があるか分からないなあ!

地下牢から出してもらった時にレティーシアが言っていたんだけど、むかし国内のどこかで好奇心旺盛な人達が邪悪な存在を呼び出した事があって、今回の騒動はその時の記録を何らかの手段で手に入れた邪教の人達が当時の儀式を再現しようとしたのが発端らしいよ! それに失敗して天使が出てくる理屈はよく分からないけど、邪教の人達が儀式の再現に失敗したっていうよりは、昔に邪悪な存在が召喚された事自体が偶然だったんじゃないかと僕は思うね! 昔の魔法とか召喚術って安定性無かったみたいだし!

まあ理由はどうあれ、僕達は天使をやっつけちゃったわけ! でもそれは別にいいんだよ、ハッピーの敵だったから。

問題はその後なんだよね。

「問題はその後……? もしかして援軍が来たりした? あいつ、主神との繋がりを保てないような顕現の仕方をしていたし、元の世界に要請なんかは出せなかった筈だけど」

「すぐ行く。私が全部穢してあげる」

「あ、違う違う。追加で天使がやって来たとか、そういう事じゃないんだ。ただ、本人がちよつとね……」

「本人?」

「これは見てもらった方が早いかな。もういいよ、出てきても」

僕が声を掛けると、すぐ後ろの何も無い空間から光の柱が降り注いできたよ! 僕が光魔法を使ったみたいに見える格好良いね!

その光の中からゆっくりと舞い降りてきたのは、白を基調とした法衣みたいな薄手の服を身に纏った長身の女性! 艶やかな銀の長髪が光を反射しながら美しく靡いてるのと、徐々に高度を下げながら閉

じた目を開いていく仕草からは上品かつ厳かな雰囲気を感じるね！
よく知らない人が見たら教典に出てくる女神様と見間違えちゃうかも！

着地すると同時に完全に目を開いた彼女は、すぐに『母胎』さんと『子飼い』さんを見つけて僕の体を引き寄せたよ！

「——遅えよ！ ガキ、無事か!? 早く俺の後ろに隠れろ！ おい、『尖兵』も何ボサつとしてやがんだ、凶体ブケエんだから壁になれ！ ガキが変なモンに影響されたらどうする!?!」

「うるさ」

「なにこれ」

そう、現れたのはあの日に戦った天使そのひと！

相変わらず神聖過ぎる外見から放たれる荒々しい口調のギャップが凄いんだけど、戦闘中だけじゃなくて普段からこうみただから個人の性格なんだろうね！

ちなみに彼女にはちゃんと名前があつて、フィリエルさんっていうらしいよ！ ハッピー達は個体名が無いっぽいからフィリエルさんも同じかと思っていたんだけど、どうやら天使は違うみたい！

一度話し合いをしたハッピーとは面識があるからいいとして、『母胎』さんと『子飼い』さんは彼女を見たらもつと驚いたり警戒するかと思つてただけど……意外と淡泊な反応だね！ 最初に一瞬顔を顰めただけで、今は擬態すら解かずに椅子に座ったままフィリエルさんの様子を観察しているよ！

「なんだろう、女神の使徒……つて呼ぶのはもう適切じゃないね。性質が変わってしまったてる。成り損ないの……ゴミ?。」

「すかすか。何も無い。興味が湧かない」

「……口の悪イ奴らだ。相変わらずムカつくな」

『緋医^{ええ}∞^{……}窶^{……}ヲ』

『母胎』さんと『子飼い』さんから散々な評価を受けたフィリエルさんが悪態をついているけど、天使に詳しい『子飼い』さん達が言うからには本当にそうなんだろうね！

あの時、草刈り鎌でフィリエルさんの使命や繋がりを断ち切ったの

と同時に『母胎』さんがドス黒い何かや血肉を飽和するまで注ぎ込んで自壊させたんだけど（天使には墮天させられないようにそういう仕組みがあるらしい）、やっぱり武器屋さん一人の恨みじゃ足りなかったのか不死性だけ少し残っちゃってたんだよね！

とはいっても黒く染まって抜け落ちた翼はもう生えてこないし、神聖な力も完全に失ってハッピーの血跡すら浄化できなくなってるし、イメージとしては単純に大量の魔力を持つだけの一般人？ 一般召喚獣？ 一般魔物？ そんな存在になっちゃったって感じかな！

「その認識で大体合ってるよ。そいつはもう私や『母胎』と同じ次元にいない。私達に何の影響を及ぼす事もできない。人間でもないし、存在として心底どうでもいいかな」

「そうなんだ。よかったよ、争いの種にならなくて」
「心配ならちゃんと最後まで擦り潰してあげる。持って帰って皆で燃る」

「そこまでは別にいいかな。ハッピーの敵になり得ないのなら僕としては望む事はないよ。それに本人と話してみても分かったけど、とても優しくて真っ直ぐな良いひとだしね」

「ガキ……」

僕の話聞いたファイリエルさんは一瞬驚いたように目を見開いて、その後すぐに心から嬉しそうに微笑んだよ！ 絵画になりそうな神々しい光景だね！

何かに祈るように胸に手を当てるまではよかったんだけど、そのまま感極まったように抱き着いてくるのはやめてもらってもいい？ 何も見えないから。

「いいんだ。今の俺が何者かなんて関係ねえ。俺は俺自身の願いを叶えるために——お前を苦痛から解放するためだけにここに居るんだ。ガキ、お前はもう十分に頑張った。後は全部俺がやってやる。これからは愛情と安寧の中で幸せに生き続けるんだ。俺が不変の閉鎖空間を用意する。他に何も考えられなくなるまでずっと愛して、祝福して、気持ち良さと多幸福感で満たし続けてやるからな。もう立ち上がった

たり、言葉を話したり、何かを考えたり……そんな重労働は必要ないんだ」

「なんか不快」

「やっぱり人間の進化を阻害してるのってあっち側だよ。苦痛と狂気で刺激するやり方が正しい」

フィリエルさん、間違いなく善い存在ではあるんだけど、度々こうやって変なテンションになっちゃうのが玉に瑕なんだよね。落ち着いている時は言葉遣いに反して本当に人格者なんだけど……天使として持っていた人間に対する母性や慈愛心みたいなものが残ったりしているのかな？

一応加減してくれているのか抱き締められても苦しくはないんだけど、それでも全然抜け出せそうにないね！ 体力には自信がある方なんだけど、こうしてるとこの空間で一番非力な種族なんだって否が応にも思い知らされるよ！

ハッピーの知り合いと顔を合わせる機会なんて中々無いんだし、話が進まないからそろそろ離してほしいかな……と思っていたら、テールを挟んだ向こうで『母胎』さんの気配が膨れ上がっていくのを感じたよ！

『隧^愈ア縫^目ヨ騾^に比^障クユ縲^疾る^去る^れが鬲』

話が進まない事に苛立つたか、擬態を解いたらしい『母胎』さんが体の割れ目から粘肉と共に太い管を突き出してフィリエルさんを弾き飛ばしたよ！

咄嗟に僕から離れたフィリエルさんの反応速度も、あの衝撃をモロに受けて体がバラバラになっっていない防御力も流石は元天使だね！

新鮮な空気を吸って椅子に座り直した僕は、遠くに転がっていくフィリエルさんを見ながらお茶みたいな液体を飲んで一服したよ！

彼女はなんかも……好きに生きてくれたらいいと思う！ 何もしてないのに急に異世界に呼び出されて、翼を挽^もがれた上に元の世界に戻れなくなっただって考えると普通に可哀想だよ。本当に祝福が必要なのは彼女の方だよ。

人間が好きみたいだし、暫くは色々な国を旅して気分転換するのも

いいんじゃないかな。

宇宙貴族

「あつ。……おはよう、ヘレシー。いい朝ね」

「おはよう……？」

「やあ、僕の名前はヘレシー！ 昨晚部屋に遊びに来たレティーシアにボードゲームで再戦を申し込んで見事にボコボコにされた僕は、その後流行りの戦法や基本的な考え方を教えてもらいながらゲームへの理解を深めていったよ！ やっぱり一人で考え込むより先人に知恵を借りた方が効率的に上達できるよね！ 勝ちたい相手に教えるを乞う事についての葛藤はあったけど、先ずは彼女に並ばない事には話にもならないから大事な一歩を踏み出す事にしたよ！ 高過ぎる目標を達成するためには段階的な成長が必要！

で、途中までは良かったんだけど、最初はベッドに腰掛けていたレティーシアが時間が経つにつれて布団を抱き寄せたり横になったりどンドン姿勢を崩していったって最後には寝ちゃったからゲームの勉強会は自然とお開きになったんだ！ 仕方が無いから前みたいにレティーシアを壁際に転がして僕も寝ただけど、目が覚めたら隣に誰もいなかったんだよね！

「どうやら先に起きたらしい彼女を視線で探すと、壁に掛けていた僕の制服を手を取っているのを見つけて……これどういう状況？」

「ごめん、それ何してるの？」

「さっき同じ寸法の新品を持ってこさせたから、貴方が寝ている間に親切心で交換してあげようとしていたところよ。親切心で」

「着心地が変わりそうだからやめてね」

自分の行動に絶対の自信を持っているかのような堂々とした物言いは結構なだけどき、目が合った瞬間に「あつ」って言ったのは忘れてないからね？

布団を勝手に持って帰ったであろう時は必死に話を誤魔化そうとしていたのに、今は隠しもせず堂々と企てを告白するなんて……僕達も少しは打ち解けたって事なのかな。

しぶしぶ僕の制服を元に戻してからもう一度布団に包まって不貞

寝しようとするレティーシアを尻目に二人分のお茶を淹れていると、
なんだかガチャガチャと廊下が騒がしくなってきたよ！　これは多
分あれだね、お貴族サマとその護衛の人達が歩いている音だね。寮で
は定期的に聞こえてくる環境音だよ！

——ザッ。

あ、一斉に立ち止まった！　僕の部屋の前で！　朝っぱらから不思議だね！　アハハ！

——ガチャ。

「ジェイドだ。ヘレシー、お前が討伐した悪魔の件で話がある」
「あのさあ……」

唐突に部屋に入ってきたのはジェイド君！　ずっと休んでいたのに最近よく見るね！

扉の鍵は新品の制服を受け取る時にレティーシアが解錠したんだ
ろうけど、いくら相手が庶民だからってノックもせずにドアを開ける
のは良くないと思うよ！　せめて人を引き連れている時くらいは上
に立つ者として模範的な行動を心掛けてね！

「む。誰だ、そこで寝ている奴は。お前の私生活に口出しするつもり
はないが、今からの話は内密にしたい。悪いが部外者は外に——」

「部外者ではないわ。私よ」

「ああ、レティーシアか。それなら……。………………。………………?」

——レティー、シア……??　!?　レティーシア!?

布団の中から顔を出したレティーシアを見て固まっちゃったジェ
イド君は、どうやらフィリエルさんについての話を聞きたくて部屋を
訪ねて来たみたい！

ちなみに彼の認識が事実と異なっているのは当然僕がそう報告し
たからで、事件の直後は本当に邪教が召喚した悪魔を倒したと思って
いたんだから仕方がないね！

とはいえ事実を知った今でもその報告内容を変えるつもりはない
よ！　いくら学園での成績に興味がない田舎者の僕でも、流石に「邪
教が召喚したのは天使でした。その天使を仲間と困んでやつつけま
した」とかいうぶっ飛んだ主張をしたらどうなるかくらいは想像でき

るからね！ 割と強引に地下牢から出してもらった身としては、これ以上この件でレティーシアやジェイド君に迷惑を掛けたくないよ！

確かに天使と一度争いはしたけど、本人は今も楽しそうに生活しているから許してほしいな！

「なん……何故……何故レティーシアがここに？ ヘレシー？ レティーシア?? ——ッ!? まさか、そういう事、なのか……!?!」

「いいえ。それは違うわ」

「そうか……そう、だよな。まさかクレセリゼ家の次期当主が、有力な召喚師とはいえ庶民であるこいつと結ばれるなんて有り得ない！

あつていい筈がない！」

「ただ昨夜を共にしただけよ」

「?!?!?!」

レティーシアさあ……そうやって変な切り口で元婚約者を^{から}押^か搦^かうのは^あめ^たわ^らな^い方が^あい^いと思^うよ。ちよつと反応が面白いのは分かるけど。?????

これ、外にいる護衛の人達に聞こえたりしてないよね？ たった一度の笑いのために後から大問題になるのは勘弁してほしいよ！

「——っ！ ……ッ、……ッ!! フー——、……こういう時、昔の俺なら我を忘れて怒り狂っていただろう……ッ！ だが、今の俺は違う

！ この状況で俺がやるべき事、それは男として過ちを犯したヘレシーに詰め寄る事ではなく——共にこの国を守っていく貴族として、レティーシアの軽率な行動を叱る事だ！」

「……意外に冷静で驚いたわ。昔からそうだったなら、婚約解消も少しは先延ばしになっていたかも知れないわね」

「!? 本当か!? そうだ、俺達はきつと今ならやり直せる。気付けてよかつた。さあ、今からお義父様に婚約の件を再考してもらいに行こう。一緒に説得すればきつと分かってくれる！ 大丈夫だ、レティーシアへの想いなら負けはしない！」

「ヘレシー、きついわ。助けて頂戴」

「お茶、三人分でもいい？」

貴族の後継ぎ事情なんて僕に言われても分からないから、二人のご

両親も交えてじっくり話し合えばいいんじゃないかな！ 少なくとも僕の部屋で朝から話すような内容じゃないよ！

何度目かの事情聴取にやって来たっぽいジエイド君はともかく、レティーシアがここにいる理由は昨日のボードゲーム勉強会の延長なんだから、着替えやお風呂の事もあるだろうし一旦家に帰った方が……いや、待てよ……？ ボードゲーム……？

……ジエイド君、どのくらい強いんだろう？

僕は始めて間もないとはいえ超上級者との対戦経験は豊富だし、昨日コツを教わったのもあってもう初心者は脱していると思う。親世代の強い人とやっても勝てるらしいレティーシアが強過ぎるだけで、同年代の他の人とは案外いい勝負ができたりするんじゃないかな？

勝てないにしても、レティーシアと対戦するよりはもう少しこう……ゲームとして成り立つ気がするんだよね！ やっぱりこういう遊びって実力が近い者同士で勝ったり負けたりするのが面白いと思うからさ！ レティーシアと遊ぶのも楽しいんだけどね！

「あの日から俺は生まれ変わった……いや、もう一度初めから歩き出したと言わなきゃだろ。少し勇み足になってしまったが、ようやくここまで来た。歪いびつな部分も残っているだろうが、多少は男として見られる形になったんじゃないかと思う。全ては俺がグレード家を背負っていくために必要な事であり、同時に——レティーシア、君に相応しい男になるために必要な事でもあったんだ」

「歪な部分の主張が強いわ」

「お茶、ここに置いとくね。ジエイド君も座りなよ。僕に話を聞きに来たんでしょ？」

「貰おう。ああ、話を聞くためにこの部屋を訪ねたのは間違いない……！ だが、それよりも遥かに大きな問題が起きてしまっているだろう!! お前も当事者だぞ、ヘレシー！ レティーシアがこの国の未来にとってどれだけ重要な女性なのか理解できていない訳ではないだろう！ お前がしたのは各派閥の力関係を揺るがしかねない政治的脅迫だ！ 遊ぶなどは言わん、だが相手は選べ！」

「遊び。……そう、私とは遊びだったのね」

「うん、実はそうなんだよね」

もう色々と面倒だからレティーシアの方に話を合わせちやおうつと！ どうせ彼女の事だから本当にマズい事になる前には止めてくれるだろうし、ちよつとくらい悪ノリしても大丈夫でしょ。

「でもさ、遊びの何が悪いのかな？ これだけの美人が一人で夜を過ごすなんて世界の損失だよ。余っているんだつたら使える人が使つてあげなきや」

「な……!? お前……ッ!!」

「憎いかな？ 悔しいかな？ だったら彼女を救い出してみなよ。その機会をあげる」

半開きのまま棚に保管してあった大きな箱を取り出してテーブルに置くと、ジェイド君は何も言わず眉間に皺を寄せてこつちを睨んできたよ！ この反応は……やはり知っているね？ 露天商のおじさんが王都で大流行していると言っていたこのボードゲームの事を……！

「さあ、彼女を賭けて勝負をしようか。こんなゲームで、と思うかも知れないけど、遊びの道具は遊びで取り合うのが道理だよな？」

「くつ、レティーシアを玩具扱いとは……！ 許さん、許さんぞヘレシー！ その勝負受けて立つッ！ ……勝った者がレティーシアと婚約する、それで良いな？」

「良い訳がないでしょう。勝手な条件を付けないで頂戴」

「もちろんさ。互いに全力を出し合おう」

「ヘレシー？」

レティーシアが不思議そうに目を瞬かせながら僕の腕を掴んできているけど、僕は君が作った話の流れに合わせただけだからね！ いや本当に！

余裕そうに高みの見物を決め込もうとしてるレティーシアを巻き込みたかったとかそういうのじゃないから！ ……いや本当に！

それにしてもまさかジェイド君とボードゲームで遊ぶ日が来るとはね！ 入学式の日には思いもしなかったなあ。

「よーし、どんな構築にしようかな？」

「ジェイドは貴方にとって格上よ。私は負けた事がないけれど、基礎は十分に押さえている相手だわ。せめてもう少し練習してから……」
「この前レティーシアが使って強かった魔導ゴーレムを試してみようかな。召喚師も並べられるだけ並べて、召喚獣は大型ばかり入れちやおつと」

「子供が最初に考える最強の構築やめなさい」

「初期配置……完了だ。俺は誇りあるグレード家の男。知略でもお前を越えてみせる……！」

「ジェイド、初心者狩り用の戦術は卑怯だと思っわ」

この後、三人でワイワイ話をしながら時には熱くなりつつ激戦を繰り広げたよ！

最後には負けちゃったけど、初見の戦法に対して上手く対応できたのは昨日教えた考え方が身についている証拠だっってレティーシアが頭を撫でて褒めてくれたんだ！ 親身になって教えてくれた先生に報いることができて良かったよ！ その時のジェイド君の目が滅茶苦茶怖かったけど！

予定していた訪問時間を過ぎたからか、感想戦をしている途中で廊下から護衛の人達に声を掛けられてジェイド君は帰る事になったよ！ どうやらこの後も仕事がみっちり詰まっているみたい！ お疲れ様！

結局僕から話も聞かず、ゲームに勝った賞品についても有耶無耶にされて何のために来たのか分からない状態になっちゃったジェイド君だけど、ここに来た時よりも幾らか肩の力が抜けたように見える彼の後ろ姿を眺めているとそう悪い時間でもなかったんじゃないかと思っうね！

コン子さんスイッチ【し】

やあ、僕の名前はヘレシー！

ここ最近学園が休みで暇を持て余している僕は、王都にある庶民向けの飲食店を巡ってご飯屋さんの新規開拓に精を出しているんだ！

今日はお昼ご飯にお肉をいっぱい食べたよ！ 買い占めやら牧場への襲撃やらで一時期少なくなっていた生肉だけど、邪教の事件が解決した事でどこかに買い溜められていた分が一気に市場に出回っているんだってさ！ 大量保管中は魔法で腐らないように管理していたんだろうけど、今安く投げ売りされているお肉はそんな管理下からもとつくに離れて状態が悪くなっている物ばかりだよ！ でも火を通せば大丈夫！ 火を通せば大丈夫！

事件の臨時収入で少しだけ厚みを取り戻した財布を頼りにして、ハッピーとハイドラ（と度々部屋に来るフィリエルさん）へのお土産を買おうと果物屋さんに向かっていると、なんだか道行く人達とやけに目が合う事に気が付いたよ！ 制服を着ている時には貴族じやないかと警戒されたりもするんだけど、今は普段着だから悪目立ちする事もないだろうし……寝癖でもついている？

でも僕は知ってるんだ。こんな時こそ慌てちゃ駄目なんだって！ キョロキョロと周りを見回していると田舎者のお上りさんだと思われて笑われちゃうからね！ 王都を歩くには物怖じせず堂々と前を見る鋼の精神が必要だよ！

そのまま暫く歩いてると更に周りからの視線は増えていって、なんだか憎悪みたいなものも混じり始めてきたよ！ うん、これは流石に寝癖のせいじゃないね！

ハッピー、俯瞰してて何か気になることはない？ ……ハッピー？ 「どうやらここまできな。はい、捕まえた」

「うわ」

急に影が差したと思ったら、誰かが後ろから申し掛かるようにして僕の体を抱き締めてきたよ！ 声だけでも十分に判断できるけど、こんな子供の悪戯みたいな事をする知り合いは一人しかいないね！

間違いなくコン子さんだよ！

「どうかハッピーは絶対に見えていたよね？ 教えてくれたら良かったのに。」

「知って過・いて縛・る縛ヲ方縛ケで縛アした縛励 ◆楽し縛励…うにス 縛励◎縛れて縛← 縛_{口を挟むのも無粋かなあ}縛後※縛◆縛ヨかなあ縛アと縛纏呈検」

それは…：確かにそうかも。きっと僕が逆の立場だったとしても報告しないだろうね！ なら仕方がないか！

「こんにちは、コン子さん。わざわざ気配まで消して何か用？」

「やあ。用なら勿論あるさ。キミ、とんでもない事をしてくれたねえ。私としては満足のいく結果なんだけど、レティーシアは事後処理に追われてお疲れ気味だよ。当然、それを手伝っている私もね」

「そうなんだ。大変だね」

「半分はキミに起因する処理だけだね！ せめてあの塔が無事だったら名前も出せたのに！ あーあ、慣れない作業ばかりで肩が凝ってしまったよ。こうして誰かに寄り掛かって休みたいくらいだ」

「そう言つてコン子さんは僕が潰れない程度に後ろから体重を乗せてくれるけど、これは休んでるといふよりただ単に甘えているだけだよね！」

正しい情報を集めたり逆に隠したりしないといけない貴族の仕事量については想像する事しかできないけど、その原因の一部が僕だつていうのなら甘んじてこの重みと周りからの刺々しい視線を受け入れようと思うよ！

「そのまましばらく針の筵むしろになっていると、やがて満足したらしいコン子さんが僕を解放してくれたよ！ 一切疲れてなさそうな笑顔が眩しいね！」

「ふふ、冗談冗談。私はこの程度で疲れたりなんかしないよ。先に言つたように、私は今回の結果にとても満足しているんだ。君は本当によくやってくれたよ。私の同業者がこの地に定着する可能性を見事に摘んでくれた」

「…：へえ、同業者」

「ああ。思想は極めて善性で、この世界の人間の信仰を集め易い存在

のようだった。放置して大衆に認知されたら神格を得ていたかも知れない。早々に処理できたのは幸運だね」

なるほど、同業者ね。同業者。

これは一つ聞いておかないといけないね。

「あのさ、もしかしてコン子さんって——僕達の“敵”だったりする？」

いつでもハッピーとハイドラを召喚できるように合図を送りながら、コン子さんの顔を覗き込んで表情の変化を確認するよ。はぐらかされて判断を誤るといけないからね。

彼女が持っている神聖な雰囲気とか、僕達とはかけ離れた力の方向性とか、考えてみれば確かにハッピーの敵に似ている気がするよね。個人的には違ってほしいけど、もし本当に敵だったら契約者であるレティーシアとも戦う事になったりするのかな？ 国外追放じゃ済まないだろうなあ。

「ん？ 急に何を言ってる……って目、怖ッ！ 違うよ!? 寧ろ私達は利害が一致しているだろう!? 先に言っておくけど、争っても互いに損するだけだからね！」

『縛ゆ……縛難？ 譁ケ縛ッ 謀才縛控c縛』

「あ、そうなんだ？ 安心したよ」

どうやらコン子さんは僕達の敵じゃなかったみたい！ 総力戦になるとレティーシアの守護獣を知らないこっちの方が明らかに不利だし、知り合いと喧嘩なんてしたくないから良かったよ！

「ああ驚いた。キミ、さっきの冷え切った目で相手の顔を覗き込むのは今後控えた方がいいよ。普段が友好的な分、無表情の威圧感が際立ってる。次やったら捕まえて口付けするから覚悟するように」

「警告の仕方が独特過ぎるけど、まあ分かったよ。そんなに怖い顔をしたつもりはなかったんだけどなあ。……無表情ってこんな感じ？」

「はい捕まえた。取り敢えず日が落ちるまでやろうか」

「ごめんごめんごめん」

そんな風に遊んでいると通りを歩いていた人の全員が僕達の方を見て立ち止まるようになってしまったから、完全に道が詰まっちゃう前

にコン子さんの誘いでおすすめの喫茶店に行く事になったんだ！
事件が解決した件で気分が良いから召喚獣の分も一緒に奢ってくれ
るんだってさ！ やったね！

ハッピーは寮に帰ってから『母胎』さんと『子飼い』さんから入り
方を教わった例の黒い空間の中で一緒にお土産を食べようね！ 最
近ハッピーが王都で顕現した時の影響力の大きさが何となく掴めて
きた僕だよ！

喫茶店までは少し距離があるみたい！ コン子さんは周囲の人集
(ひとだか)りを置き去りにするように素早く離れると、ちらりと振り
返ってわざとらしく肩を竦めてみせたよ！

「いやあ失敗失敗。これでも普段は色々と抑えているんだけどね。
さつきはキミに驚かされた影響で少し素が出てしまったよ。近くに
居て魅了された人達には申し訳ないね」

「皆が射殺すような目で見てきたからビックリしたよ。前にも思った
けどさ、あの状態ってその場で解除できないものなの？ 面倒事の種
になるかも知れないよ」

「できるさ。でも魅了されている側も案外地良いものなんだ。放つ
ておいても悪い事にはならないよ。それに、自然と弱まっていくもの
をわざわざ一人一人に働きかけて解除するのは時間が勿体ないだろ
う？ これでも仕事が多くてね。私の余暇は高いんだ」

「へえ」

その割には会うたびに軽口ばかり叩いて時間を使うよね……と
は言わなかったよ！ 故郷では空気の読める人間として通っていた
からね！

自分の自由時間の希少性について語るコン子さんに相槌を打ちな
がら歩いていると、やや入り組んだ場所にある喫茶店に到着したよ！
草木で覆われた小さな民家にも見えるその外観に反して中が広く
て、全席が個室になってるお洒落なお店！

こういう隠れ家的なお店の情報ってどうやって仕入れているのか
謎なんだけど、何か僕には思い付かない店探しのコツとかあるのかな
？ 貴族向けの情報誌とかあったりする？

「前は空間的に無理があつたから、今回はかなり広い部屋にしてもらつたよ。ここならキミとハイドラも並べるだろう……並べるよね？」

「うん。ありがとう、十分入ると思うよ。……ハイドラ、コン子さんが奢ってくれるみたいなんだけど来——」

「はい暇です大丈夫です！」

案内された個室で椅子に座ってから声を掛けると、足元に現れた黒い水溜まりからハイドラの本体が勢いよく出てきたよ！ さつき軽く合図を送っていたからか、普段以上に反応が早くて助かるね！

そのまま彼女の太く柔らかい足がずるりと一本ずつ引き上げられて、一本、また一本と室内に増えていく毎に床が覆われて、腰が埋まって、胸の高さまで触手が満ちて……あつ、これ結構ギリギリかも！

「もし間違つてたら申し訳ないんだけどさ……ハイドラが普段出してるこの足、ちよつと大きくなつた？」

「はい、そうなんです！ 銀竜さんとの戦いで失つた部分が再生して、前より一回り大きく強くなつたんですよ。今は力を抜いているのでクニヤクニヤで柔らかいですけど、ぎゅつとしたら大体なんでも壊せますー！」

「おお、それは凄いね！ 僕も契約者として鼻が高いよ」

「えへへ……あつ、コン子さんこんにちは。今日はありがとうごさいます」

「こんにちは。元気そうで何よりだよ」

コン子さんが座っている側に足がいかないように上手く全部の足を個室内にねじ込んだハイドラは、正面に座るコン子さんに挨拶をしてから椅子に座つた(?)よ！

結局半分以上僕の体が巻き込まれているけど、腕は動かせるし部屋の扉も開け締めできそうだから前回とは全く状況が違うね！ 広い部屋を用意してもらえたおかげで今日はハイドラも一緒にお茶が楽しめそう！

ハイドラの足に埋まった僕を見ながら無理矢理納得したように何度か頷いたコン子さんは、備え付けのベルを鳴らして店員さんを呼び

出したよ！

「日替わりのケーキセットを三つ。あと、単品のケーキをメニュー表のここから……ここまで貰えるかな」

「は、はい……」

「何か気になる事でもあるのかな？ その彼女は私の友人だよ」

「いついえ！ 申し訳ありません。失礼しました」

こうやって店員さんとコン子さんが話しているのを聞いてると、なんとというか貴族の貫禄みたいなものを感じるよね！ コン子さんは召喚獣とはいえクレセリゼ家の関係者には違いないし、持ち前の神聖な雰囲気も相まって特別な威圧感を生んでいるのかな？

それとメニュー表を範囲指定して頼むひとつって初めて見たよ。値段は元から気にしていないんだらうけど量は大丈夫なのかな？

「今の注文、かなり数が多かった気がするんだけど全部食べられるの？ 僕、昼食に結構食べちゃったんだよね」

「ハイドラが食べるだろう？ それに、私もこの程度の量なら問題はないさ」

「へー」

確かに全長が大きいハイドラは沢山食べられるだらうけど、最初に見た姿が小さな狐さんだったコン子さんにそんな印象はなかったよ！ 人型だと僕より頭一つ分背が高いとはいえ、それでも常識的な人間の大きさに収まっているからね！ 大柄な軍人さんや冒険者の人なんかはもつと大きいよ！

「別に食べないと体が維持できないって訳じゃない。初めて肉体を持つて、新しく湧いてくるようになった生物的な欲求が面白くて仕方がないのさ。心配しなくても私は太ったりしないよ。まあ、女として部分的に大きくなる事はあるかもしれないけどね？」

「口とか？」

「キミが私の事をどう思っているのかよく分かったよ。ハイドラ、そのまま締め上げてやってくれ」

「え、あの、それはちよつと……」

冗談冗談！ コン子さんがたまに大口を叩くのはそれが理由かあ

とか思っていないから！

そんなコン子さんからの容赦ない頼みを断ってくれたハイドラだけど、その割に足がゆっくり絡み付いてきて密度が上がっていつてるのはどうしてだろうね？　もしかしてこれ無意識でやってる？　今のところは粘液で滑りが良いのも相まって気持ちのいい締め付け具合だけど、あんまりやり過ぎると人間は簡単に潰れちゃうから気を付けてね！

それから僕達は次々に運ばれてくる大量のケーキをペロリといったよ！

ハイドラはそこそこ大きな食べ物でも丸呑みできるし沢山食べるのは予想通りだったけど、コン子さんも事前の申告通り同じくらいの量を食べていたね！　いつも余裕そうにしている表情を崩してニコニコしながら食べ進めている姿が可愛かったよ！　そんな風に思ってた事をそのまま伝えたら口の中にケーキを振じ込まれたけど！

店員さんが食後に淹れてくれたお茶もこれもまた美味しくて、食前、食中、食後と毎回違うお茶が用意されていたところに拘りこだわと気遣いを感じられて思わず唸っちゃったよ！　如何にも高級店って感じ！

「いやあ、この店を選んだのは気まぐれだったけど中々悪くなかったね。静かで雰囲気もいい。あと個室が広い」

「そうだね。でもまさか途中で更に注文を追加するとは思わなかったよ。本当にハイドラの分も奢ってもらって良かったの？」

「いいよいいよ。確かにキミ達には仕事を増やされたけど、それ以上に大きな仕事を片付けてもらっているからね。この恩を返すには金銭や物品なんかじゃなくて、もつと価値のある何かが相応しいだろう。例えば……情報なんかはどうだい？　私に何か質問があるのなら、今なら少しくらい立場を踏み越えて答えようじゃないか」

「質問かあ」

コン子さんって明らかに特殊な存在だし、一人の召喚師として気になる事は当然あるよね。でも本人が自分から話さないような事を恩に着せて聞き出すのも何か違う気がするし、そもそも貸しを作ったっていう感覚が無いからそう言われても困っちゃうよ！

かといつて何も訊かないのもコン子さんの方がスッキリしないだろうし……何か彼女が納得してくれそうな丁度いい質問はないかな？

「うーん……ハイドラは何かある？」

「はい！ 契約者の方に使ってもらうために召喚獣として心掛けている事はありますか!」

「え？」

「契約者の方にもっと使ってもらいたいんですが、召喚獣としてどのように努力していくべきだと思いますか？」

「ええ……」

これ、もしかして僕への当て付け……？ ……いや、別契約者のところの召喚獣とこういう話をする機会なんて今まで無かっただろうし、自分が召喚獣としてどんな風に振る舞っていけば良いのか分からなくて不安になっているのかな？

確かに学園ではクラスメイトと召喚獣達が授業を受ける様子は見られても、彼らが家でどういう交流をしているのかは分からないもんね！ これはハイドラの不安に気付けなかった僕が悪かったよ！ 深い質問だなあ！

「それは本人に訊きなよ……とやりたいところだけど、一つ効果的なものを知っている。教えてあげよう」

「本当ですか？ 是非お願いします！」

「召喚師に自分を重用させる方法、それは——女と技術を磨いて、相手を自分に依存させる事だ」

「……？ お、女と技術……？」

「特に異性であれば簡単さ。今回肉体を得てみて分かったが、性欲というものは存外に強い衝動を生む。快感に耐性の無い思春期の少年を虜にするなんて、コトに及びさえすれば私達なら容易だろう」

「あのさあ……」

もうその真面目そうに取り繕った表情で分かるよ。ふざけてるって。

コン子さんにとっては軽い冗談でも、ハイドラは真面目な子なんだ

から内容には気を付けてほしいね！ もし真に受けちゃったら大変だよ！

「僕の召喚獣に変な事教えるのやめてもらっていい？ 先輩風を吹かせたいのは分かるけど」

「は、はい……貴方のハイドラです……」

「悪くない案だと思うんだけどね。実際、召喚師と召喚獣のそういう事って、こんな世界では少なからず起こっているんじゃないかな？」「どうなんだろう。故郷では他に召喚師なんていなかったからなあ」

召喚師が集まっているのは王都だけど、その大半が貴族だつて事を考えると契約を越えた力関係なんて生まれな気がするよね！ 普通は自分の召喚獣よりも先に家の守護獣と仲良くなっているだろうし！

お茶を飲みながら召喚師と召喚獣の関係性について考察していると、暫く僕を拝んでいた(?) ハイドラが我に返って躊躇ためらいがちに口を開いたよ！

「あの……ちなみになんですが、やっぱりコン子さんはそういった経験が豊富に……?」

あつ、ハイドラがコン子さんの触れちゃいけないところに触れようとしてる！

以前エルピスさまの教会に行った時にも似たような話題になって機嫌を損ねちゃったから、今回は同じ過ちを犯さないように契約者として穏便に注意を促そう！

「……ああ、それなら勿論——」

「ハイドラ待って。いくらコン子さんが話し易いひとでも、相手の答え辛い部分に踏み込み過ぎちゃいけないよ。親しい関係にこそ配慮が必要なんだ」

「えっ? ……あつ……ごめんなさい。そうですよね。コン子さん、すみませんでした」

「……ヘレシー、キミの会計は自腹だ」

……なんで?

零距离ブーメランドツジボール

「いらっしやーせー……おー？ あの時のお客さんじゃん。どしたのー？ また何か買っちゃう？」

やあ、僕の名前はヘレシー！

学園施設の復旧がスムーズに進んでいるっていう話を聞いて授業の再開を待ちきれずに教材の点検をしていた僕は、その途中でハッピーに預けたままだった草刈り鎌の事を思い出して状態を確認してみる事にしたんだ！

そしたら刃が欠けててビックリ！ ……いや、あの使い方をしている程度で済んでいる方が凄いのかな？ 何にせよ修繕が必要な状態だったから、鎌を買った武具屋さんに持ち込む事にしたよ！

昼過ぎの中途半端な時間だからか他にお客さんはいないね！ もしかしたらすぐに直してもらえるかも？

「こんにちは。実は前に買った鎌が刃こぼれしちゃってさ、少し見てもらえないかな」

「げ、修繕かあ。今から休憩しようと思ってたのに」

「悪いね。代わりと言ったらなんだけど、美味しいお菓子を持って来たから後で食べてよ」

そう言っ僕が店員さんの目の前に置いたのは、昨日の喫茶店で結局奢ってくれたコン子さんが持たせてくれたお土産の残り！

殆どは夜にハッピーと食べちゃったんだけど、途中で勿体なく感じて残しておいたのが役に立って良かったよ！ 貧乏性も偶には役に立つね！

「え、ホント？ わざわざ？ しかもそれめっちゃ高級そうなやつじゃん。……もしかして、あたしの事口説こうとしてたりする？」

「この鎌が役に立ったからそのお礼だよ。間接的にだけど、色んなひとを助けられたから」

『子飼い』さん曰く、あのまま草刈り鎌を使わなくてもフィリエルさんは処理できたらしいけど、少し時間が掛かる状態になってたのは確かだったみたい！ どうもこの世界はフィリエルさん側を味方する

ように大きく偏ってるんだってさ！　ただの善良な田舎農民である僕達に対して随分と厳しい世界だよな！

あの時はジエイド君が一階で溺れてて危なかったし、草刈り鎌で時短できたのは本当に助かったよ！　よつ、貴族を救った女！　天使殺し！

「ホントにそれだけかなー？　あたし結構モテるからなー。こう見えてちゃんとした格好してたら外でも声掛けられちゃうからなー。お客さんが惚れちゃうのも仕方がないっていうかー」

「いらないみたいだからこのお菓子は返してもらおうね」

「あー！　いるって！　もー冗談じゃん。前店に来てくれた時にお客さんがそういう人じゃないのは分かってるから。ほいじゃ、その鎌見せて？」

素早く回収されていったお菓子の箱と入れ替えるようにして鎌をカウンターのの上に置くと、店員さんは眠そうだった目を見開いて真剣そうにそれを観察し始めたよ！　武器と向き合う時に雰囲気を一変させる様子はまさに仕事人って感じで格好いいね！

「ホントだ、欠けちゃってんねー……え、ていうかこれ……柄の方がヤバくない……？」　【アナライズ】

おー、魔法使ってる。魔力を持つてる専門職の人は仕事内容に応じた魔導具を使う事があるらしいけど、目的に沿った魔法が自前で使えるなら更に便利そうだね！

なんだか店員さんの顔が一気に怖くなっちゃったけど、そんなに雑に扱ってはいないんだけどなあ。ハッピーは農具の使い方が上手いから任せても安心だよ。

「お客さん、ちゃんと答えてね。これ、自分で使った？　誰かに貸した？」

「……友達に貸したよ。そんな事も分かるんだ？　魔法って凄いなあ」

「属性なんかじゃない……気とか、神秘とか……なんかそういう、あたしが見て取れる範囲にない何かがこびり付いている。それも、とびきり悪いやつが」

「……魔法って凄いなあ」

「本当だからね？ 事情がありそうだし今日はこのまま研いであげるけど、早く清めてもらった方がいいよ」

そう言っただけ分厚い手袋型の魔導具を装着した店員さんは、それを鈍く光らせながら鎌を持って店の奥へと消えて行ったよ！ 仰々しい防具を着けて丁寧に運んでくれるのは道具の持ち主として嬉しい事だよ！

僕は待っている間に店内でも眺めて時間を潰そうかな！ 農具だけじゃなくて害獣駆除用の武器なんかも買っただけ帰れば故郷で人気者になれるかも！ この剣とかピカピカで格好いい……あ、絶対無理な値段！

「おまたせー。どーよ、これで文句ないっしょ」

商品の値札を見て一喜一憂していると、店内に鳴り響いていた大きな音が止んで、眠そうな目に戻った店員さんがカウンターに戻ってきたよ！

早速鎌の状態を確認すると刃こぼれがバツチリ無くなってるね！ 研いだ分だけ短くはなっているんだろうけど、素人目には分からないなあ。修繕用の魔法を使ってくれたのかな？

「おおー、流石。凄く綺麗な仕上がりだね」

「っしょ？ ま、結構色々使っちゃったけどね。フツーはここまでやらないんだけど、お客さんはお菓子くれたから特別ってコトで」

「ありがとう。持ってきた甲斐があったよ」

手を腰に当てて得意気に胸を張ってる店員さんはとつても上機嫌そう！ さっきまでの険しい表情が嘘みたいだね！ 修繕作業を進める中で、僕が草刈り鎌を雑に扱った訳じゃないっていう事が分かってもらったのかな？

「なんだか表情が明るくなったように見えるけど、奥で何かあったの？」

「ん？ んー、別にそういう訳じゃないんだけど……やっぱ力一杯仕事したらスッキリするからそう見えるのかも？ おりゃーって感じで」

「力一杯……神様なんかいらなんて念じながら？」

「そーそー、神なんていらねーって思いながら力任せに……って危なっ！ 何言わせようとしてんの!？」

「いや、前に自分でそう言ってたよね……？」

鎌を買った時に店員さんが語ってくれた話だよ！ あの時はその破天荒っぷりに驚いたものだけど、店員さんがそんな人だからこそ鎌に特殊な性質が宿った訳だし今は感謝しているよ！

一見関係がなさそうな誰かの行動でも、巡り巡って自分の役に立つ事もある。今回の件では色々勉強になったね！

「……言ってるじゃない」

「え？」

「あたしは神様がいらなんて……言ってる。きつとお客さんの聞き間違いだよ」

「いやいや、そんな訳……」

「神様がいらないワケないじゃん！ お客さん、冗談にもさあ、言ってるのいいの悪いのがあるんだよ？ もー、勘弁してよねー」

「……」

あれ、もしかして店員さん……ついどこかの教会から怒られた？

実は今も監視が付いてて、発言内容によっては消されたりする感じ？

それとも本当に改心したとか……それはないか！

「にひひ。まあ聞いてほしいから勿体ぶらずに言っちゃうんだけどー、実はこの前久々に会った昔の友達に誘われて、人生で初めて賭け事で遊んでみたんだよねー。そしたらどうなったと思う？ 何かよく分かんないけど大勝ちしちゃったの！ んで、そんな時に思ったわけ、神様いるわって。あたしの神様は賭け事の神様だったんだって。つば信じるべきは神様よ。神様サイコー。しかもその友達から『才能があるから次はもっと大金を賭けられる所に行こうよ。私の知り合いがやってる店だから安心だよ』ってまた誘われてさー、二つ返事で約束しちゃったんだー」

「あつ……」

うん、改心は全くしてないね！　というか別の問題に巻き込まれて
気がするね！　人生楽しそうで羨ましいなあ！　でも付き合う相
手は選んだ方がいいよ！

友達に危ないレベルに乗せられそうになってる店員さんの自慢話
(?)を決して肯定せず程よく相槌を打ちながら代金の支払いを済ま
せた僕は、キリのいいところで店を出る事にしたよ！　用事が済んだ
のに長居していたら迷惑になるからね！

「それじゃあ僕はそろそろ帰ろうかな。今日は本当に助かったよ」

「へ？　んー、そう？　了解りようかい。そっちこそ差し入れあり
がとね。また何かあったらよろしくー」

「うん。じゃあまたね」

「ありあとやつしたー。……あーっ、お客さんちよつと待つて！」

背を向けて歩き出そうとしたところで店員さんに呼び止められた
よ！

なんだろう、お金の計算が間違ってたとか？

「すっかり忘れてた。最初に言ったその鎌に悪いモノが付いてるって
話。それちゃんとした方がいいからね、ホントに！」

「あーそれね。うん。忠告ありがとう」

「ちよつとー？　放っておくつもりでしょ。本当にヤバいんだって。
柄の部分に黒くて怖い何かが染み付いてんの。友達に貸してからそ
うなつたんだよね？」

「まあ……そうだね」

「お客さんって人間関係に疎そうだから教えたげる。付き合う相手は
選んだ方がいいよ」

ええ……？　それ言われるの僕の方なんだ……？

そつくりそのまま店員さんに忠告したい内容なんだけど……人間、
自分のことを客観的に見るのは難しいって事なのかな？

「悪い言い方になっちゃうけどさー、その人絶対に怪しいからこれ以
上付き合うのは考えた方がいいよ。自分の目では優しい人に見え
なくても、他の人からすればヤバいってすぐに分かったりするもん
だから」

「あの……うん。そうかもね」

店員さん、もしかして鏡に向かって喋ってる？



「ハッピーは……僕の家族だよね」

『縛医^{え、もしかして}√b縛励^{違ったりするんで}。縛励※騎輔▲縛溘j縛呐』

武具屋さんを出てから少し買い物をして、寮に戻ったのは夕暮れ時！
片付けを済ませた僕は『母胎』さん達と会食した時の謎空間にお茶を持ち込んでハッピーと一服する事にしたよ！

誰も怖がらせず彼女と顔を合わせられるこの場所は本当に便利だね！
王都に来てから色々と気を遣わないといけない事が増えたから、守護獣と一緒に寛ぐだけでも一苦労だよ！

「いやあ、今日の武具屋さんもそうだけど、最近になって故郷では疑問にも思わなかったような事を聞かれたりするからさ。何か僕の認識がズレてるのかもって不安になっちゃって。僕とハッピーの間柄は家族って事で間違いないよね？」

『縛昂^{そう}≧險纏上^{言われると}1纏丸^ど↓窶ヲ窶ヲ^{なん}縛ウ縛？^で→纏^{しよ}薙^うヲ縛^{元々}励^{血縁}g縛??^{関係では}よ

？縲^{ない}？邵未董^でゆヲ縛ツ縛エ縛ヲ縛^{の問題だと}。縲峨^{思います}…拷縛域』

「ハッピーは僕の事どう思ってる？」

『窶ヲヲ透^{目の離せない}縛髪^弟縛[？]シ』

「おっ、言ってくれるねえ」

『縛阪c』
ハッピーが生意気な口を利いてくれたお返しに、近くにあった二つの頭をぐりぐりと乱暴に撫で回してあげたよ！
溶けて柔らかくなってる部分が血と空気を吐き出しながら沈み込んでいく感覚が懐かしいね！

実家ではよくこんなじゃれ合いをしてたなあ。作業の時間になっても遊んでて母さんに怒られたりしたっけ。母さん、武器屋のお爺ちゃん、自称門番のお婆さん……村のみんなは今頃何をしてるんだろう。

「……ねえ、ハッピー。今日は久しぶりに一緒に寝ない?」

故郷の事を考えてると少し寂しくなっちゃったよ。ここまで長い期間村から離れた事なんてなかったし、学園を卒業するまで当分の間は帰れないからね。村長さんも慢性的に胃を痛めてるから心配だよ。

でも、こんな気持ちになっても僕には同じ思い出を共有できる家族がいる。常に一緒にいてくれる守護獣がいる。これはとても幸運な事だと思うよ。

『縛縛??∞響隘悶ヲ縛縛?よイ螻蛄昂<蜃コ隧ア纏』

「ありがとう。じゃあ僕は部屋に戻って着替えとお菓子を持つてくるね。ハッピーもまだ果物食べるでしょ?」

『縛企。控』縛励。U縛呐?や?ヲ寔縛昂≧縛?縲∞昂 k 譎る俣縛才縛工纏九U縛ア諧?霑題イキ縛縛混九?』

「おつ、いいね。やろうか」

ちよつとしんみりしちやつた僕を元氣付けようとしてか、ハッピーがゲームに誘ってくれたよ!

僕の希望を聞いてくれつつ、気持ちが落ち込まないように明るい話題も提供してくれる……彼女は昔から本当にこういう氣遣いが上手だよね!



『移動式槽の索敵効果で重騎兵隊の突撃が届きます。お疲れ様で遣サ蝮募シ乗才薙?邏謨蜉譚懊ヲ驥埼イ主?髻翫遯…茶縛悟翫縛セ縛呐?ゆコ追イ纏悟ア控ヲ縛励◆縲ゆ』

「……」

でもさ、励ましてくれるんだつたらもう少し手心というか、なんというか……うん。別に手加減して勝ちを譲ってくれとは言わないけどさ、その……うん。

……ハッピーってまだ少し子供っぽいところがあるよね!

そういう無邪気さも彼女の魅力ではあるんだけど、兄代わりとしてはこれからも彼女が精神的に成長していけるように見守っていこうと思うよ!